市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第15集

市原市小ノ台（おのだい）遺跡

2010

株式会社　城装
市原市教育委員会

序　　文

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれております。そのため、有史以来多くの人々の生活がこの地で営まれ、郷土の歴史が育まれてきました。国指定史跡の上総国分寺跡や国分尼寺跡、「王賜」銘鉄剣などに代表される文化遺産は、これら先人の足跡の一端を今に伝えています。

近年、大規模開発は影をひそめているものの、開発と文化財の保護とは相反するものであり、開発によって失われつつある貴重な文化財を保護・保存することは、これからも地方自治体の大きな責務です。

本報告書は、砂利採取に伴い発掘調査がなされた「小ノ台遺跡」の成果をまとめたもので、これまで調査事例の少なかった養老川中流域における古墳時代後期の集落が検出されました。

本書が、学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願っています。

終りに、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご指導ならびにご協力をいただきました株式会社城装、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心からお礼申しあげます。

平成22年2月

市原市教育委員会

教育長　山　崎　　正　夫

例　　言

1　本書は、千葉県市原市福増字小ノ台477-4ほかに所在する小ノ台遺跡の発掘調査報告書である。
2　発掘調査および整理作業・報告書刊行は、株式会社城装の計画する土砂採取にともない、同社の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもと、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが実施した。
3　本報告書所収の調査は下記の通りである。
　確認調査（調査コード　セ435）　　760㎡／7,600㎡
　　調査期間：平成20年6月27日～同年７月18日　　調査担当：小川浩一
　本調査　（調査コード　セ448）　　1,754㎡
　　調査期間：平成21年4月20日～同年7月17日　　調査担当：牧野光隆
　整理作業
　　期間：平成21年8月1日～平成22年2月12日　　担当：牧野光隆
4　本書の編集・執筆は、牧野が担当した。
5　調査に際しては、公共測量に基づく基準点測量を実施していない。そのため、図中に示す座標値（平面直角座標第Ⅸ系・日本測地系）及び北方位（座標北）は市原市遺跡情報システム等から図上にて求めたものであり、厳密なものではない。また、各地区全体図中に1点のみ世界測地系変換座標（TKY2JGD ver1.3.79による）を記した。水準については、近隣の既知点より求めて使用した。

本文目次

第１章　調査の経過と概要…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　本調査の概要…… 1
第２章　遺跡の位置と環境…… 1
　第１節　地理的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 4
第３章　調査の方法と成果…… 6
　第１節　調査の方法…… 6
　第２節　遺跡の層序と土質…… 6
　第３節　遺構と出土遺物…… 6
　（１）Ａ区 竪穴建物跡 …… 6
　（２）Ａ区 土抗 …… 27
　（３）Ｂ区…… 29
　（４）Ｃ区 竪穴建物跡 …… 32
　（５）Ｃ区 土坑及び溝跡 …… 39
第４章　総括…… 40

挿図目次

第１図　小ノ台遺跡位置図 …… 2
第２図　小ノ台遺跡周辺地形図 …… 3
第３図　確認調査トレンチ配置図 …… 5
第４図　子持勾玉実測図（Ａ区北側斜面下表採）… 5
第５図　小ノ台遺跡本調査全体図 …… 7
第６図　Ａ区全体図（１）…… 8
第７図　SI01・SI02遺構図 …… 9
第８図　SI01・SI02出土遺物、SI03遺構図・出土遺物 …… 10
第９図　SI04遺構図 …… 12
第10図　SI04遺物分布図・出土遺物（１）…… 13
第11図　SI04出土遺物（２）…… 14
第12図　SI04出土遺物（３）…… 15
第13図　SI05遺構図・出土遺物 …… 16
第14図　SI06・SI07遺構図、SI06出土遺物（１）… 17
第15図　SI06出土遺物（２）、SI07出土遺物…… 18
第16図　SI08遺構図・出土遺物 …… 19
第17図　Ａ区全体図（２）…… 20
第18図　SI09遺構図 …… 21
第19図　SI09遺物分布図・出土遺物（１）…… 22
第20図　SI09出土遺物（２）…… 23
第21図　SI11遺構図・出土遺物 …… 24
第22図　SI12遺構図・出土遺物 …… 25
第23図　SI10・SK02遺構図・出土遺物 …… 26
第24図　SK01･03･04･05･06遺構図、SK10出土遺物、遺構外出土遺物 …… 28
第25図　Ｂ区全体図・Ｂ区西壁断面図 …… 29
第26図　SI13遺構図・遺物分布図 …… 30
第27図　SI13出土遺物 …… 31
第28図　Ｃ区全体図・断面図 …… 32
第29図　SI14遺構図・出土遺物 …… 33
第30図　SI15遺構図 …… 34
第31図　SI15遺物分布図・出土遺物（１）…… 35
第32図　SI15出土遺物（２）…… 36
第33図　SI16・SI17遺構図・出土遺物 …… 38
第34図　SK07・SK08遺構図、SD07出土遺物 …… 39

図版目次

扉　　小ノ台遺跡周辺垂直写真（1961年撮影）
図版１　Ａ区全景
図版２　遺跡と周辺の地形
図版３　SI01・02・03・04
図版４　SI03・04
図版５　SI04・05・06・07・08、SD02
図版６　SI06・07・08・09
図版７　SI09・10、SK02
図版８　SI10・11・12、SK03・04
図版９　B区　SI13、SD06
図版10　SI13、C区　SI14・15・16・17、SK07・08、SD07・08
図版11　SI14・15・16、SK07、SD07・08
図版12　SI17・SK01・02・03・04・05
図版13　SI06、SK01・05・06・07・08・10、SD05
図版14　SI04・09・13出土遺物
図版15　SI01・02・03・04・06出土遺物
図版16　SI04・06・07・08出土遺物
図版17　SI09・10・11・13出土遺物
図版18　SI13・15・16出土遺物
図版19　SI04・06・15・17、SK02・SD07出土遺物
図版20　SI01・02・03・04・05・06・07・08出土遺物
図版21　SI08・09・10・11・12・13・14・15出土遺物
図版22　SI16・17・04・09・13、SK02・10出土遺物、遺構外出土旧石器、Ａ区北側斜面下表採子持勾玉

凡　　例

1　遺構名は調査時とは異なり、変更している（第1表参照）。竪穴建物跡をSI、土抗・陥し穴をSK、溝跡をSDとした。
2　挿図中に使用したトーンは以下のとおり。

遺構　火床面　　焼土　　粘土

遺物　赤彩・釉　　黒色処理・石器使用痕　　灰釉陶器・陶磁器

第１表　小ノ台遺跡遺構一覧

遺構番号	調査時№	種別	時代	挿図番号	図版番号	備考
SI01	001	竪穴建物跡	古墳時代後期	7・8	3・15・20	
SI02	002	竪穴建物跡	古墳時代後期	7・8	1・3・15・20	確認調査２トレ
SI03	003	竪穴建物跡	古墳時代後期	8	3・4・15・20	確認調査２トレ
SI04	004	竪穴建物跡	古墳時代後期	9～12	3・4・5・14・15・16・19・20・22	確認調査２トレ
SI05	007	竪穴建物跡	古墳時代後期	13	5・20	
SI06	008	竪穴建物跡	古墳時代後期	14・15	5・6・13・15・16・19・20	確認調査４トレ
SI07	009	竪穴建物跡	平安時代	14・15	5・6・16・20	確認調査４トレ
SI08	010	竪穴建物跡	古墳時代後期	16	5・6・16・20・21	
SI09	011	竪穴建物跡	古墳時代後期	18～20	6・7・14・17・21・22	確認調査５トレ
SI10	023	竪穴建物跡	古墳時代後期	23	7・8・17・21	
SI11	013	竪穴建物跡	古墳時代後期	21	1・8・17・21	確認調査７トレ
SI12	014	竪穴建物跡	古墳時代後期	22	1・8・21	確認調査８トレ
SI13	019	竪穴建物跡	古墳時代後期	25～27	9・10・14・17・18・21・22	確認調査13トレ
SI14	022	竪穴建物跡	奈良・平安時代	29	10・21	確認調査17トレ
SI15	020	竪穴建物跡	平安時代	30～32	10・11・18・19・21	
SI16	025	竪穴建物跡	奈良・平安時代	33	10・11・18・22	確認調査18トレ
SI17	021	竪穴建物跡	平安時代か	33	10・12・19・22	確認調査18トレ
SK01	012	土坑	古墳～平安	24	12・13	
SK02	024	土坑	弥生時代	23	7・12・19・22	
SK03	017	陥し穴	縄文時代	24	8・12	
SK04	015	陥し穴	縄文時代	24	8・12	確認調査７トレ
SK05	016	陥し穴	縄文時代	24	12・13	
SK06	018	陥し穴	縄文時代	24	13	
SK07	032	土坑	近世	34	11・13	
SK08	029	土坑	近世	34	13	
SK09	005	土坑か	時期不明	5・6		焼土のみでプラン不明確
SK10	006	土坑か	時期不明	5・6・24	13・22	焼土のみでプラン不明確
SK11	なし	土坑か	時期不明	5・6		焼土のみでプラン不明確
SD01	溝１	溝跡	近世	5・6	1・4	
SD02	溝２	溝跡	近世	5・6	5	
SD03	溝３	溝跡	近世	5・17		
SD04	溝４	溝跡	近世	5・17		
SD05	溝５	溝跡	近世	5・6・14・17	1・13	
SD06	なし	溝跡	近世	5・25・26	9	確認調査13トレ
SD07	031	溝跡	近世	5・28・29・34	10・11・19	確認調査18トレ
SD08	030	溝跡	近世	5・28・30	10・11	

第1章　調査の経過と概要

第1節　調査に至る経緯

平成15年9月、当該地について旧地権者より埋蔵文化財の有無が市原市教育委員会ふるさと文化課に照会された。市原市埋蔵文化財分布地図では、小ノ台遺跡（遺跡番号573）の分布範囲は当該地からみて農免道路（市道40号線）を越えた西側であったが、旧来の台地はこの道路で分断されたものの本来はつながっており、台地の基部は当該地にあった。そのため、ふるさと文化課が試掘を実施したところ、古墳時代後期の竪穴建物跡等を確認するに至った。その結果、埋蔵文化財包蔵地である旨の回答をし、分布地図の包蔵地範囲を修正した。

平成20年、株式会社城装がこの地で砂利採取の計画を立案し、5月19日付で「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。千葉県教育委員会教育庁文化財課とふるさと文化課と同社での協議の結果、同社が埋蔵文化財調査の必要性を理解し協力していただくこととなり、記録保存の方向で確認調査を実施することになった。

確認調査は、ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが実施した。7,600㎡の工事範囲において24ヶ所760㎡のトレンチ調査（第3図）の結果、縄文時代陥し穴1基、古墳時代竪穴住居跡7軒・土坑1基を確認した。その結果に基づき、ふるさと文化課において本調査が必要な範囲を1,754㎡に絞り込み、平成21年4月20日より、本調査を開始した。

第2節　本調査の概要

A区では、縄文時代の陥し穴4基・弥生時代の土坑1基・古墳時代後期後半～終末期の竪穴建物跡11軒・平安時代の竪穴建物跡1軒・近世の溝跡5条を検出したほか、遺構外より旧石器時代の縦長剥片1点（第24図）が出土した。出土遺物には、古墳時代前期の土師器片も少量ではあるがみられた。

B区は確認調査13トレで把握していた古墳時代後期後半の竪穴建物跡1軒と、それを切るように東西に走る近世溝跡1条を調査した。

C区は、台地南側斜面の落ち際に位置し、奈良・平安時代の竪穴建物跡4軒が、東西方向に重なるように検出された。他に、焼土を伴う近世の土坑2基と近世溝跡2条を調査した。

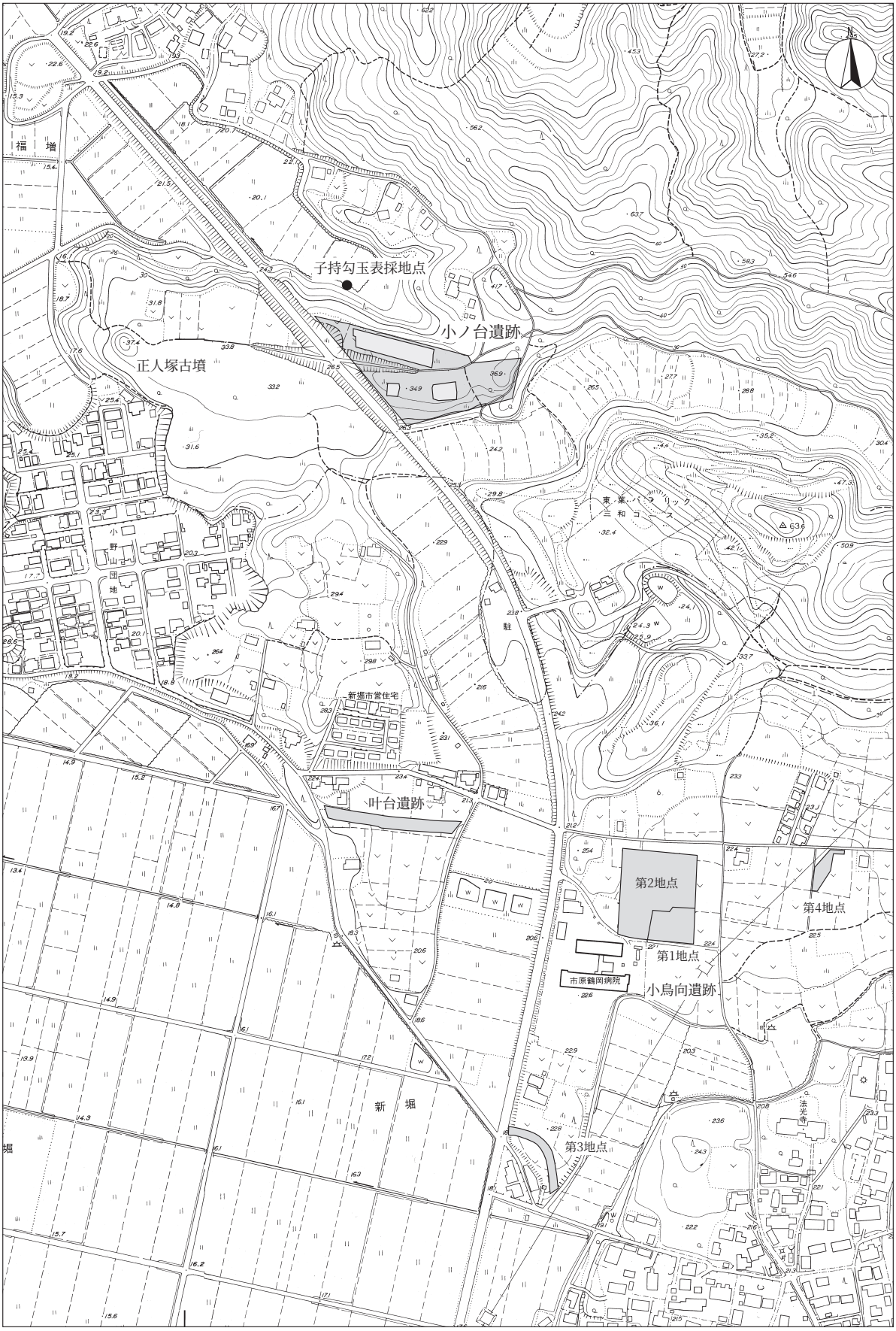
台地平坦部は古墳時代後期後半から終末期にかけての集落として利用され、やや空いて奈良・平安時代には主に南斜面寄りが断続的に利用された。その後おそらく近世に開墾が行われ、土の移動を伴う溝の掘削などが行われたものとみられる。その性格は、区画や排水などが考えられる。

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境（第1・2図、図版扉・図版2）

本遺跡は、蛇行しながら北へと流れる養老川中流域の右岸に位置し、西に沖積平野を望む標高30～35mの小台地上に展開する。周辺地形は複雑に開析され、小支谷の奥に谷津田が入り込む。北と南を小支谷に挟まれ、西と南に向かって張り出す舌状台地の基部に調査区は位置する。台地の西端には市西小学校が建てられ、さらには小野山団地の造成によって地形が改変されている。台地の基部は

第1図　小ノ台遺跡位置図



市原市基本図 (昭和 55 年測図) より作図

0　200 m
（1／5,000）

第2図　小ノ台遺跡周辺地形図

さらに北側の標高55m ～70mの東西に延びる尾根へと接続する。

昭和47年、この舌状台地を南北に縦断する市道40号線（通称「農免道路」）が通されたことで、台地は東西に切り通し状に分断された。道路との比高差は8m前後である。その時に、台地上に東西に通されていた生活道路も、この農免道路に接道するために深く切り通されることとなり、現状の地形になったものである。この旧来の地形をみると、小ノ台遺跡で検出された集落の分布の中心は、市道の対岸である西側台地上平坦部にあることが推定される。

調査区の現地表面は、A区西端が標高33.0m前後、東端が33.5mとやや東に向かって高くなる。B区北側で33.2m、C区北側は33.5mで、共に南半部分は斜面となり南側の谷へと落ちていく。北側斜面の傾斜角度は30°を超える急傾斜であり、谷津田（休耕中）との比高差は約13mである。南側斜面は北側よりやや緩く落ち、谷との比高差は約10mである。

第2節　歴史的環境（第1図下図周辺遺跡分布図参照）

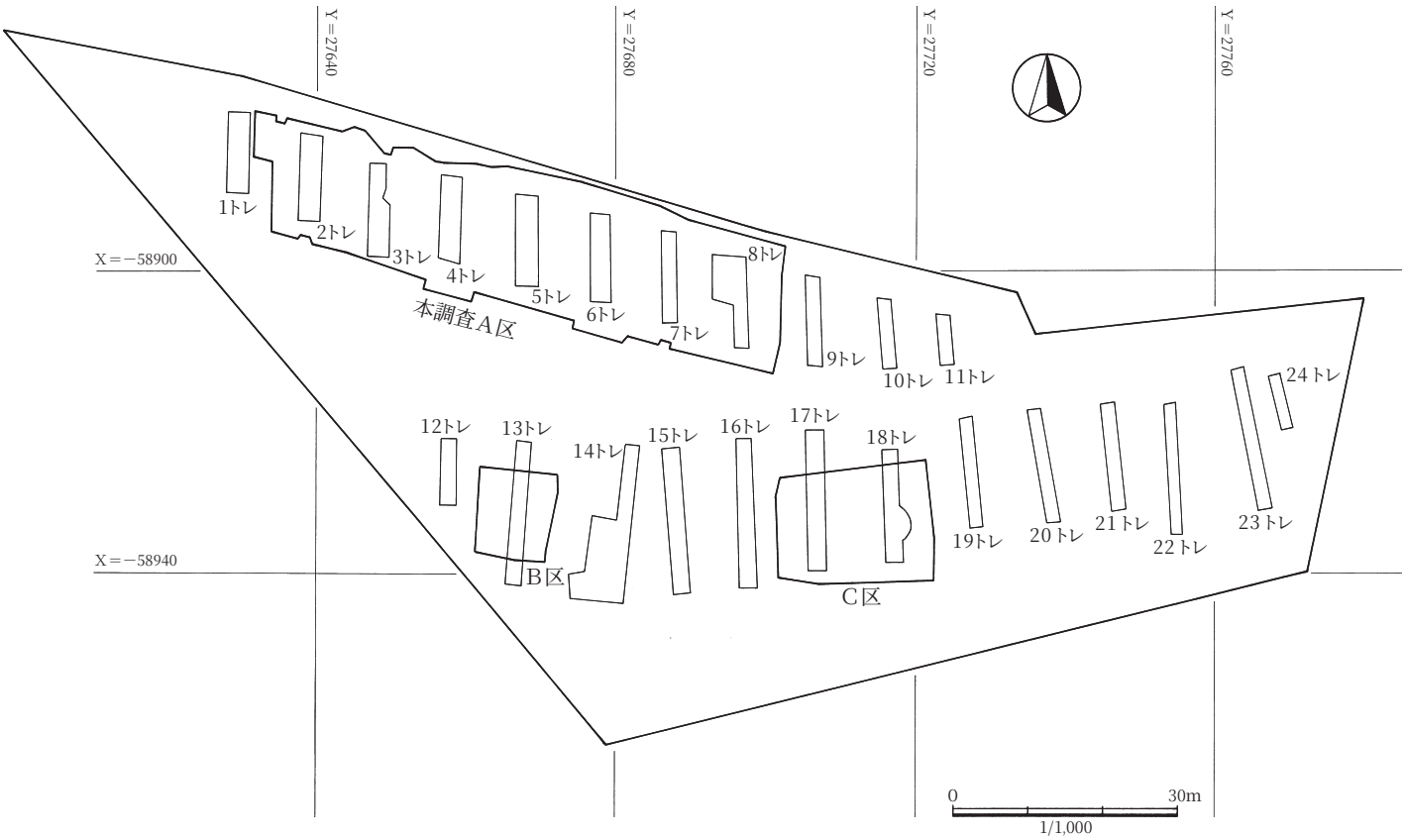
小ノ台遺跡（図上番号1）は、東に600mほどに位置する福増山ノ神遺跡（2）とは、やせ尾根伝いにつながっている。山ノ神遺跡は弥生時代後期及び古墳時代後期の集落と奈良・平安時代の墳墓などが調査されている。また、小ノ台遺跡から南に張り出した小台地先端の一段低地となった部分には叶台遺跡（3）がある。市道161号線改良工事に伴う調査によって、弥生時代中期から古墳時代後期の継続的な密度の高い集落跡が検出された。この2遺跡は、その時期や占地からみて、小ノ台遺跡と密接な関係をもつものであろう。

さらに周辺をみると、房総半島での人口増加期である古墳時代後期の集落の検出は意外と少ないことに気がつく。北西に1.1kmの山倉前畑遺跡（4）では竪穴建物跡1軒、南東に2.0kmの磯ヶ谷北旭台遺跡でも竪穴建物跡1軒が調査されたのみである。さらに養老川左岸にまで目を向けると新生荻原野遺跡C2地区（6）において集落跡が調査されている。市内北部には加茂遺跡・台遺跡をはじめとする国分寺台遺跡群や千草山遺跡、椎津茶ノ木遺跡など、当該期の大集落が存在するが、養老川中流域においては、発掘調査自体の少なさもあるものの、その分布は限定されたものとみられる。

近隣の古墳では、西に200mの台地縁辺部に径22mの円墳とみられる正人塚古墳（第2図）が知られているが、時期は判明していない。また、やはり時期や詳細は不明だが、市西小学校近辺には数郷古墳群（消滅）が、南東に400m付近に新堀馬場古墳群がある。北西に2km離れた国分寺台遺跡群の南東隅には、人物形象埴輪列を有する1号墳が著名な山倉古墳群（8）が位置し、1号墳は6世紀後半の築造とみられている。新殿古墳群（9）では終末期の古墳が、海士遺跡群三入道地区（10）では前期の方墳がここ数年に調査されている。他には、福増古墳群（11）や武士古墳群（12）が知られ、古墳時代終末期から平安時代前葉の墳墓群全体を調査した武士遺跡（7・福増浄水場）は本遺跡から東に1.1kmほど離れている。

奈良・平安時代には海上郡の群家推定地である西野遺跡（13）をはじめ、瓦塔片が出土した孟地遺跡（14・山倉ダム湖内）や井戸跡から瓢箪が出土したことで雨乞い祭祀の可能性を指摘されている池ノ谷遺跡（15）、方形周溝状遺構を調査した大清水遺跡（16・文化の森）がある。

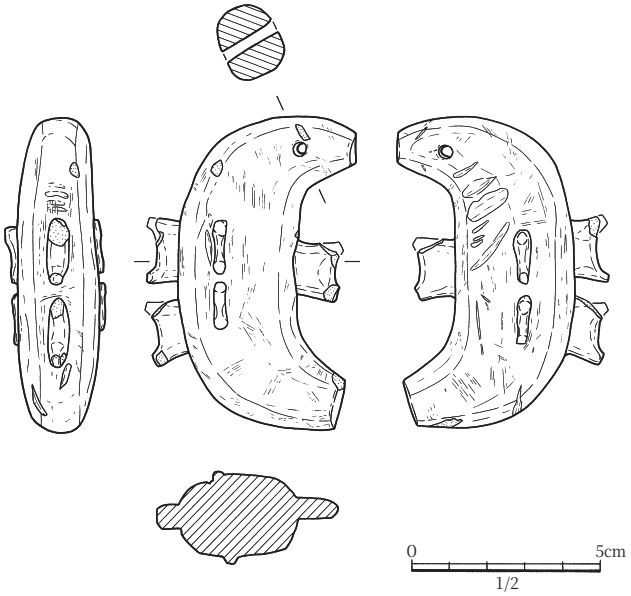
なお、調査区A区西端の北側斜面下（現状地番：福増字フルカナイ465－1付近）より、子持勾玉が表採されている。古墳時代中期の所産とみられるこの勾玉と、今回調査区の古墳時代後期を中心と



第3図　確認調査トレンチ配置図

した集落跡とでは、若干の時期差がある。しかし、斜面の上でさらに西側へとひろがる小ノ台遺跡と、この勾玉との関連性は極めて高いと思われる。そのため、所蔵者の林利夫氏（福増在住）の好意によりここに掲載する（第2図地形図・第4図実測図・図版22）。

聞き取りによれば、戦前に、遺跡の北側に入り込む谷の字「古カナヘ」の「しゃみせんばち」と呼ぶ水田（現状地番：福増638）の「やな」（斜面のことか）において（第2図地形図に●）、当時小学生であった林氏が採取したものである。これを見つけた児童の驚きと喜びは想像に難くない。以来、大切に保管され、折にふれて我々文化財関係者の知れるところとなった。全長8.3cm、重さ133.57gであり、滑石製とみられる。



第4図　子持勾玉実測図（A区北側斜面下表採）

第3章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

本調査範囲は3カ所に分かれたため、便宜的にA区・B区・C区と呼称し、北西のA区西端より調査を開始した。確認面直上までの表土層を重機で除去した後、人力で精査し、遺構を検出した。遺構確認面は極めて浅い場所が多く、現地表面から10cm程度の部分も少なくなかった。

土質は極めて粘性が高く、調査は難航した。雨季でもあったためか、深めのピットでは水が湧いた。しかし少しでも日光にあたると強固に締まり、移植鏝やジョレンの刃がたたなくなるため、確認面は全面ブルーシートで覆うこととした。このシートの開け閉めに相当の労力を費やすこととなった。

また、公共測量成果に基づく基準点測量を実施できなかったため、A区の東西方向に任意の基準ラインを設定し、そこから方眼杭を調査区内に落とし、各遺構を平板測量で図化した。最終的に、整理作業においてGIS及び市原市地形図を利用し、平面直角座標（日本測地系第Ⅸ系）に変換した。

第2節　遺跡の層序と土質

遺構確認面は現表土から5～30cm程下層と浅い。検出された古墳時代および平安時代の竪穴建物跡も極めて浅いもので、竹と樹木の根の影響を著しく受けていた。調査前は山林と化していたが、以前は畑地として耕作がなされていたと聞く。しかし、遺構に対して耕作の影響は顕著にはみられなかった。その耕作以前、おそらく近世において、この台地上のかなりの土が斜面に流れたか、もしくは動かされたのではないかと思われる。

地山上層は粘性の強い褐色粘土であり、さらに50cmほど下層には灰白～黄白色粘土が堆積している。古墳時代後期の遺構覆土は地山粘土に酷似しており、やや色が暗いかと感じる程度であったため、確認は困難であった。ただ、C区においては、地山上層部分にいわゆるソフトローム状の土を確認できた。A区の東側1/3ほどのエリアも、地山褐色粘土の色が明るくなる傾向にあった。

この粘土質の土層のためか、出土した土器・土師器の大半と須恵器の一部は、器壁表面が溶けたような状態であった。また、台地上の竪穴建物跡によく観察される硬化した床面は、この遺跡では認識できなかった。床面が露出した状態で一時でも生活があれば、床面の硬化と非硬化の差異が表れないことはあり得ないと考えるが、この粘土質の床面では、年月を経て同化してしまうのであろうか。

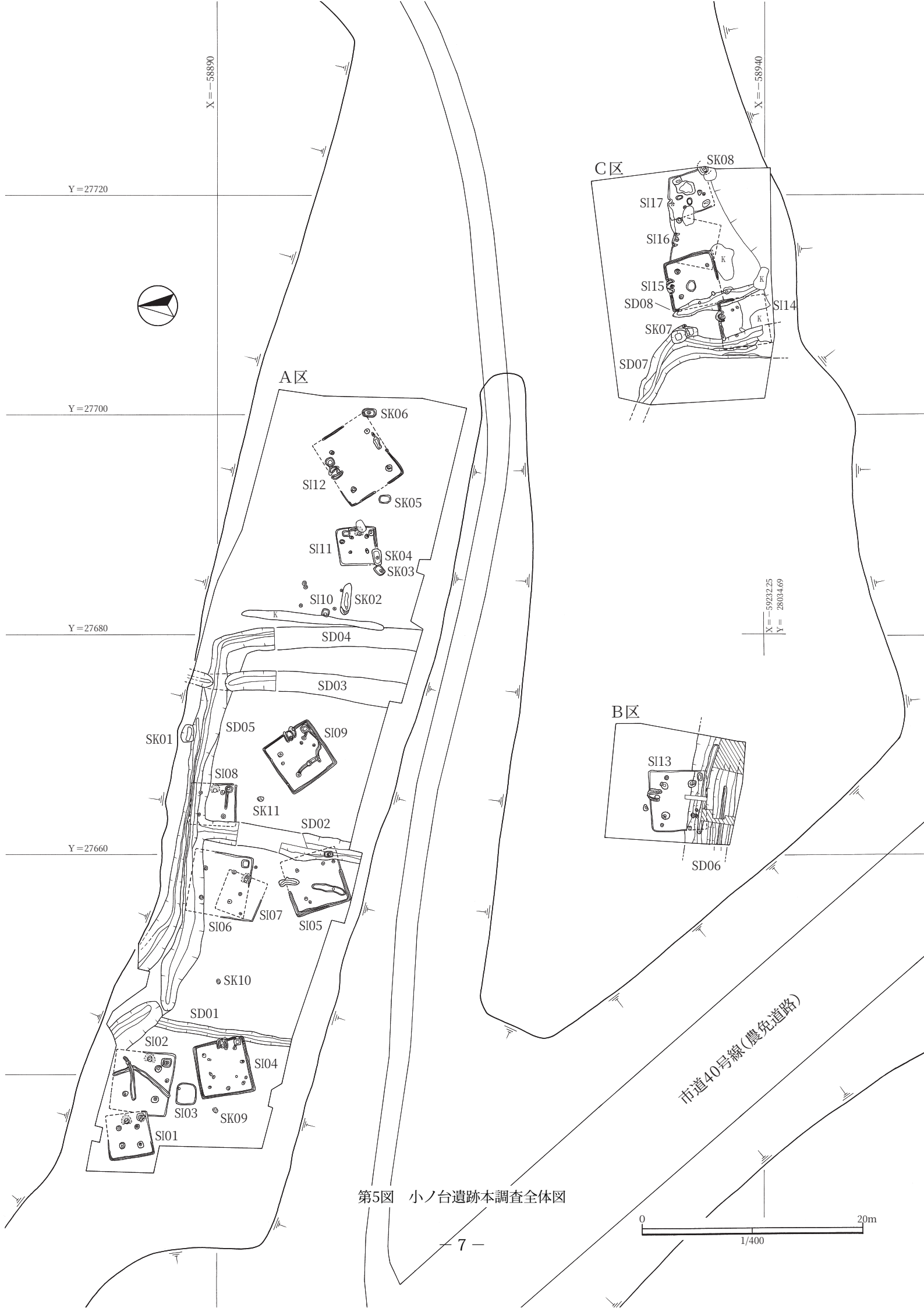
第3節　遺構と出土遺物

ここでは調査区及び遺構種別に記述する。竪穴建物跡のピットは、主柱穴をもつ場合はP1～ P4と呼称し、古墳時代の竪穴では、いわゆる貯蔵穴とみられるものをP5とした。平面規模は主軸長×副軸長を示す。床面積は竪穴の壁下もしくは壁周溝内側のラインでプラニメータを用いて計測した。

（1）A区　竪穴建物跡

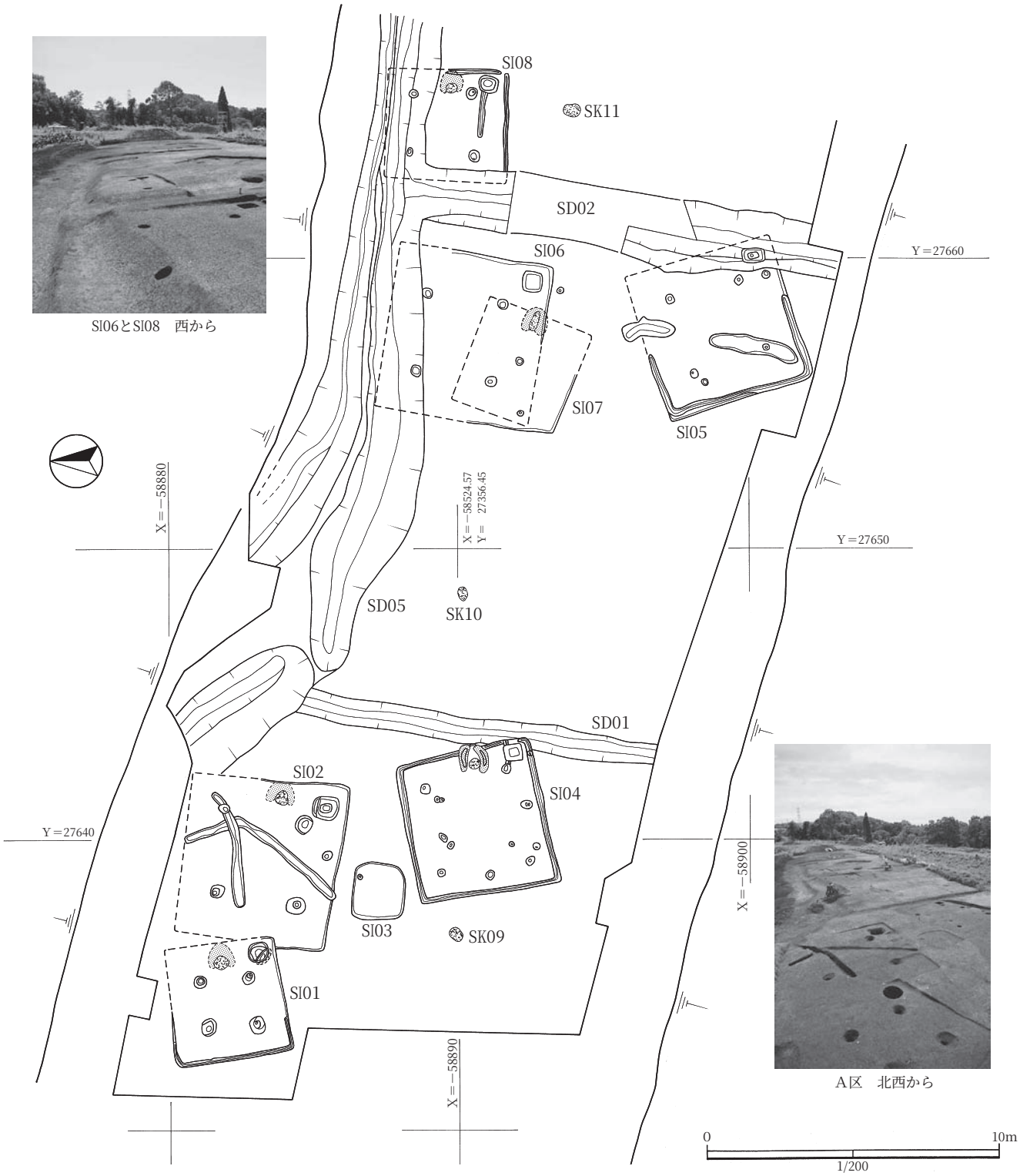
SI01（第7・8図、図版3・15・20）

規模：4.1×4.0m（推定）　壁高：0～11.5cm　主軸：N－82°－E　周溝：西壁等一部にみられた。幅8～15cm・深さ1～3cm　柱穴深さ：P1 36.3cm・P2 36.6cm・P3 27.3cm・P4 31.5cm　その他ピット：P5 長軸78cmの不整円形で深さ72.8cm　床面積：14.38㎡（推定）　遺物量：713g（土師器

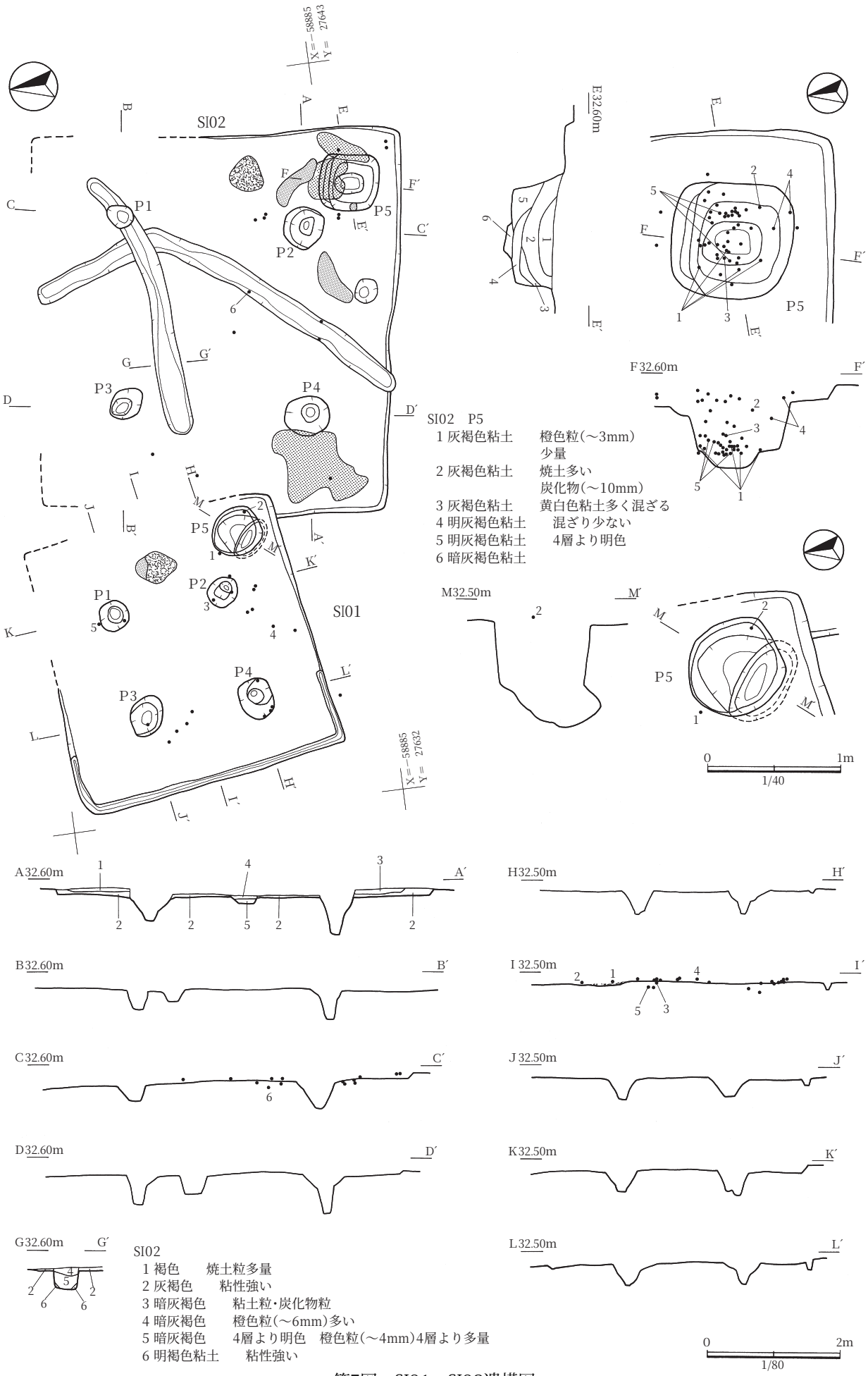


第5図　小ノ台遺跡本調査全体図

629g・須恵器57g・その他27g）　所見：カマドは火床面のみ残存し、一部白色粘土もみられた。P5は、いわゆる貯蔵穴とみられる。底面が南西側にやや膨らみ、他の竪穴のもつ貯蔵穴とは異なり不整形である。出土遺物は小片が多かった。第8図5の須恵器は、焼成が甘かったためか、かなり溶けている。南東隅においてSI02と重複するが、覆土が薄く、土層から新旧関係は判断できない。

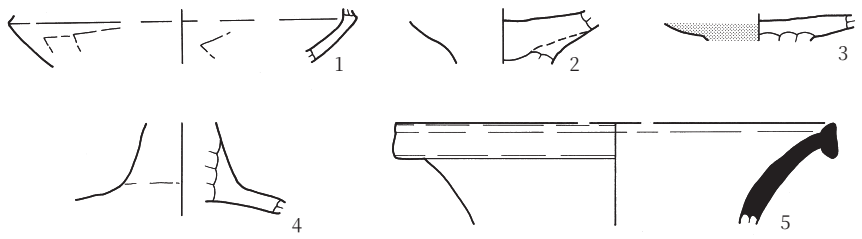


第6図　A区全体図（1）

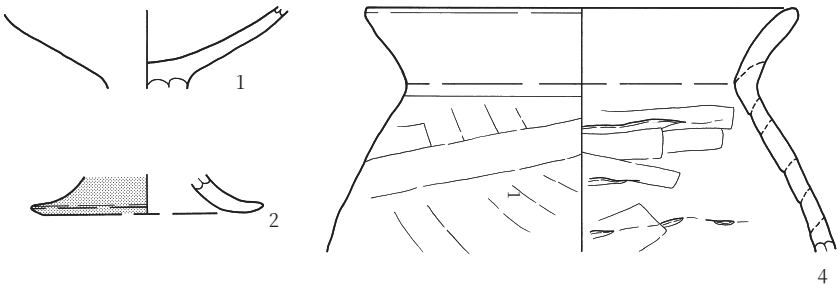


第7図　SI01・SI02遺構図

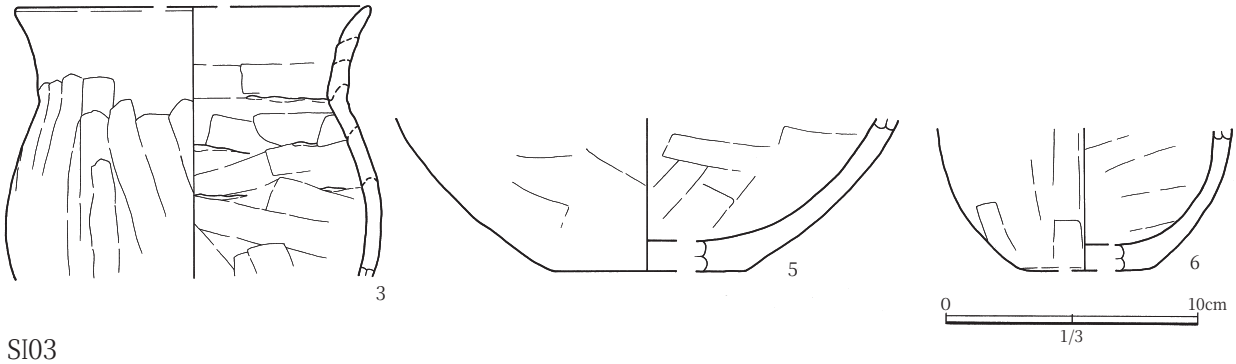
SI01出土遺物



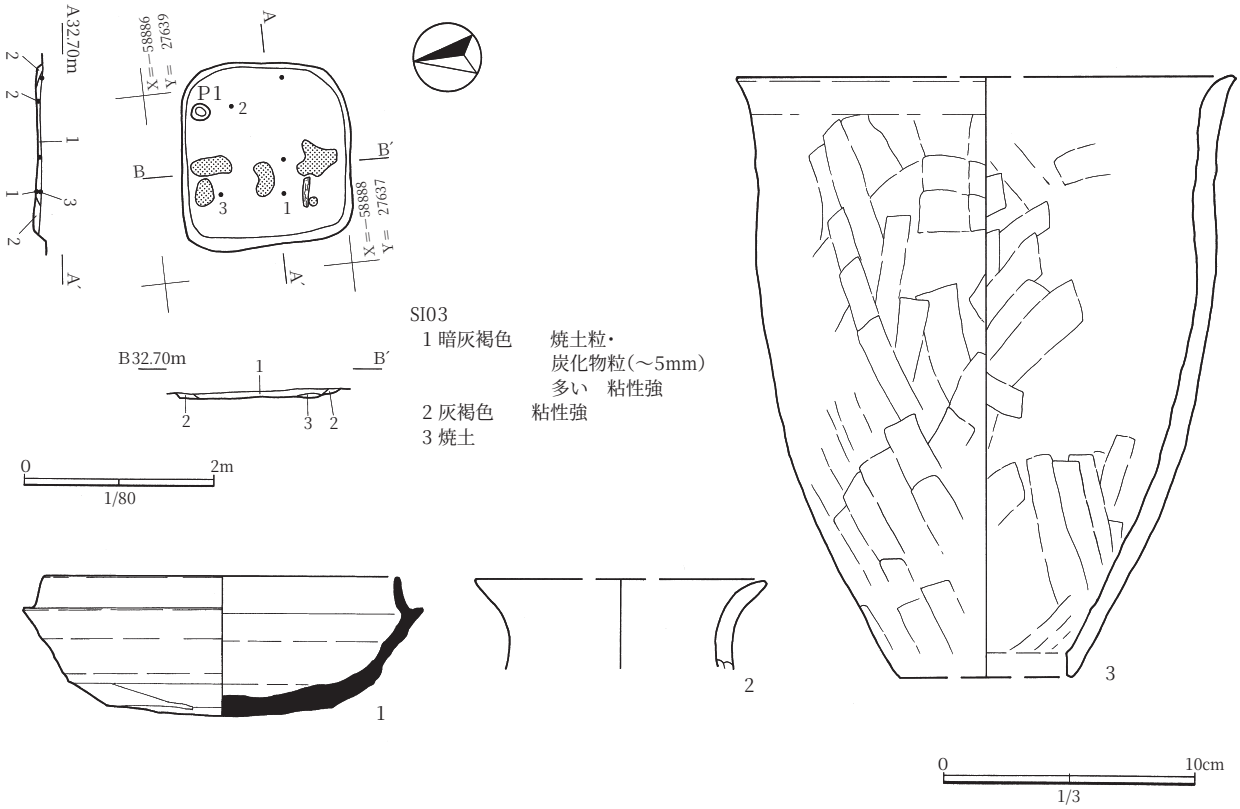
SI02出土遺物



SI02(前)とSI03・SI04(奥)　北から



SI03



第8図　SI01・SI02出土遺物、SI03遺構図・出土遺物

SI02（第7・8図、図版1・3・15・20）

規模：5.8×5.5m（推定）　壁高：0～10.6cm　主軸：N－98°－E　周溝：検出されず　柱穴深さ：P1 29.3cm・P2 38.9cm・P3 43.9cm・P4 59.0cm　その他ピット：P5 92×88cmの隅丸方形で深さ51.5cm　床面積：28.98㎡（推定）　遺物量：2,292g（土師器2,178g・須恵器0g・その他114g）所見：床面に交差する2条の溝跡が検出された。上面幅は26～42cm、深さは16.9～29.2cmであり、箱型もしくは逆台形型の断面である。覆土に焼土とみられる橙色粒を多く含む。竪穴の覆土が薄いため、層位的には判断しかねるが、覆土の類似と壁付近で溝が止まることから、竪穴の床面掘り形であったと考える。SI09（第18図）にも床面下の溝はみられたが、こちらの方がよりしっかりと溝を意識した断面形状である。第8図2・4・6などの出土遺物は、竪穴の中でも古い特徴を示している。

SI03（第8図、図版1・3・4・15・20）

規模：2.0×1.8m　壁高：2.9～12.5cm　主軸：N－95°－E　周溝・柱穴：なし　その他ピット：P1深さ5.5cm　床面積：2.77㎡　遺物量：773g（土師器565g・須恵器208g）　所見：竪穴建物と呼ぶにはかなり小規模であり、柱穴などのピットやカマドをもたない。床面に焼土がみられた。第8図1の6世紀中葉とみられる須恵器の坏と3の甑が出土している。付属施設的な竪穴であろうか。

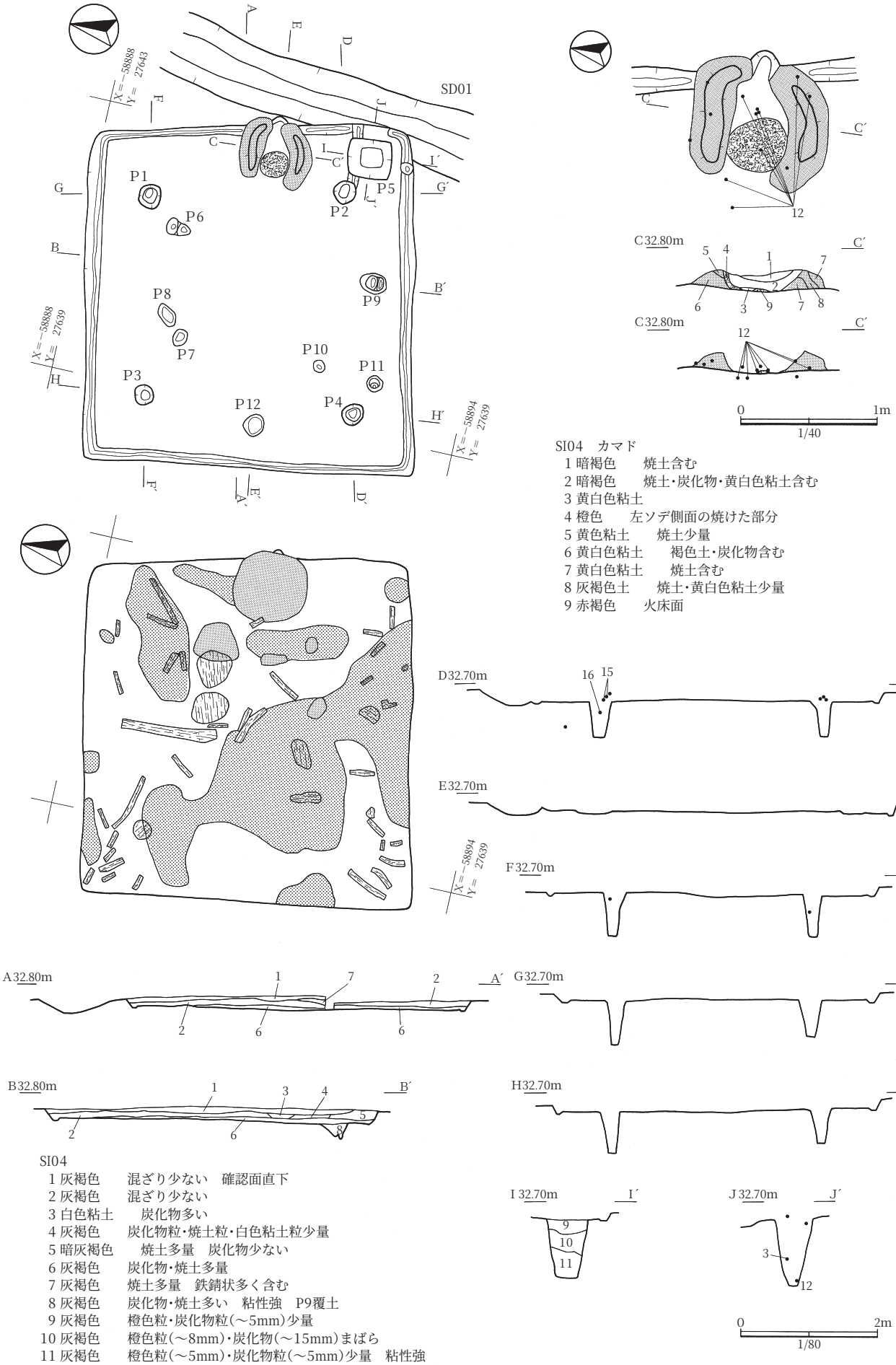
SI04（第9～12図、図版1・3・4・5・14・15・16・19・20・22）

規模：5.1×4.8m　壁高：0～19.4cm　主軸：N－79°－E　周溝：幅10～25cm・深さ1～8.2cm　柱穴深さ：P1 65.4cm・P2 53.7cm・P3 58.5cm・P4 50.5cm　その他ピット：P5 66×58cmの方形で深さ101cm・P6 6.4cm・P7 12.0cm・P8 3.6cm・P9 25.3cm・P10 7.3cm・P11 12.8cm P12 4.0cm　床面積：20.90㎡　遺物量：13,718g（土師器10,702g・須恵器11g・その他3,005g）出土遺物の総量は全遺構中最も多量　所見：竪穴の南東隅からカマド部分にかけてSD01（近世溝跡）に壊される。床面上及び覆土中に炭化材と焼土が多量にみられた。覆土は粘性の強い灰褐色土が主体であり、各ピット内覆土にも多くの焼土粒と炭化物粒が含まれている。

カマド周辺からP5付近にかけて、第10図1の模倣坏や第11図12・14・15の甕片が多く分布しており、12の甕はカマド内火床面とP5の底面付近に分散していた。第10図11の球胴型の甕底部はP7の中に、7の坏はP6内にあった。8と9の鉢は、接点はないが同一個体の可能性が高い。第12図17は叩き石・磨り石の役目を、18の石は台などとして使用されたとみられる。カマド右脇からそろって出土した。北西隅付近の床面上において第12図19～25の滑石製臼玉7点を検出した。そのため、付近の覆土をフルイで精査し、26の1点を確認した。

SI05（第13図、図版5・20）

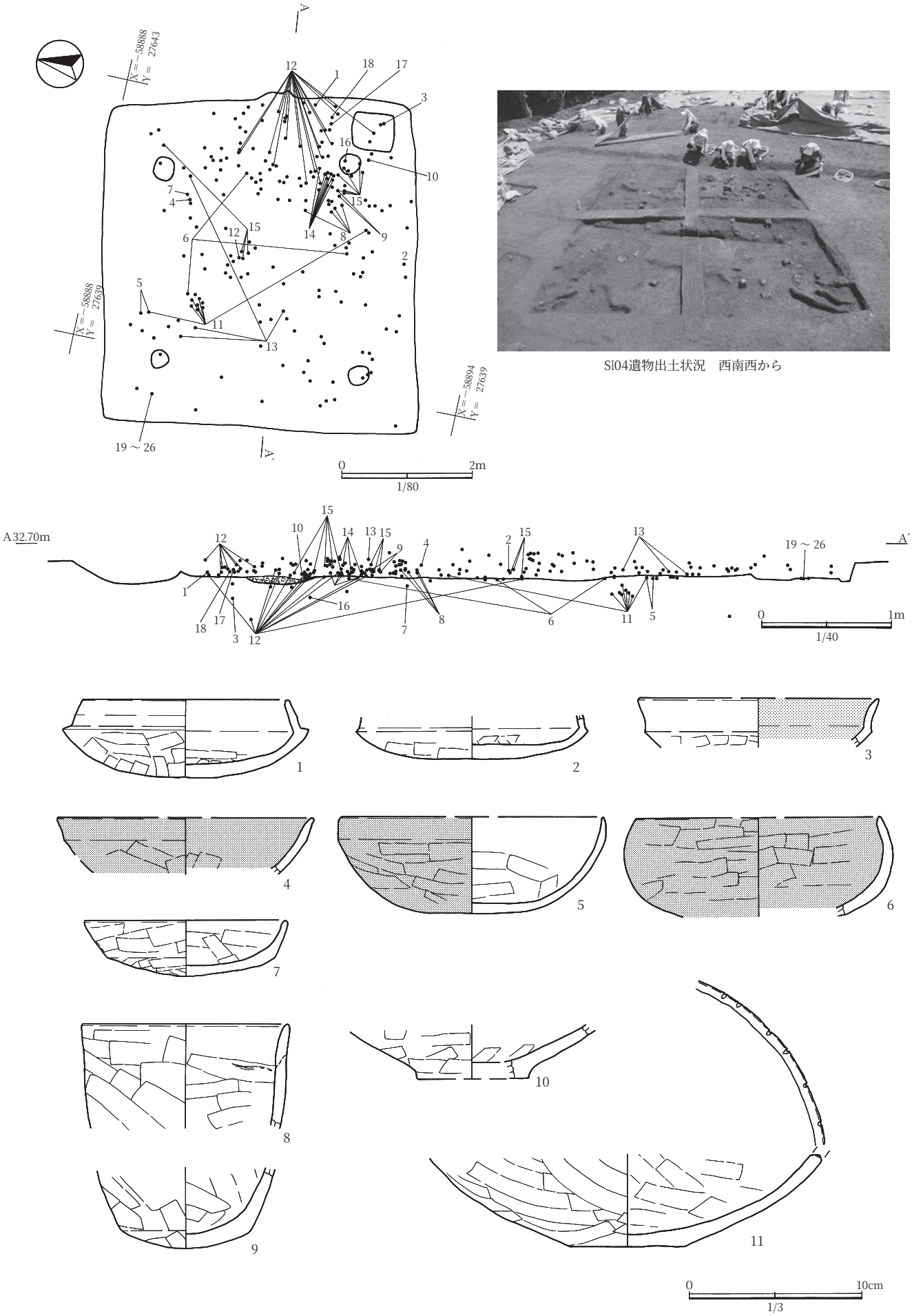
規模：5.2×5.2m（推定）　壁高：0～13.6cm　主軸：N－70°－E　周溝：西半のみ確認・幅20～40cm・深さ3.8～9.8cm　柱穴深さ：P1 69.8cm・P2 73.3cm・P3 74.6cm・P4 64.6cm　その他ピット：P5 82×52cmの方形で深さ70.4cm（西側床面から）・P6 4.4cm・P7 7.0cm　床面積：22.59㎡（推定）　遺物量：1,329g（土師器1,035g・須恵器8g・その他286g）　所見：竪穴の南東隅から東壁全面にかけてSD02（近世溝跡）に壊されている。カマドは残っていないが、床面などに散る黄白色粘土からその存在を推定することができる。P5はSD02の底面より深く掘られているため、かろうじて残っている。床面にみられる浅い溝状の窪みは、覆土に橙色粒や炭化物粒を多く含む。SI02やSI09などの床下の溝跡と似る覆土であるが、層位的には竪穴の覆土があまりに浅いため、竪穴に伴うもの



SI04　カマド
1 暗褐色　　焼土含む
2 暗褐色　　焼土・炭化物・黄白色粘土含む
3 黄白色粘土
4 橙色　　左ソデ側面の焼けた部分
5 黄色粘土　　焼土少量
6 黄白色粘土　　褐色土・炭化物含む
7 黄白色粘土　　焼土含む
8 灰褐色土　　焼土・黄白色粘土少量
9 赤褐色　　火床面

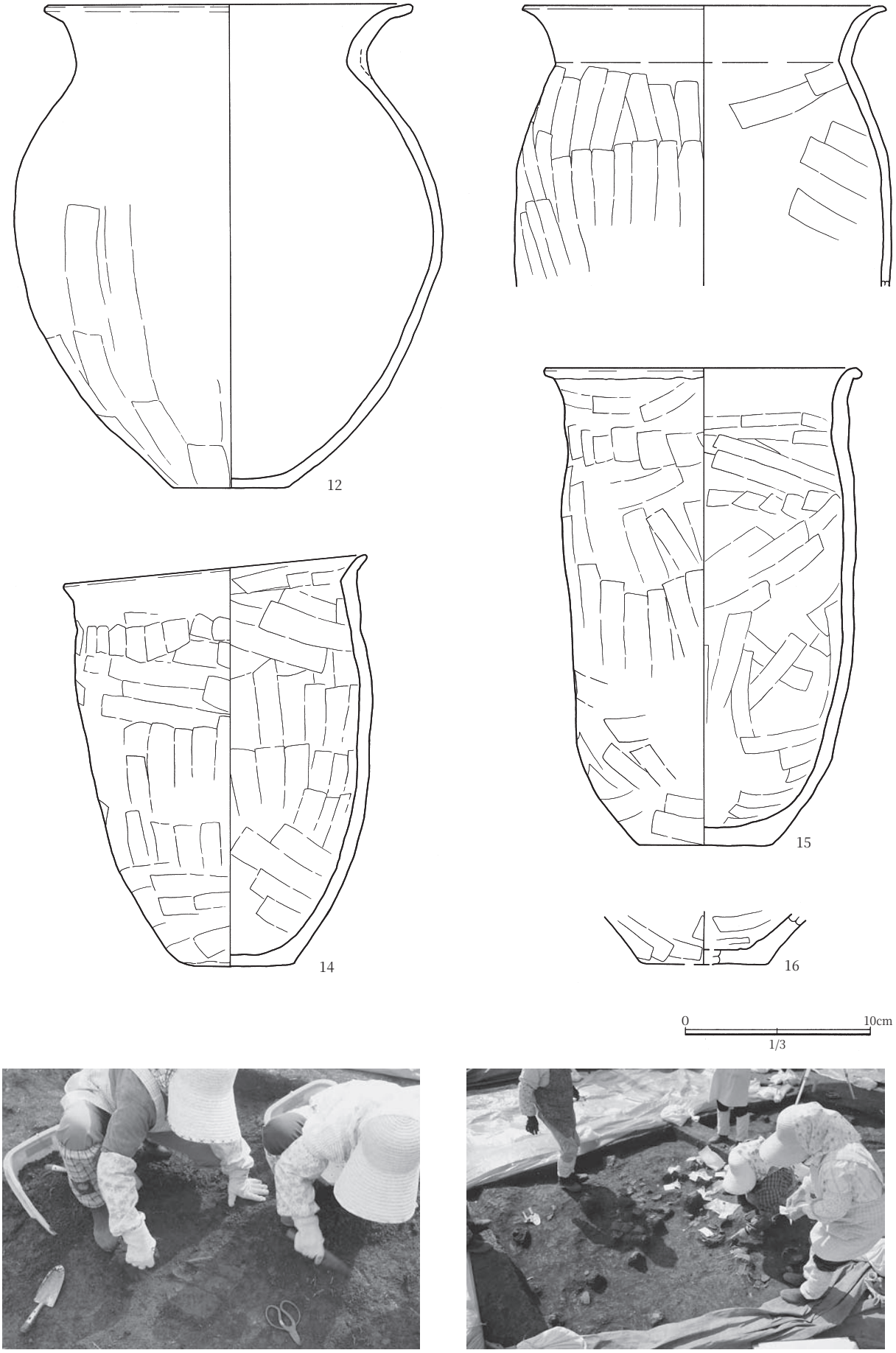
SI04
1 灰褐色　　混ざり少ない　確認面直下
2 灰褐色　　混ざり少ない
3 白色粘土　　炭化物多い
4 灰褐色　　炭化物粒・焼土粒・白色粘土粒少量
5 暗灰褐色　　焼土多量　炭化物少ない
6 灰褐色　　炭化物・焼土多量
7 灰褐色　　焼土多量　鉄錆状多く含む
8 灰褐色　　炭化物・焼土多い　粘性強　P9覆土
9 灰褐色　　橙色粒・炭化物粒(～5mm)少量
10 灰褐色　　橙色粒(～8mm)・炭化物(～15mm)まばら
11 灰褐色　　橙色粒(～5mm)・炭化物粒(～5mm)少量　粘性強

第9図　SI04遺構図

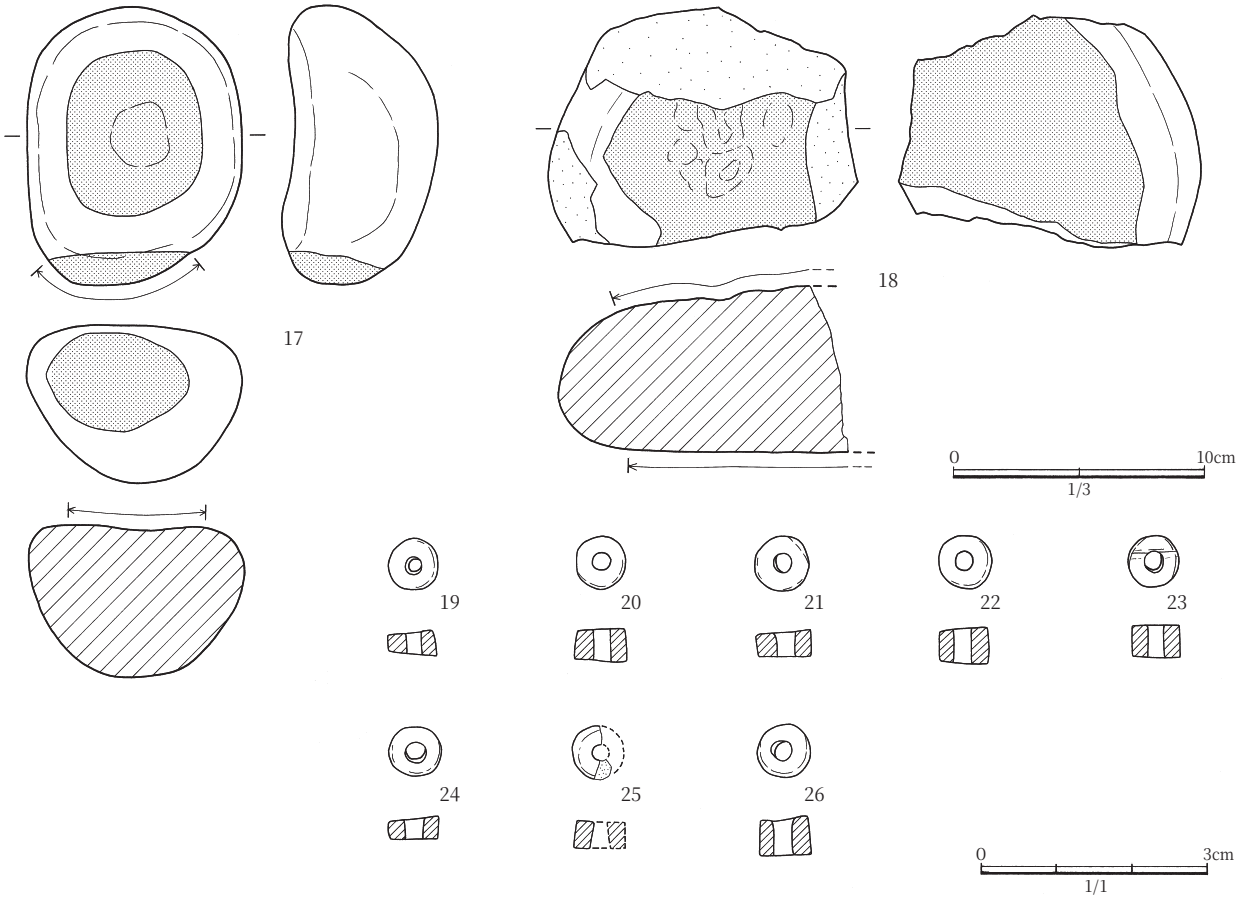


SI04遺物出土状況　西南西から

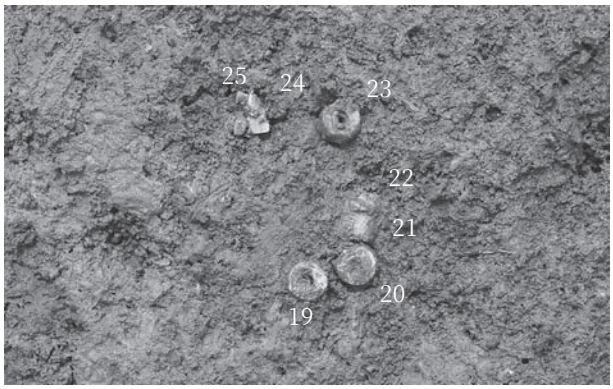
第10図　SI04遺物分布図・出土遺物（1）



第11図　SI04出土遺物（2）



SI04 玉調査状況



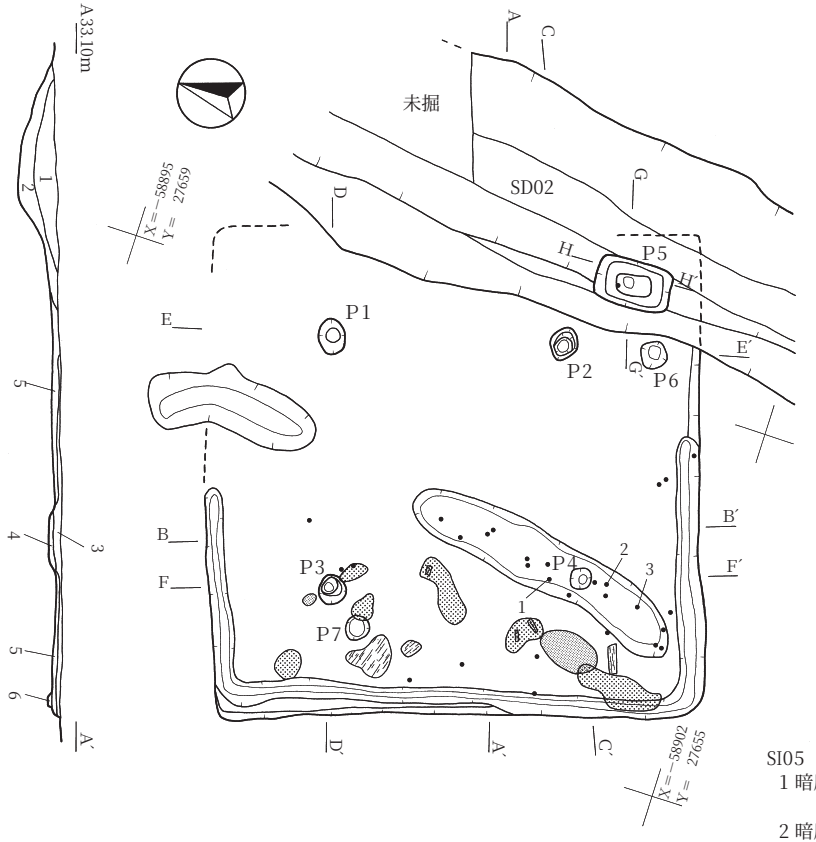
19～25玉出土状況(写真上が西)

第12図　SI04出土遺物（３）

かどうか判断できない。北側に続くとみられる窪みは明らかに竪穴の外に突出しており、これが一連のものであると仮定すると、竪穴に伴うものとは考えにくい。P4周囲の溝状の窪みは3.1×0.66mで深さ10cm前後である。この窪みの覆土に遺物が集中するが、帰属時期を判断し難い小片が多い。

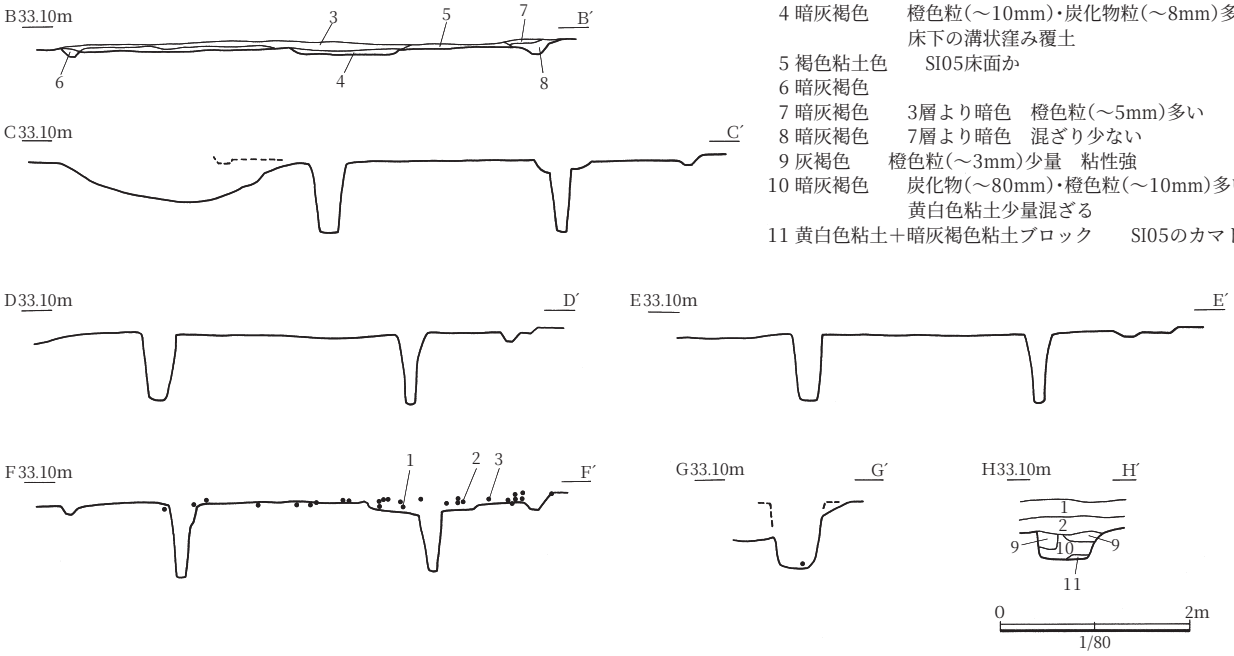
SI06（第14・15図、図版5・6・13・15・16・19・20）

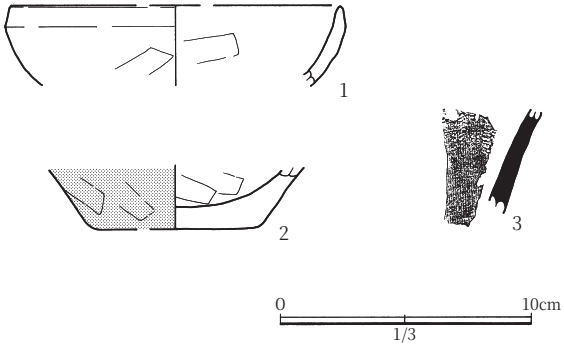
規模：5.7×5.4m（推定）　壁高：0～21.4cm　主軸：N－99°－E　周溝：確認されず　柱穴深さ：P1 52.7cm・P2 57.1cm・P3 67.9cm（南側床面から）・P4 58.8cm　その他ピット：P5 70×68cmの方形で深さ70.4cm・P6 30.2cm・P7 6.5cm・P8 6.9cm　床面積：28.08㎡（推定）　遺物量：2,349g（土師器1,646g・須恵器321g・その他382g）　所見：北側1/3をSD05に削られている。この調査



SI05とSI09　西から

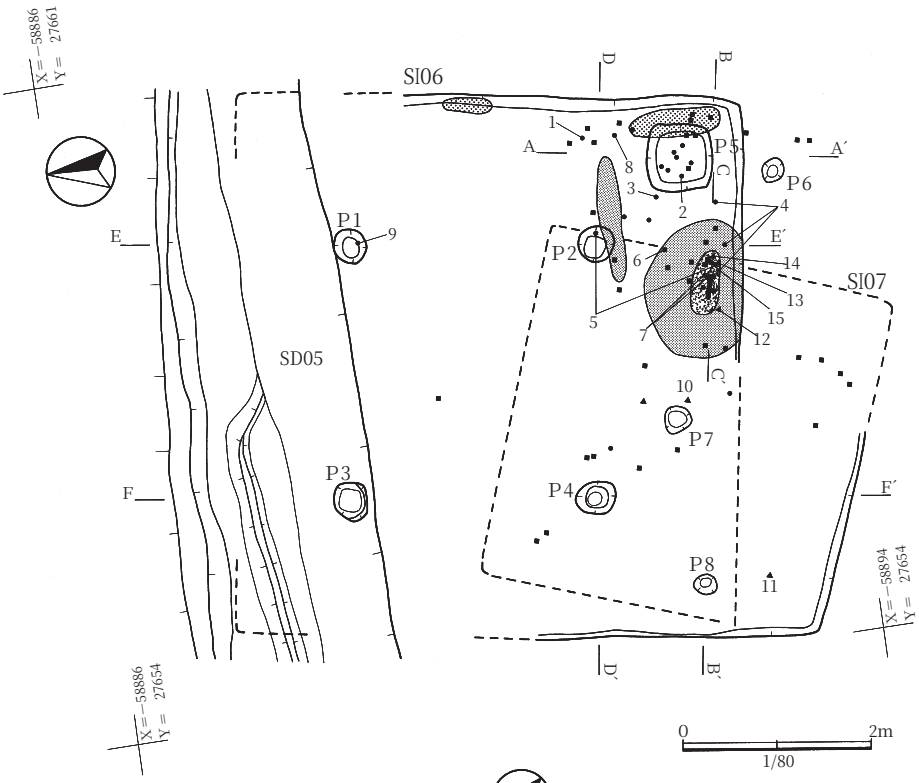
SI05
1 暗灰褐色　砂含む　橙色粒(～8mm)・炭化物粒(～2mm)まばら
根の影響多い　SD02覆土
2 暗灰褐色　1層よりやや明色で混ざり少なめ　SD02覆土
3 暗灰褐色　橙色粒・炭化物粒(～5mm)まばら　粘性強
4 暗灰褐色　橙色粒(～10mm)・炭化物粒(～8mm)多い
床下の溝状窪み覆土
5 褐色粘土色　SI05床面か
6 暗灰褐色
7 暗灰褐色　3層より暗色　橙色粒(～5mm)多い
8 暗灰褐色　7層より暗色　混ざり少ない
9 灰褐色　橙色粒(～3mm)少量　粘性強
10 暗灰褐色　炭化物(～80mm)・橙色粒(～10mm)多い
黄白色粘土少量混ざる
11 黄白色粘土＋暗灰褐色粘土ブロック　SI05のカマド構築材か





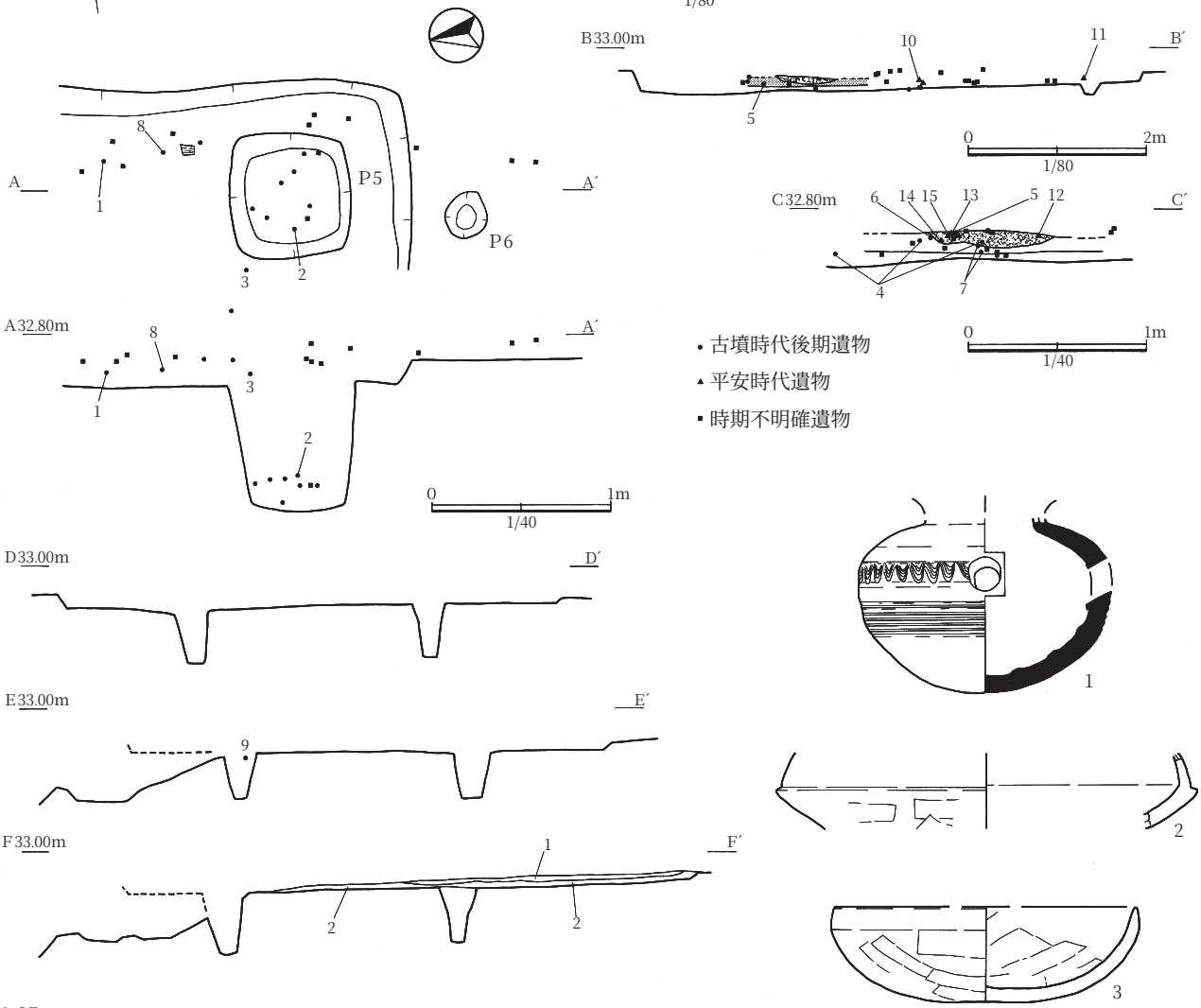
SI05　東から

第13図　SI05遺構図・出土遺物



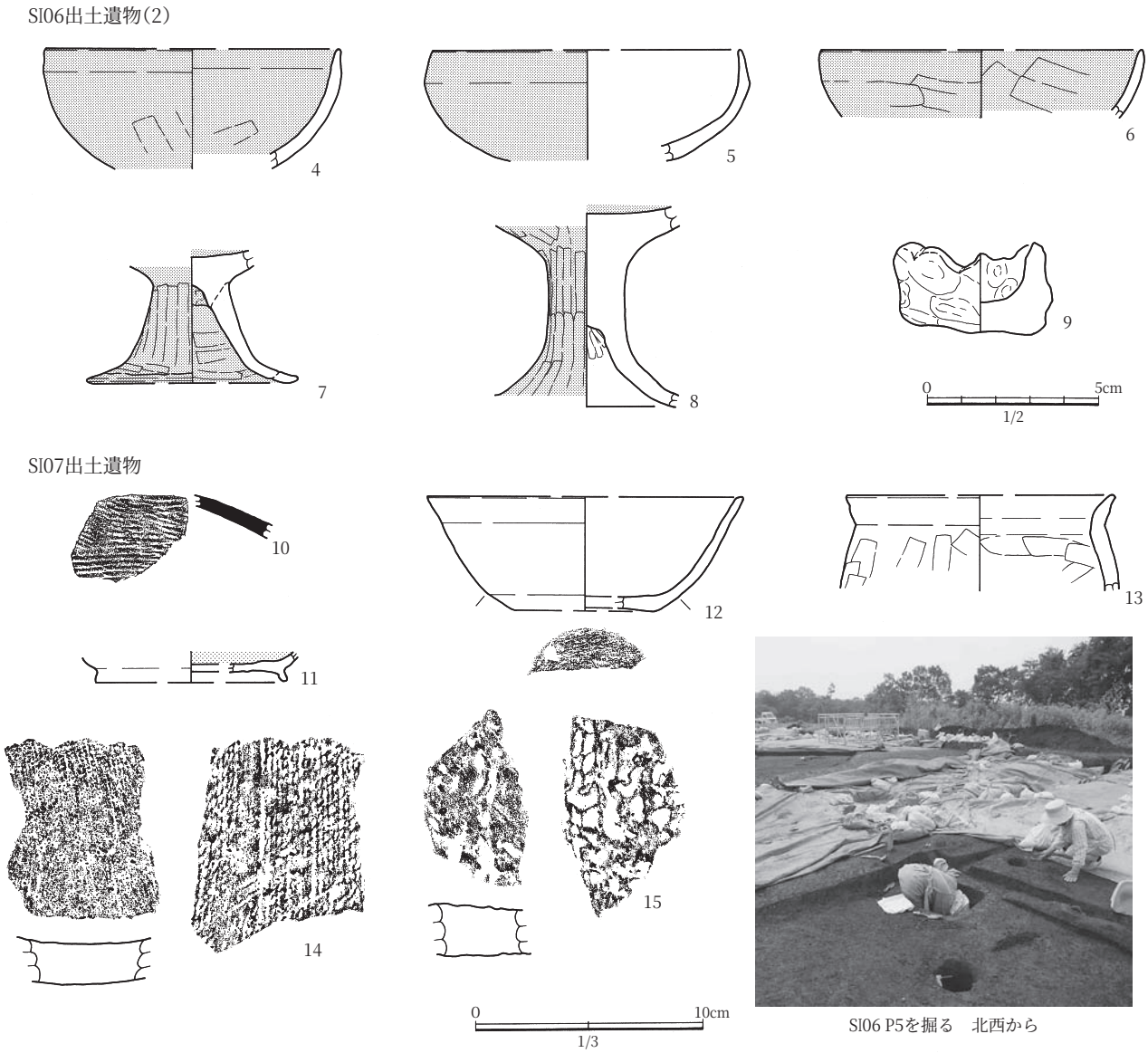
SI06　西から

SI06 P5北側　東から



SI06・07
1 暗灰褐色　焼土粒(～3mm)　粘性強
2 暗灰褐色　1層より明色　焼土粒多い
3 灰褐色　橙色粒(～5mm)・炭化物粒(～8mm)多い

第14図　SI06・SI07遺構図、SI06出土遺物（1）



SI06 P5を掘る　北西から

第15図　SI06出土遺物（２）、SI07出土遺物

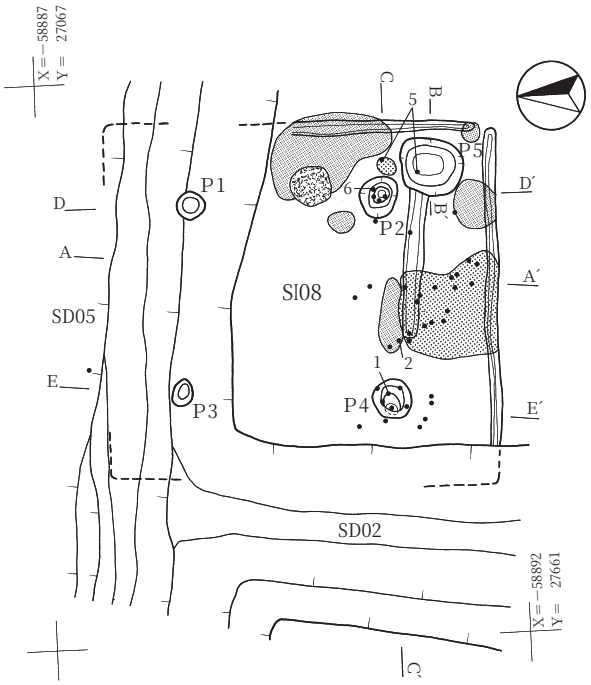
において最も覆土と地山を識別しづらい遺構であった。南壁部分に布目瓦を確認した焼土跡があったため、古墳時代後期と平安時代の竪穴建物跡が重複していることは推定できたが、調査中はSI07と分離できず、付近の遺物は一連にとりあげ、整理作業段階で時期を判別し図示した。東壁のカマド推定位置には若干の焼土がみられたものの、火床面などは残っていない。P5付近から第14図1の甑や第15図8の高坏などが出土しているが、時期差がみられることから、竪穴に伴う遺物とは言えない。

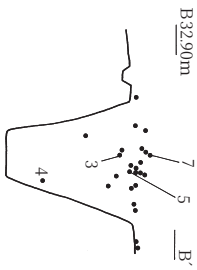
SI07（第14・15図、図版5・6・16・20）

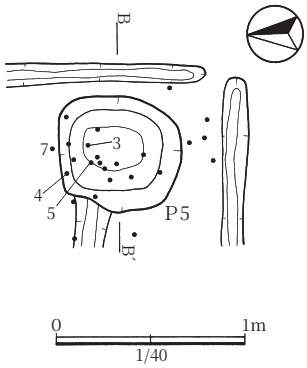
規模：3.6×3.6m（推定）　壁高：0～2.5cm　主軸：N－110°－E（推定）　周溝・柱穴：不明　床面積：12.25㎡（推定）　所見：SI06と重複するが平面プランが明確にできなかった。カマドの燃焼面部分が認識されたが、ソデ部分は確認できない。ともなう柱穴やピットも判然としない。第15図11は内面黒色処理の高台付き坏、12はロクロ土師器の坏である。14・15の瓦は燃焼部から出土した。近隣では、東方1.1kmの武士遺跡（第1図7）の調査で、総量400kg程の瓦が出土している。

SI08（第16図、図版5・6・16・20・21）

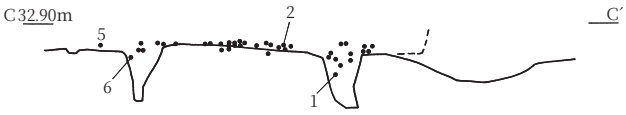
規模：3.9×4.2m（推定）　壁高：0～10.6cm　主軸：N－92°－E　周溝：幅8～17cm・深さ1～



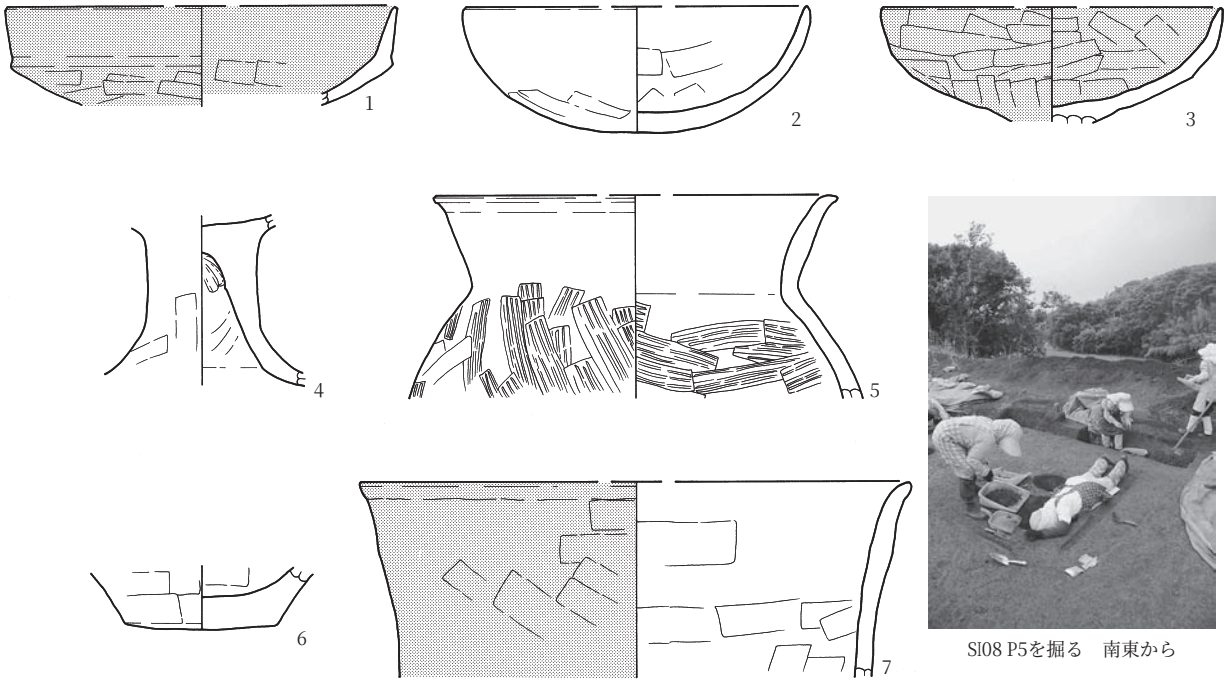




SI08
1 灰褐色　砂状　橙色粒・炭化物粒(～5mm)少量　SD05覆土上層
2 灰褐色　1層より粘性あり
3 灰褐色　地山褐色粘土混ざる　粘性強
4 暗灰褐色
5 焼土　褐色土含む
6 灰褐色　焼土粒(～5mm)多い　黄白色粘土少量　粘性強
7 灰褐色　混ざりなし　粘性強



0　2m
1/80

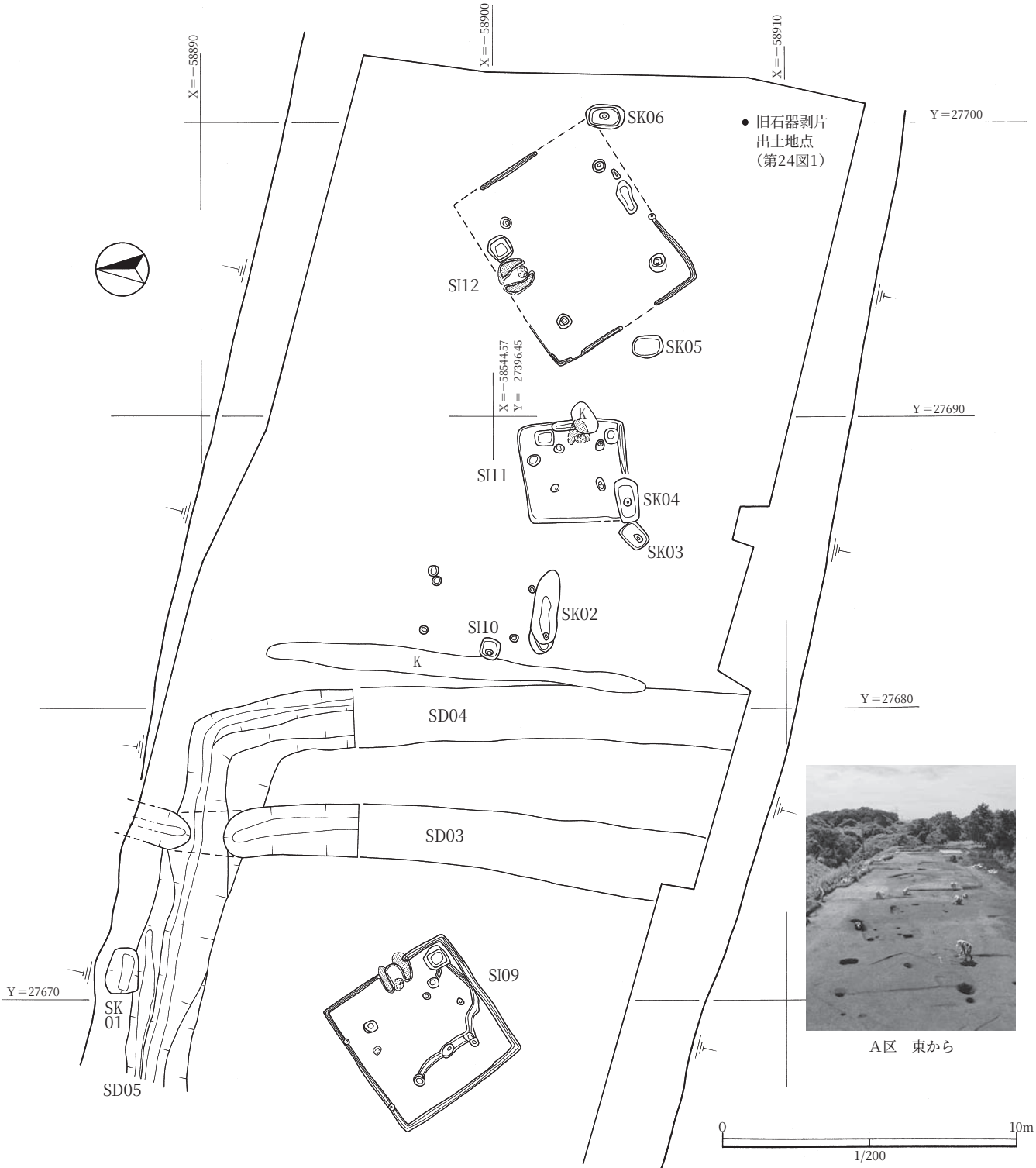


SI08 P5を掘る　南東から

第16図　SI08遺構図・出土遺物

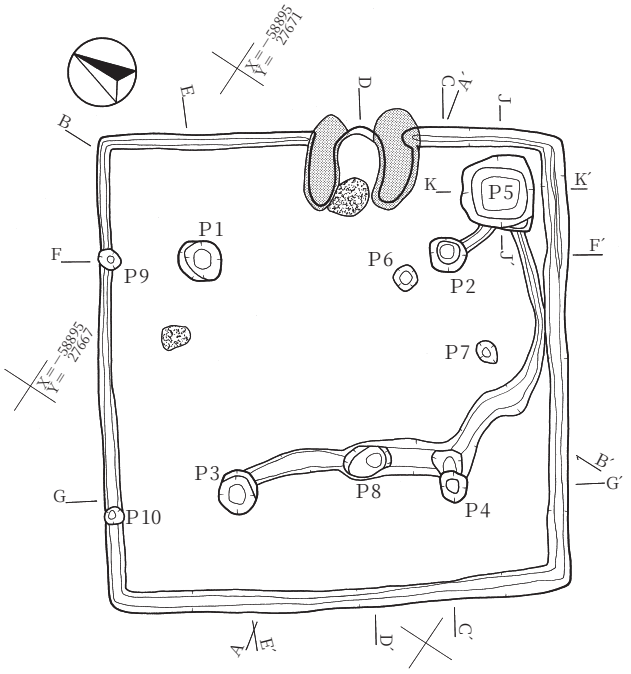
0　10cm
1/3

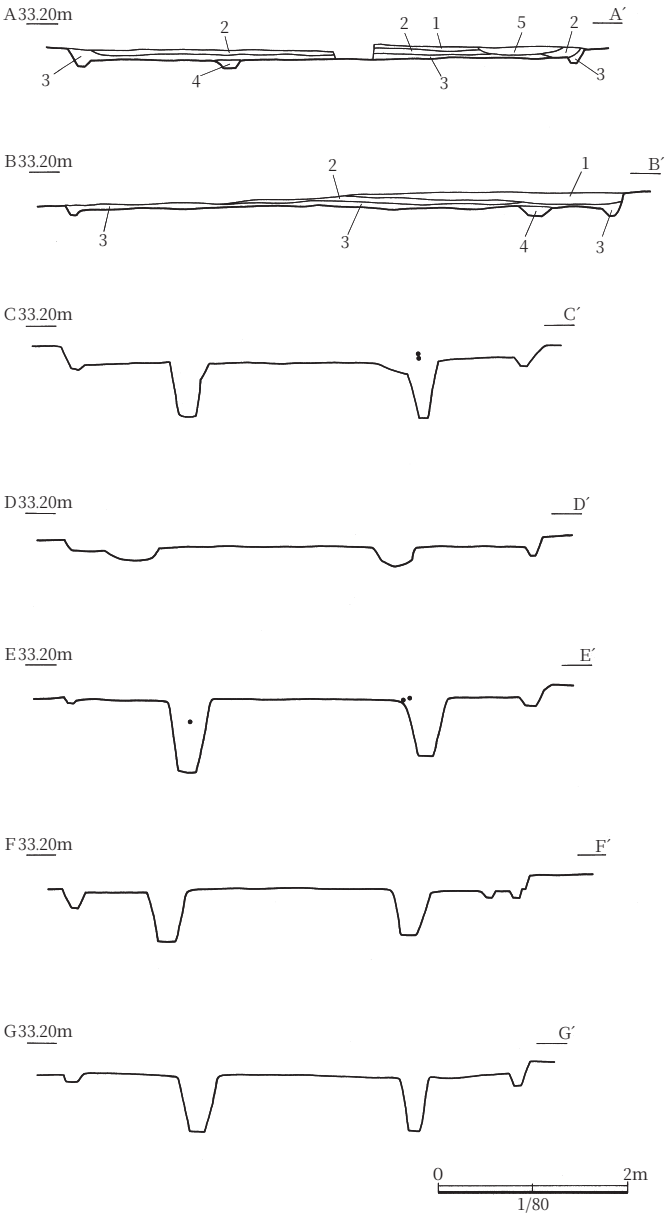
3cm　柱穴深さ：P1 53.5cm（南側床面から）・P2 54.2cm・P3 54.2cm（南側床面から）・P4 56.5cm　その他ピット：P5 66×62cmの隅丸方形で深さ69.5cm　床面積：14.04㎡（推定）　遺物量：2,407g（土師器1,753g・須恵器0g・その他654g）　所見：北側1/3をSD05に、西壁全体をSD02に壊されている。カマドの火床面は東壁中央にあり、ソデ部分は流れた状態で識別できない。P5からP4に向かって幅20cm・深さ1～5.4cm・長さ1.58mに渡って溝を検出した。南壁付近の覆土に焼土が多く、遺物も集中していた。第16図7は器形的に甑とみられるが、外面に赤彩の痕跡がある。

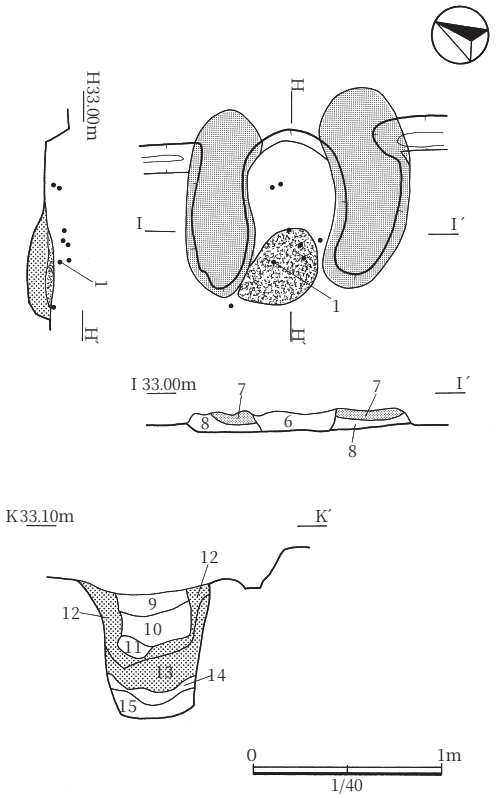


A区　東から

第17図　A区全体図（2）







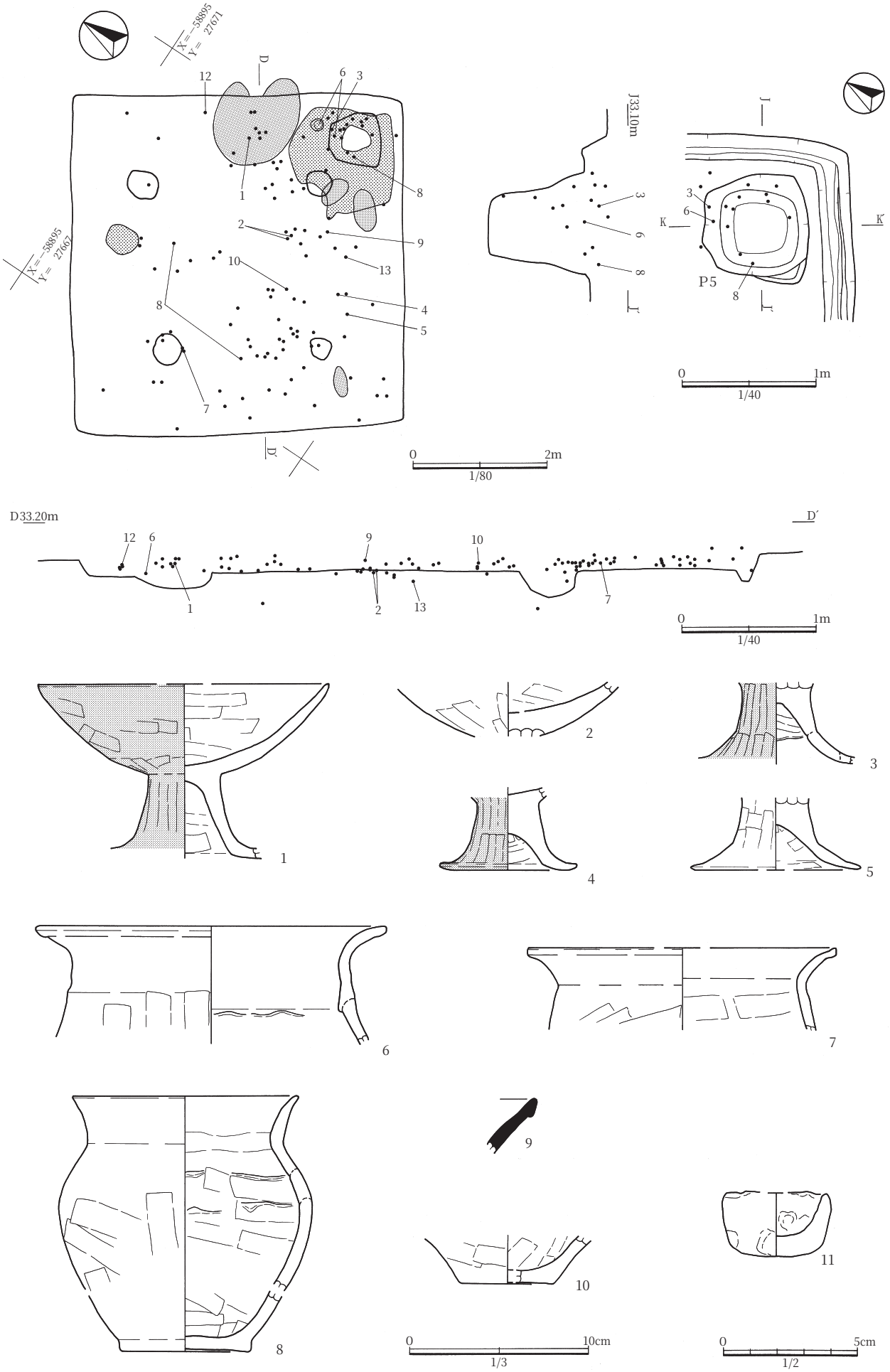
SI09
1 暗灰褐色　橙色粒(～3mm)・炭化物(～10mm)少量　粘性強
2 暗灰褐色　1層より明色　橙色粒・炭化物粒(～5mm)まばら　粘性強
3 灰褐色　粘性強　床面か
4 灰褐色　橙色粒(～3mm)・黄白色粘土粒・炭化物粒少量　粘性強
5 暗灰褐色　焼土多量

SI09　カマド
6 暗灰褐色　焼土多い　灰白色粘土少量
7 灰白色粘土　灰褐色土・焼土少量
8 灰褐色粘土　灰白色粘土少量

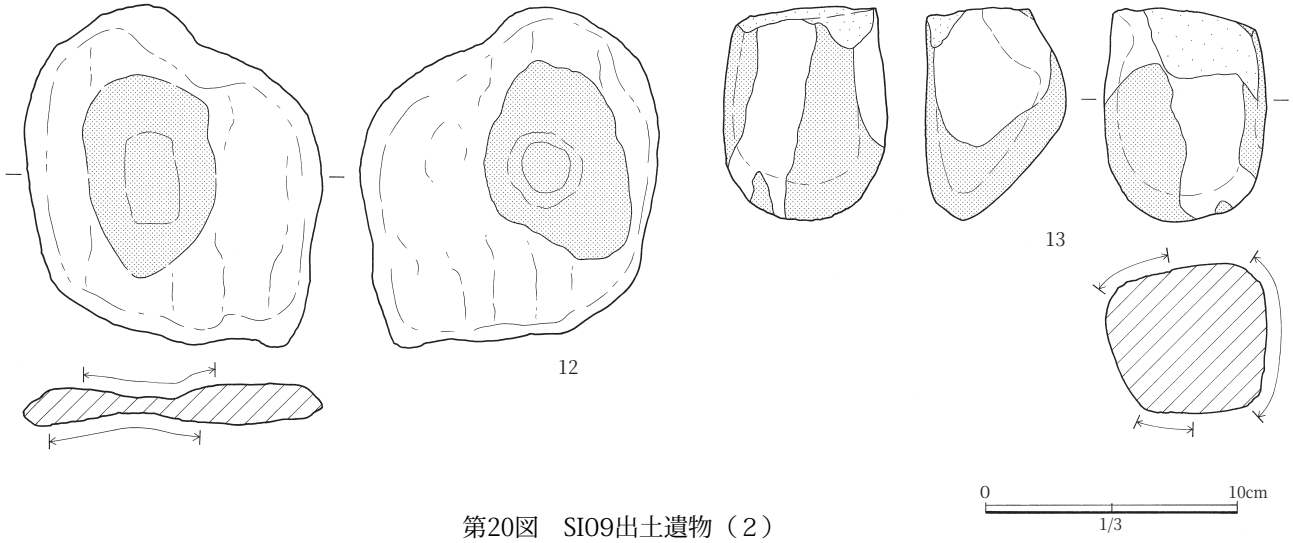
SI09　P5
9 灰褐色　焼土粒(～3mm)・炭化物(～10mm)少量
10 灰褐色　焼土(～8mm)・黄白色粘土粒(～10mm)少量
11 灰褐色　焼土(～8mm)多い
12 焼土　灰褐色粘土・炭化物(～20mm)混ざる
13 焼土　4層より更に多い　ブロック状(～30mm)になる　燃焼面か
14 灰褐色粘土　焼土(～10mm)多い
15 灰褐色粘土　混ざり少ない　粘性強

SI09　南から

第18図　SI09遺構図



第19図　SI09遺物分布図・出土遺物（1）



第20図　SI09出土遺物（２）

SI09（第18～20図、図版6・7・14・17・21・22）

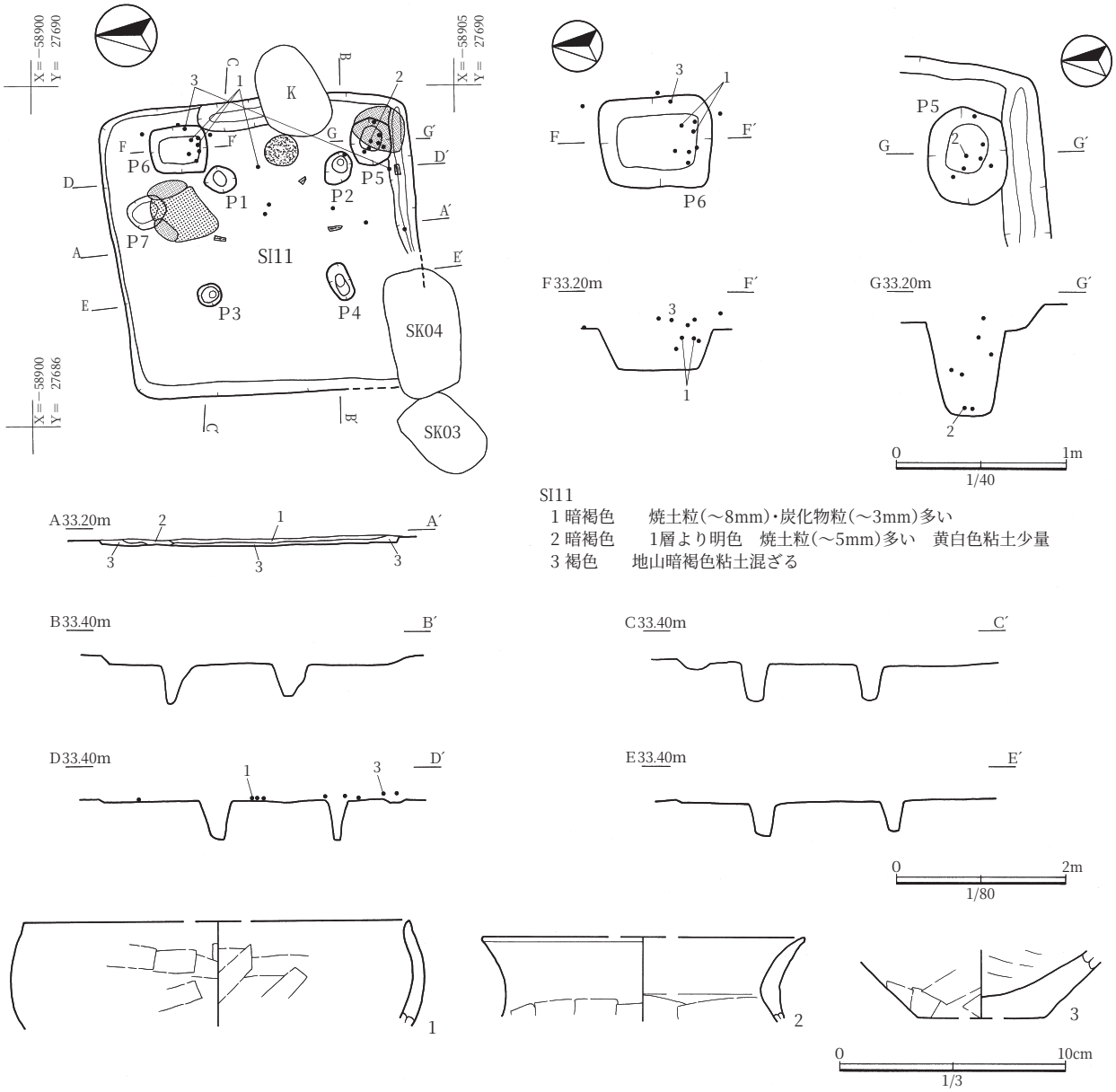
規模：5.1×5.0m　壁高：2.9～16.7cm　主軸：N－56°－E　周溝：幅13～25cm・深さ2.9～7.7cm　柱穴深さ：P1 72.4cm・P2 50.0cm・P3 59.1cm・P4 53.9cm　その他ピット：P5 78cm×76cmの不整方形で深さ74.4cm・P6 10.6cm・P7 13.2cm・P8 18.9cm・P9 14.5cm・P10 23.7cm　床面積：21.09㎡　遺物量：6,760g（土師器5,465g・須恵器19g・その他1,276g）　所見：覆土は他遺構と同様、粘性の強い暗灰褐色土を主体とする。カマドを北東壁中央からやや右寄りに置く。北西壁中央からやや右寄り付近の床面にも、焼土及び燃焼面が確認された。カマド右脇のP5周辺に大量の焼土が厚く堆積するが、P5の中央部分のみ焼土が少量しかみられない空間がある。P5の土層断面をみると、12層・13層の焼土（第18図）はブロック化して燃焼面に近い状態であった。P5内上層で何かを燃焼させたようにみえ、その焼土の量からみて相当量の燃焼行為が推定されるが、炭化物はあまり顕著にはみられない。周辺床面も特に焼けていない。竪穴が廃絶され、ある程度経過し埋没しつつあるなか、P5部分が窪んでいる状態での行為である可能性が高い。

床面に幅12～38cm・深さ4.3～5.2cmの溝跡を検出した。P2とP5をつなぐものと、P3からP4をつなぎ、さらに南東壁周溝に接し、P5へと蛇行してつながる溝跡が確認された。ピット間をつないでおり、SI02の溝に比べて造りは貧弱である。床下の導排水の役割を持つ溝であろうか。

第19図1の高坏がカマドから出土している。カマドとP5の間に第19図6の甕が、頸部の輪積みで割れた状態で伏せて置かれていた。器台のような使用状態を表すものであろうか。また、カマド左脇に、第20図12の板状の石が出土している。両面に窪みがみられ、叩く作業などの台状に使用したものと観察される。13の石にも端部などに磨り痕・叩き痕がみられた。

SI11（第21図、図版1・8・17・21）

規模：3.5×3.6m（推定）　壁高：2～11.2cm　主軸：N－88°－E　周溝：東壁と南壁の一部・幅22～34cm・深さ3.4～5.4cm　柱穴深さ：P1 44.5cm・P2 46.5cm・P3 40.3cm・P4 37.2cm　その他ピット：P5 58×46cmの円形で深さ53.9cm・P6 68×54cmの隅丸方形で深さ25.5cm・P7 5.3cm　床面積：10.34㎡（推定）　遺物量：695g（土師器695g）　所見：東壁中央やや右寄り付近に火床面が確認されたが、ソデ部分などの構造は残っていない。そのカマドを南北に挟むようにP5とP6が

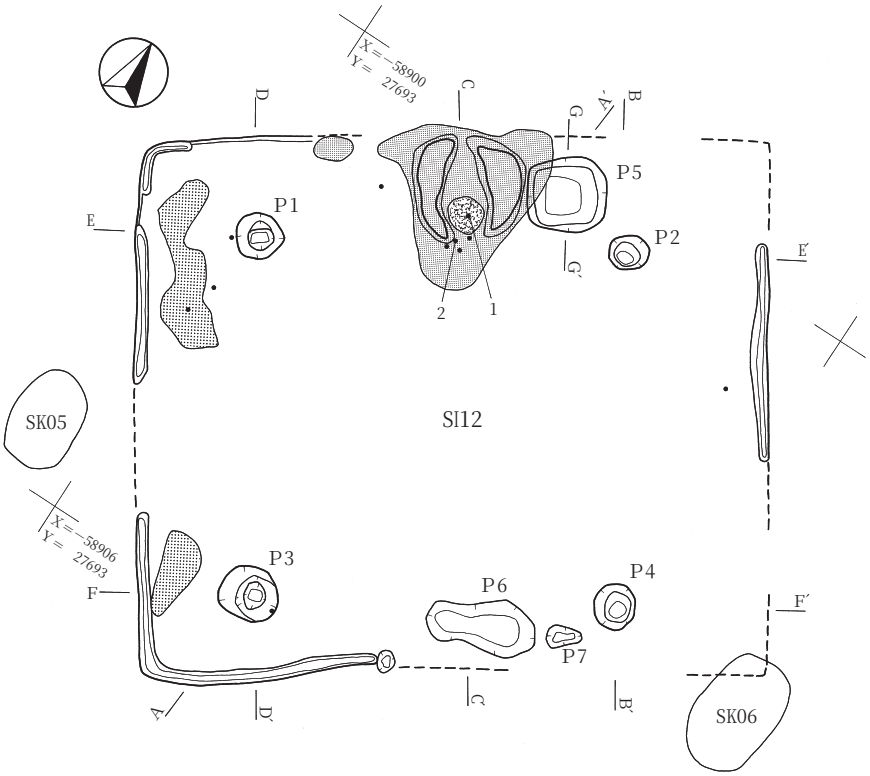


第21図　SI11遺構図・出土遺物

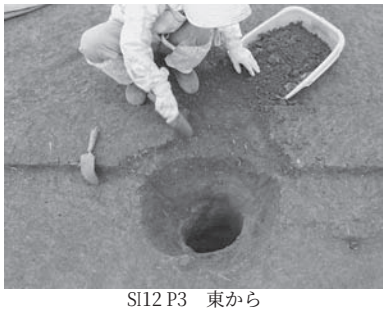
掘られる。竪穴の大きさと比例してか、竪穴使用時期の差か、他の竪穴のP5と比べてどちらも小規模で浅い。P5覆土は、橙色粒や炭化物粒を含む暗灰褐色土であり、8割方埋まった後、上層に黄白色粘土層が入り込むように堆積していた。底面から第21図2の甕片が出土している。

SI12（第22図、図版1・8・21）

規模：5.7×6.7m（推定・今回調査最大規模）　壁高：0～5.7cm　主軸：N－31°－W　周溝：一部・幅10～18cm・深さ1～2.2cm　柱穴深さ：P1 70.3cm・P2 59.0cm・P3 69.9cm・P4 62.4cm　その他ピット：P5 84×80cmの隅丸方形で深さ60.9cm・P6 14.2cm・P7 7.2cm　床面積：35.16㎡（推定）遺物量：455g（土師器239g・須恵器0g・その他216g）　所見：覆土は他竪穴よりも暗色の褐色土を主体とする。覆土が薄いせいもあり、竪穴の規模に比して遺物量は少ない。P5が竪穴の隅ではなく、カマド右ソデに接するように掘り込まれており、他竪穴とは異なる平面形態をみせる。第22図1・2の坏片は共にカマド内の出土である。2は内面に放射状にミガキを施す。

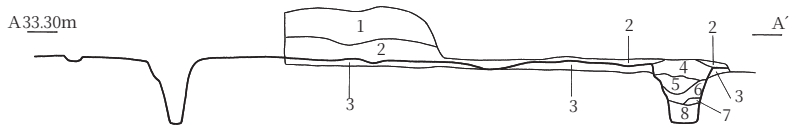


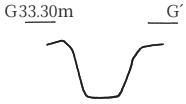
SI12　南東から



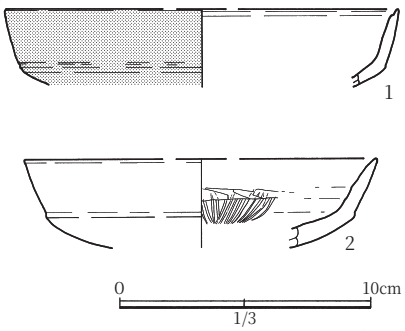
SI12 P3　東から

SI12 P5土層断面　東から



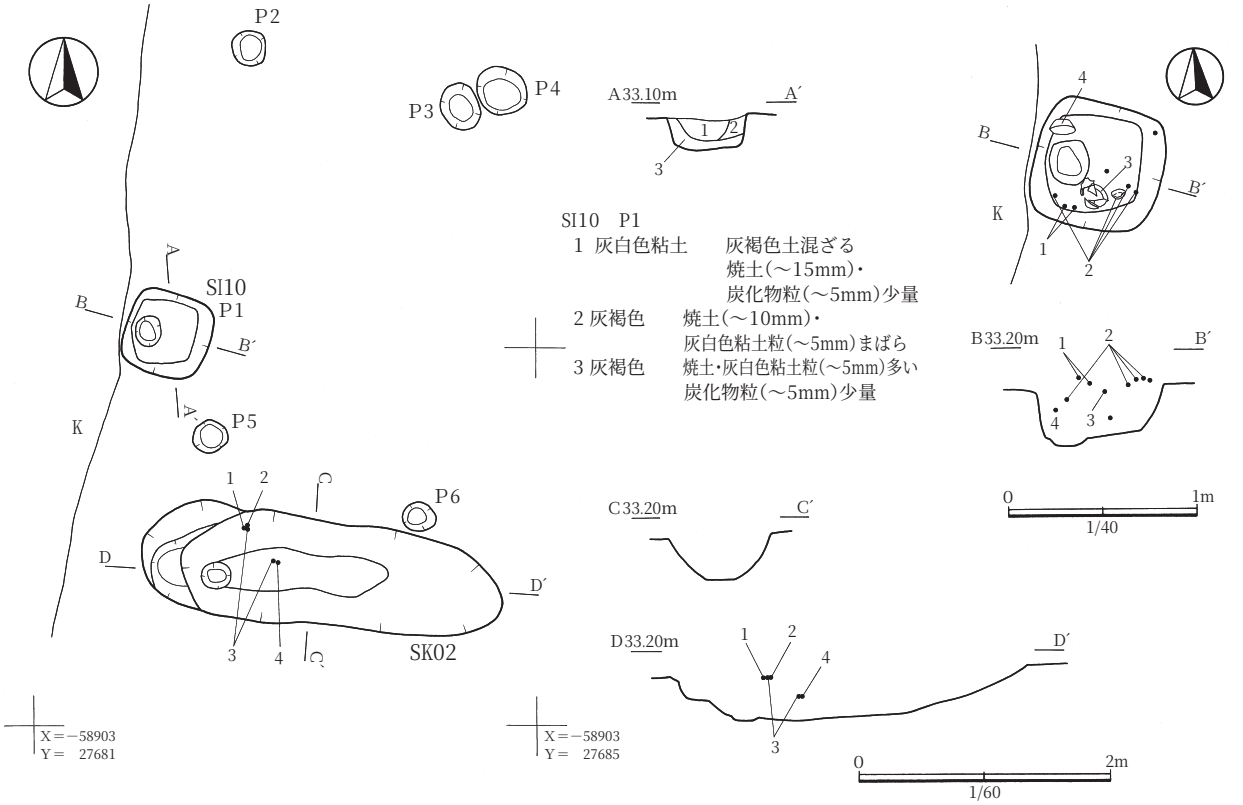


SI12
1 暗灰褐色　　現表土
2 暗褐色　　粘性強
3 暗褐色粘土　　SI12床面
4 暗褐色　　橙色粒まばら　黄白色粘土粒少量　P5覆土上層
5 黄白色粘土　　暗褐色土・小礫(～20mm)少量
6 暗褐色　　焼土粒(～5mm)少量
7 暗褐色　　黄白色粘土混ざる
8 暗褐色　　黄白色粘土粒少量

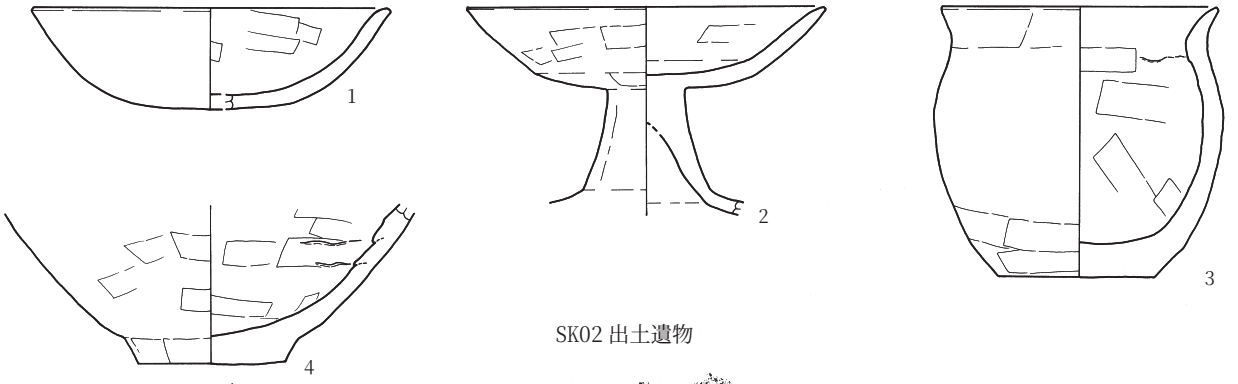


0　2m
1/80

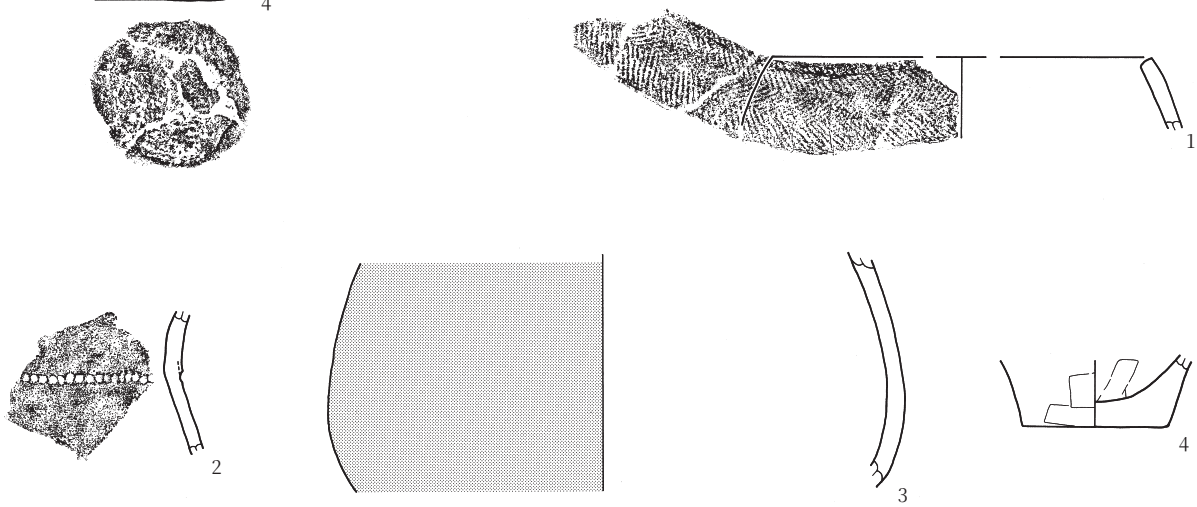
第22図　SI12遺構図・出土遺物



SI10 出土遺物



SK02 出土遺物



第23図　SI10・SK02遺構図・出土遺物

SI10（第23図、図版7・8・17・21）

規模・壁高ほか：不明　その他ピット：P1 58×57cmの隅丸方形で深さ33.0cm　遺物量：1,015g（土師器1,008g･その他7g）　所見：平面形状や出土遺物からみて、竪穴建物内のいわゆる貯蔵穴（他遺構ではP5）であったと推定されるため、SIとした。ピットの軸はN－102°－Eと推定され、伴う柱穴が周囲にみられないことから、竪穴の本体は西側のSD03・04に壊されているものと考えられた。調査工程上SD03・04を完掘することができず、柱穴は溝の底面に残っていた可能性も否定できない。出土遺物は覆土上層から多く出土しており、第23図1～4は同時期の一括遺物とみてよいであろう。

（2）A区　土坑

SK01（第24図、図版12・13）

規模：1.59×1.12m　深さ：20cm　軸：N－98°－E　A区北側の斜面が落ちていく縁に位置し、SD05の底面付近で確認されたため、本来はもっと深い土抗であった可能性が高い。土師器の小片数点が出土したが、図示できるものはなく、時期も特定できない。覆土は暗灰褐色土に黄褐色粘土粒が混ざり、古墳時代もしくは奈良・平安時代かと推定される。

SK02（第23図、図版7・12・19・22）

規模：2.90×0.88m　深さ：40.6cm　軸：N－98°－E　覆土は粘性の強い灰褐色土に地山の褐色粘土が混ざる。覆土上層から第23図1～4の弥生土器が出土した。遺構の性格は判然としない。

SK03（第24図、図版8・12）

規模：1.0×0.72m　深さ：34.4cm　軸：N－47°－E　隅丸方形を呈する縄文時代の陥し穴とみられ、SK04と重複するが、SK04を先に掘り上げてしまったために新旧関係は不明である。底面中央からやや南西寄りに、深さ39.7cmの小ピットを有し、使用時に逆木が埋め込まれていたものとみられる。覆土は粘性の強い暗褐色土を主体とし、レンズ状の堆積がみられた。小ピット部分は地山上層の褐色粘土が混ざる。出土遺物はない。

SK04（第24図、図版8・12）

規模：1.52×0.8m　深さ：89.9cm　軸：N－83°－E　縄文時代の陥し穴とみられ、SK03と重複する。底面中央に、深さ55.2cmの小ピットを有する。覆土は粘性の強い暗褐色土を主体とし、上層から底面付近まであまり変化がみられなかった。小ピット部分にはSK03同様、地山下層の黄白色粘土が混ざる。西壁付近の中層で黒曜石の小剥片1点が出土している。

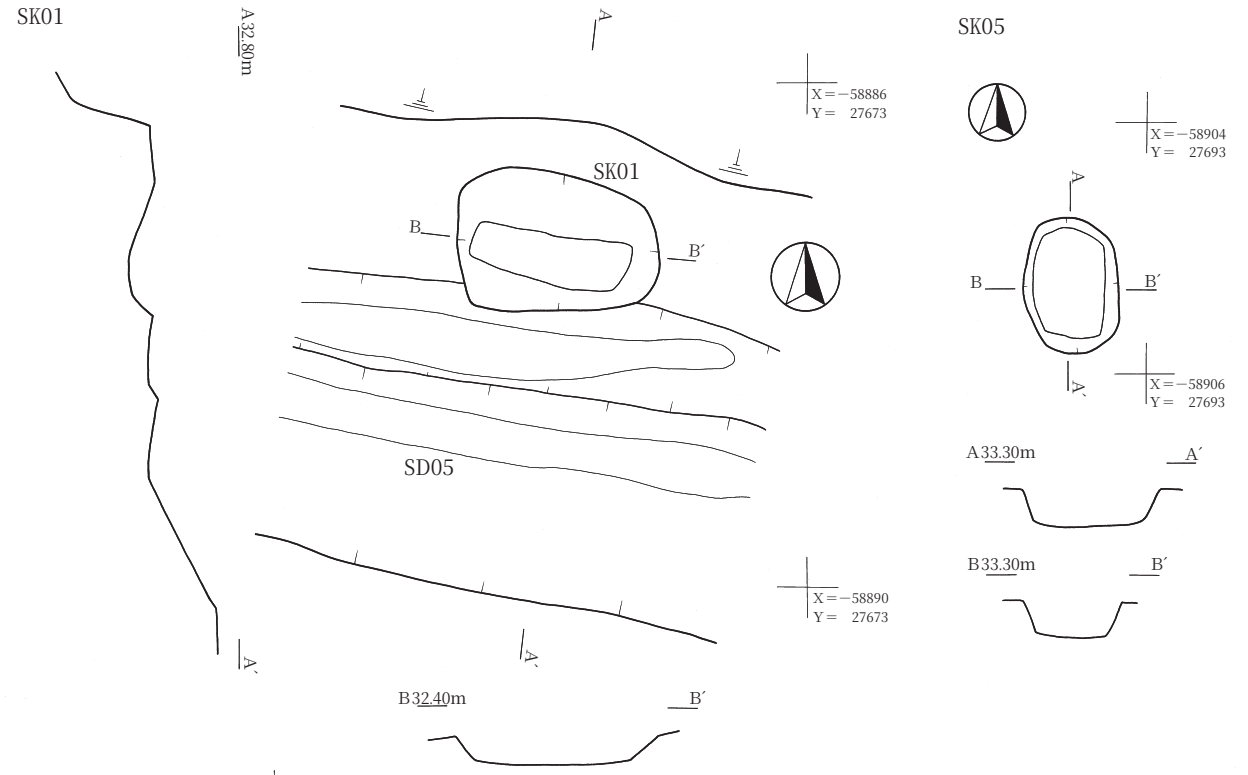
SK05（第24図、図版8・12・13）

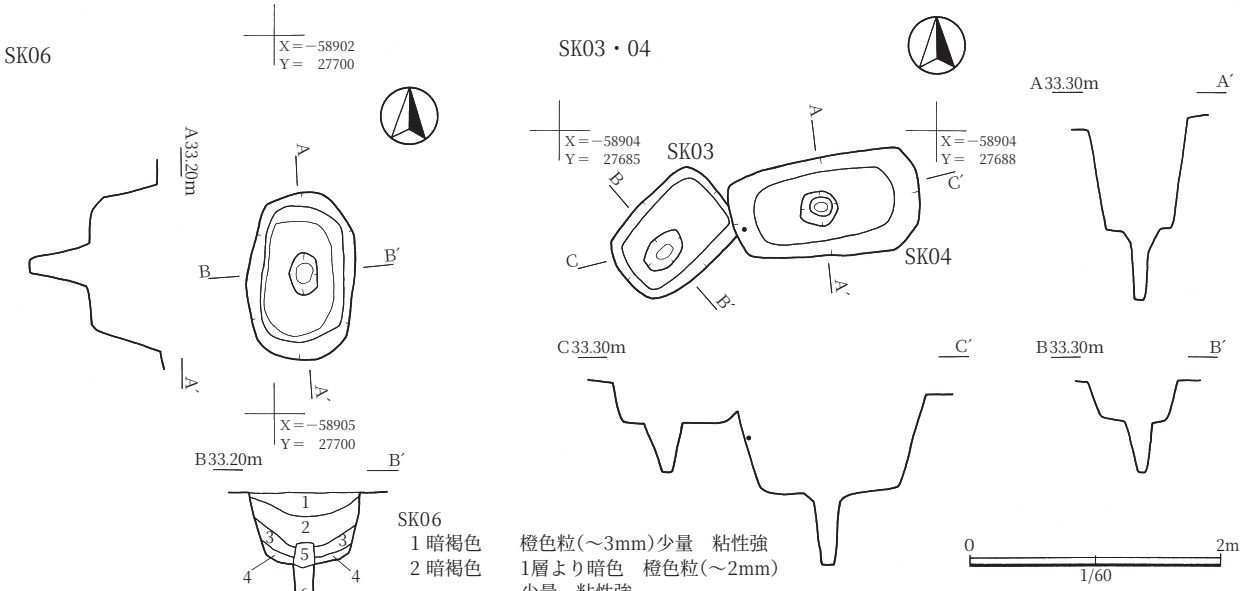
規模：1.06×0.76m　深さ：29.8cm　軸：N－14°－W　覆土は粘性の強い黒褐色土を主体とし、下層には地山褐色粘土が混ざる。SK03・04・06と異なり底面にはピットがみられない。黒曜石の小片が出土した。

SK06（第24図、図版13）

規模：1.32×0.84m　深さ：56.3cm　軸：N－2°－E　覆土は粘性の強い暗褐色土がレンズ状に堆積する。底面中央に深さ48.4cmの小ピットを有する。土層断面において、このピットに棒状のものが刺さり、根元が腐食したとみられる様子が観察された。出土遺物はない。

SK03～06の覆土には、時期を判断するための土器が一切含まれていなかったが、その形状や黒曜





SK06

1 暗褐色	橙色粒(～3mm)少量　粘性強
2 暗褐色	1層より暗色　橙色粒(～2mm)少量　粘性強
3 暗褐色	褐色粘土(地山層)混ざる
4 暗褐色	混ざりなし　粘性強
5 暗褐色	3･4層より暗色　杭(逆木)の根元が腐食したものか
6 暗褐色	地山下層の黄白色粘土混ざる

SK03･04　北西から

SK10 出土遺物

0　10cm
1/3

遺構外出土遺物

遺構外 1

0　5cm
1/2

第24図　SK01･03･04･05･06遺構図、SK10出土遺物、遺構外出土遺物

石の小片がみられることから、縄文時代の陥し穴と判断した。

SK09（第6図）

SI04の西1mに位置する。54×40cmの範囲で焼土が堆積しており、周囲の暗色土部分から土師器小片数点が出土したが、明瞭な掘り込みなどを確認することができなかった。SI04竪穴内にはかなりの焼土が堆積していたため、関連する可能性もあり得る。

SK10（第6・24図、図版13・22）

SI04とSI06の中間に位置し、48×34cmの範囲で焼土の堆積と若干の燃焼面がみられた。周囲に暗色の覆土がみられたため、当初は竪穴を想定し調査したが、平面プランは確認できなかった。第24図1のハケメ調整の土師器片が出土しているが、焼土との関連性も判然としない。

SK11（第6図）

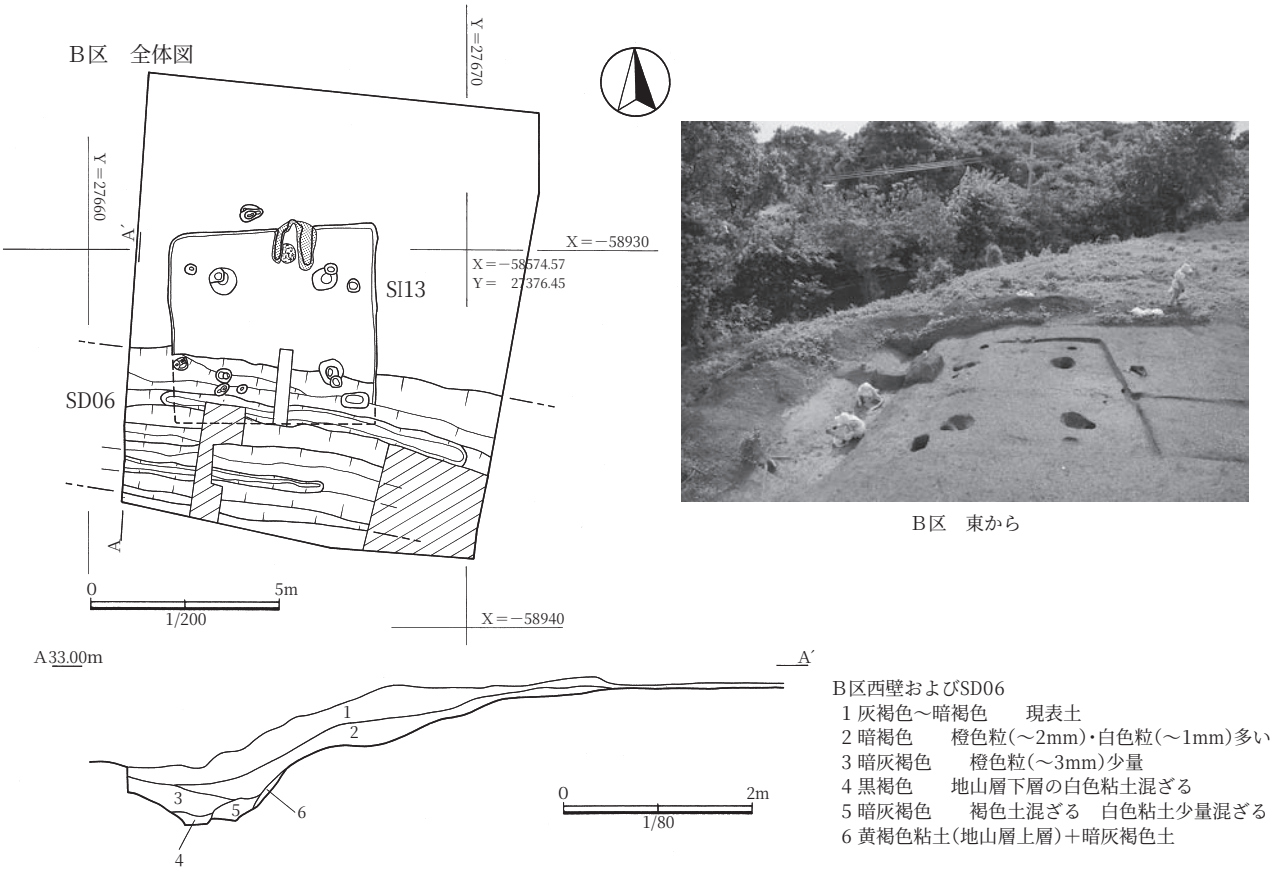
SI08の南2mに位置し、60×45cmの範囲で焼土の堆積と若干の燃焼面がみられたが、掘り込みなどは確認できなかった。出土遺物はない。

SK09～11は結果としては「焼土跡」であり、平面プランなどが確認できないものの、焼土単体での堆積もしくは近現代の撹乱的な焼土には見えなかったため、土坑として扱った。

（3）B区

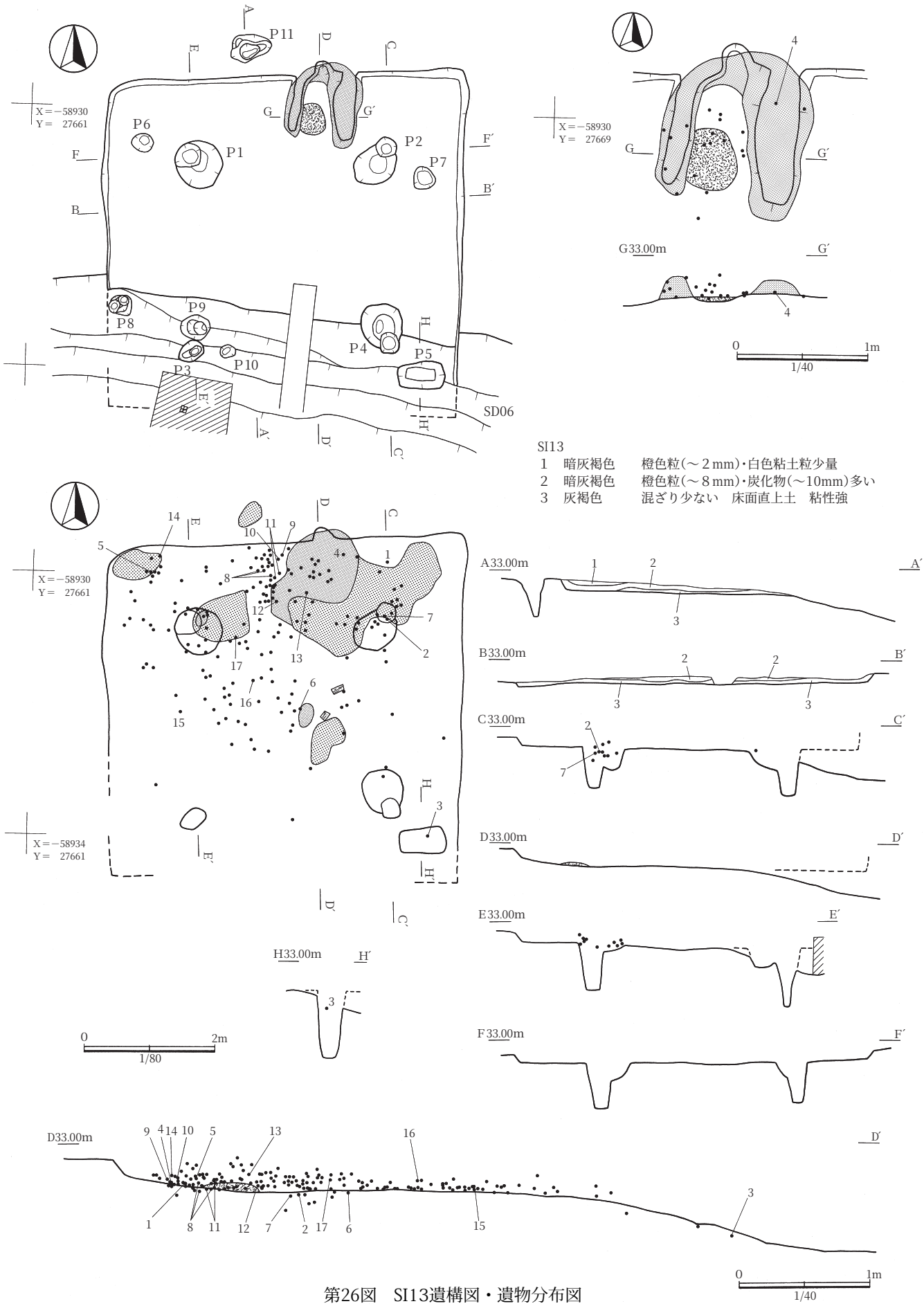
SI13（第25～27図、図版9・10・14・17・18・21・22）

規模：5.2×5.5m（推定）　壁高：2.5～15.9cm　主軸：N－3°－W　周溝：検出されず　柱穴深さ：P1 72.3cm・P2 62.7cm・P3 89.3cm・P4 67.9cm　その他ピット：P5 74×42cmの方形で深さ

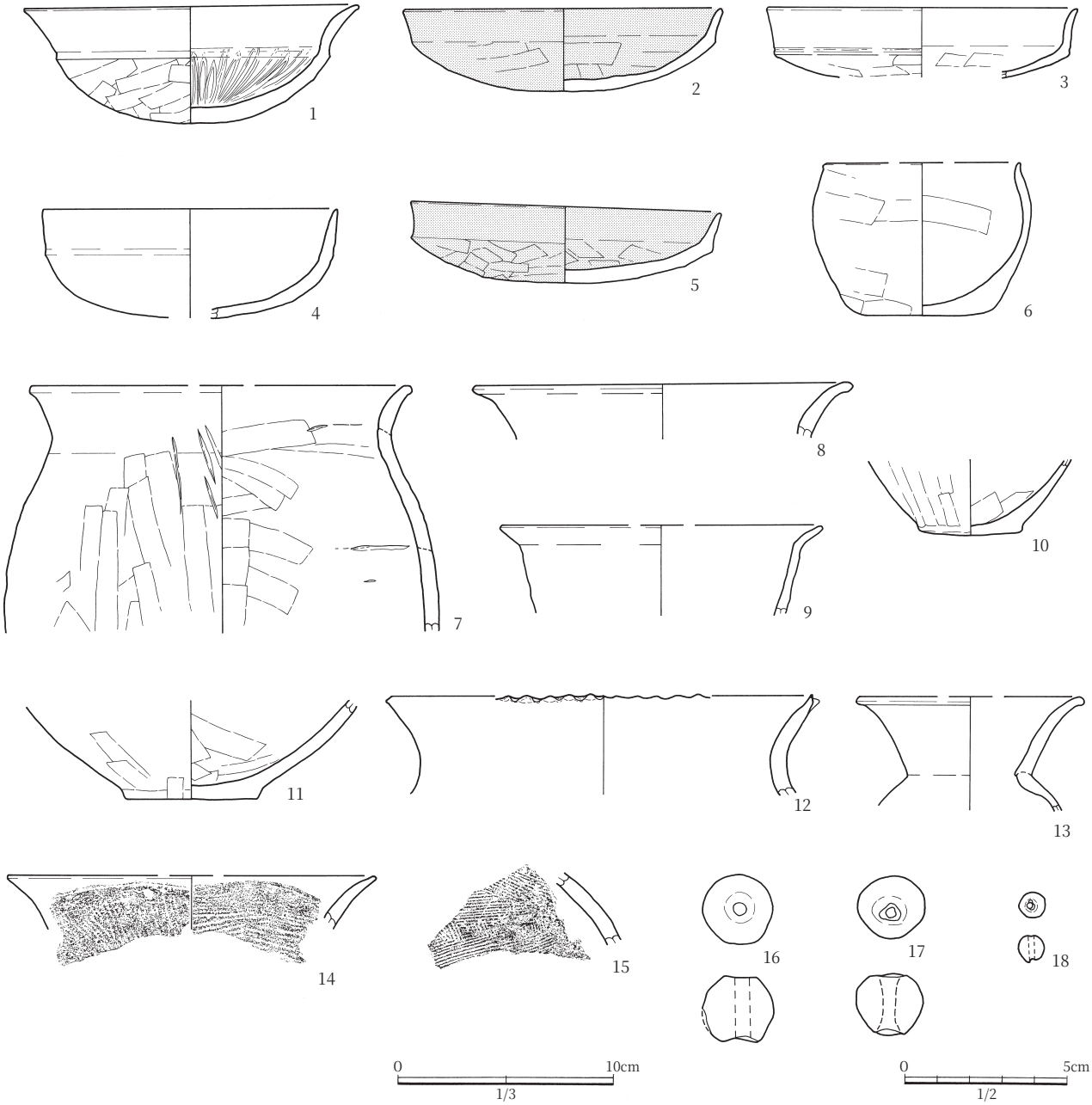


B区　東から

第25図　B区全体図・B区西壁断面図



第26図 SI13遺構図・遺物分布図



第27図　SI13出土遺物

101.5cm・P6 60.4cm・P7 6.8cm・P8 71.5cm・P9 37.3cm・P10 71.1cm・P11 60.7cm（P3～P5・P8～P10は北側床面からの推定値）　床面積：26.01㎡（推定）　遺物量：5,533g（土師器4,575g・須恵器4g・その他954g）　所見：覆土はA区の竪穴建物跡と同様、粘性の強い暗灰褐色土を主体とする。南側1/3をSD06（近世溝跡）に壊される。北壁中央やや右寄りにカマドを設置し、他の多くの竪穴がもつ貯蔵穴とみられるP5は、南東隅P4の隣に平面規模を他竪穴の半分程に縮小したように掘り込む。柱穴はそれぞれ竪穴の中央側に、深さ35cm前後のふくらんだ掘り形をもつ。柱穴覆土は暗灰褐色土に橙色粒（焼土か）が混ざるものが一様に堆積しており、柱穴の縁は崩れていない。抜き取り痕跡ではない可能性も考えられる。P9としたピットも本来はP3のふくらむ掘り形であろう。

第27図1はカマド右ソデの脇から、2と7はP2の覆土上層から、4の坏はカマド右ソデの下層から出

土した。出土遺物には12の弥生土器、13～15の古墳時代前期の土師器なども含まれていた。

SI13を壊して走るSD06は、出土遺物がなかったが、灰色がかった覆土が他の近世溝跡と共通している。主軸方位はN－83°－Wであり、SD05の東半部分の軸方向（N－84°－W）と近似する。

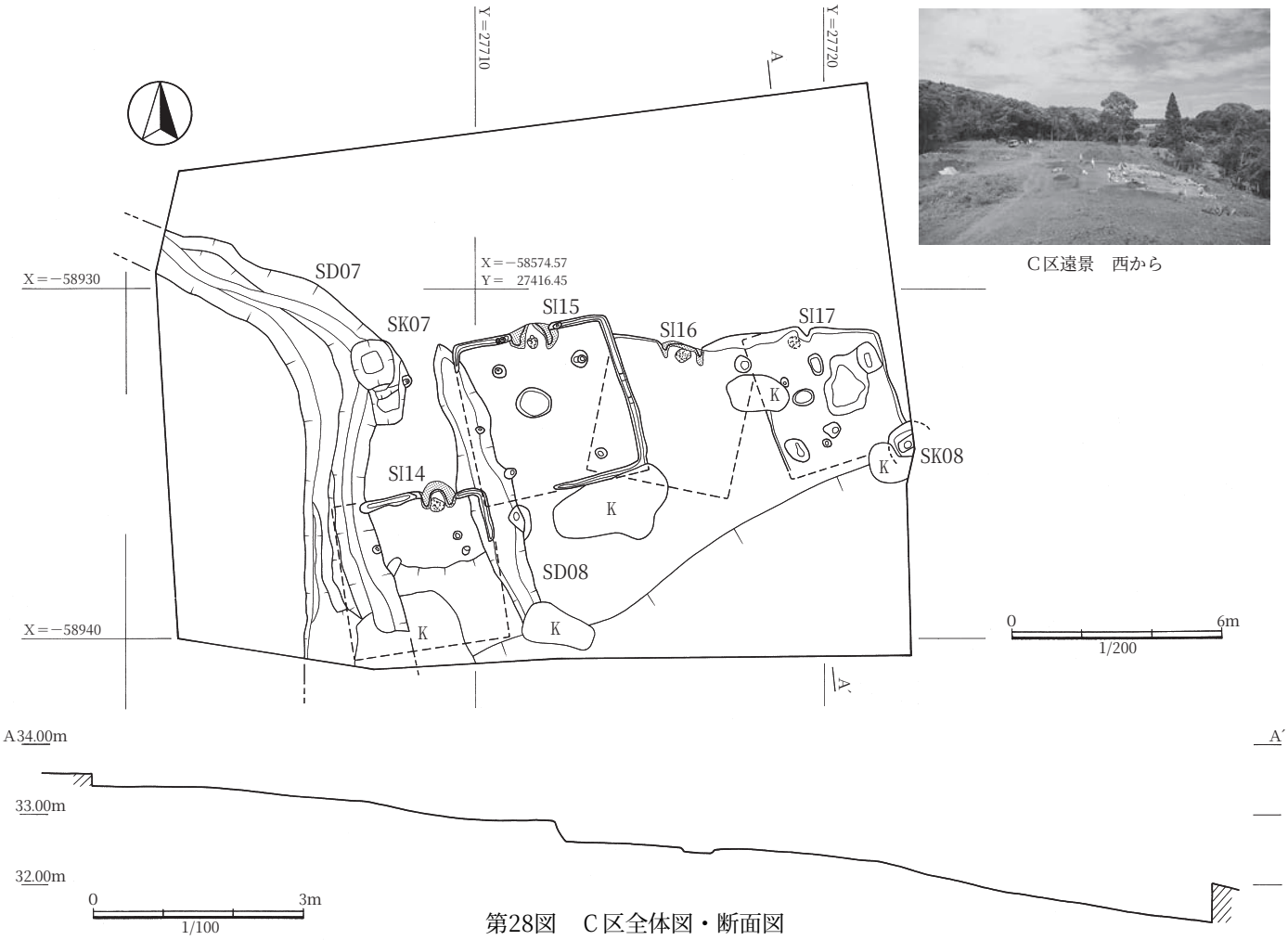
（4）C区　竪穴建物跡

C区はA・B区と異なり、地山上層の粘土層がA区と比べて明色かつ黄色がかっており、台地上にみられるいわゆるソフトロームと近似する土であった。

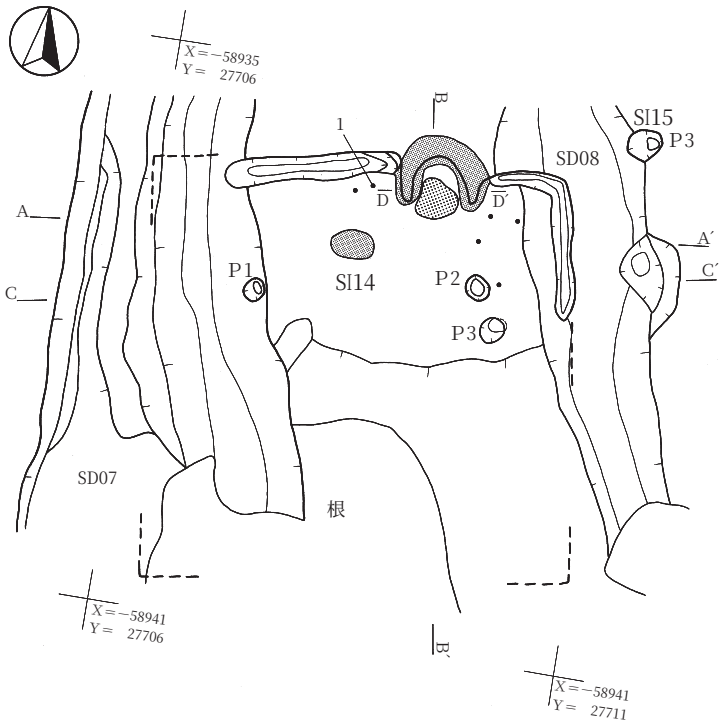
SI14（第29図、図版10・21）

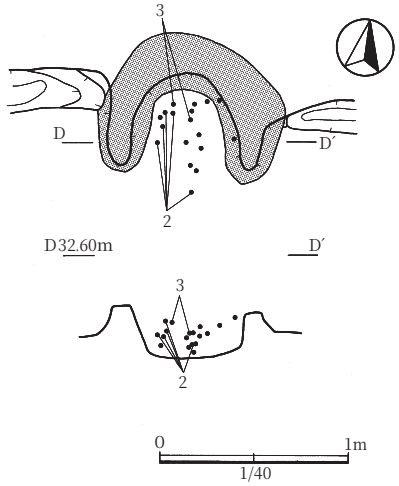
規模：4.5×4.5m（推定）　壁高：0～15.2cm　主軸：N－8.5°－W　周溝：幅18～30cm・深さ12.1～12.8cm　柱穴深さ：P1 23.5cm・P2 10.0cm　その他ピット：P3 36.9cm　床面積：16.26㎡（推定）　遺物量：895g（土師器652g・須恵器38g・その他205g）　所見：覆土は、ソフトローム状の黄褐色粘土を含む暗灰褐色土を主体とする。西側1/3をSD07に、北東隅をSD08に、南側半分を斜面状の地形や根などに壊されており、残存度合いは悪い。ただ、カマドは北壁に残っており、カマド内から土師器の甕片が多く出土した。カマドは、焼土は堆積していたものの、火床面が観察されず、ごく短期間の使用の後に廃絶されたものと推定される。第29図の遺構図は、P1とP2を柱穴として、P3・P4があったと仮定した上でのプラン推定復元であるが、P1・P2についても柱穴と呼ぶには貧弱な規模であり、このような復元ラインにはならない可能性も高い。

C区遠景　西から



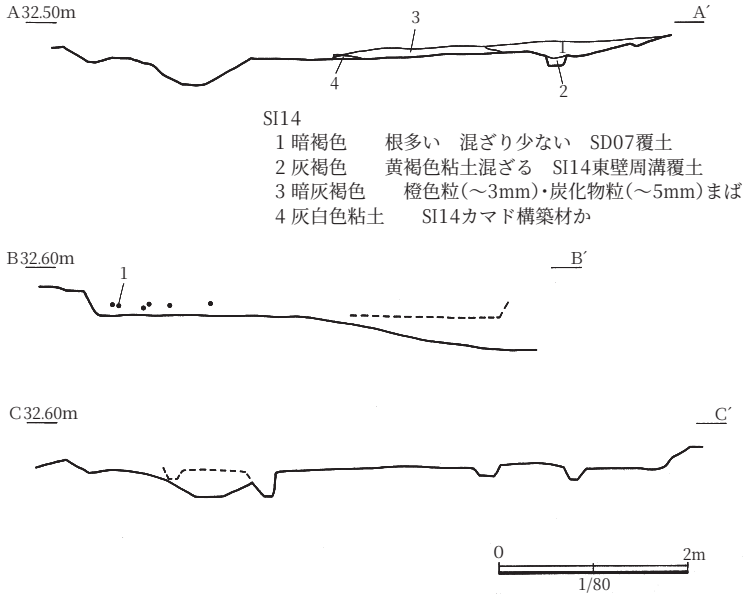
第28図　C区全体図・断面図



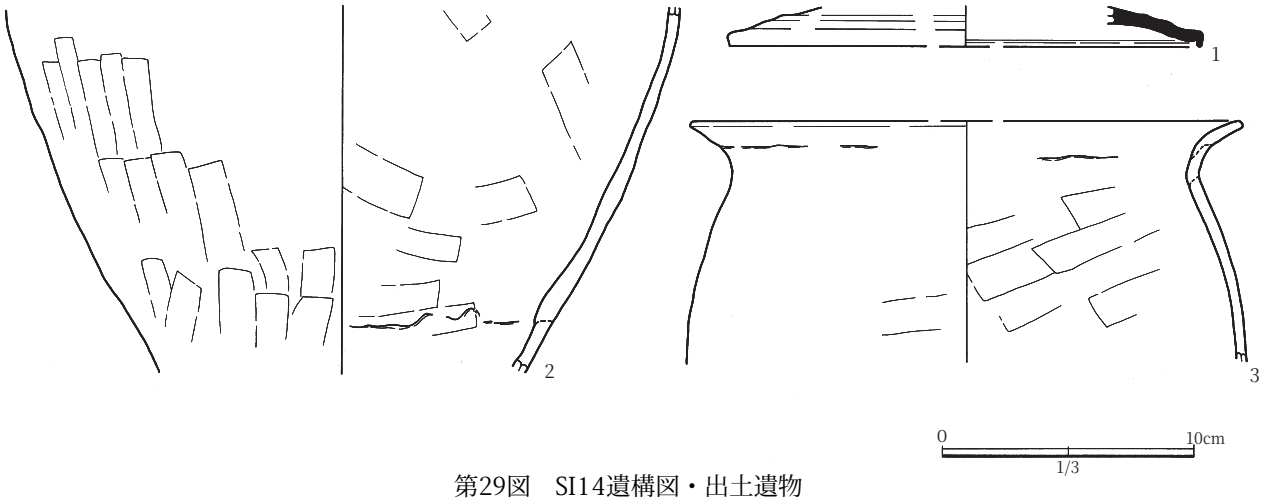


SI14(手前)とSI15(右奥)　南から

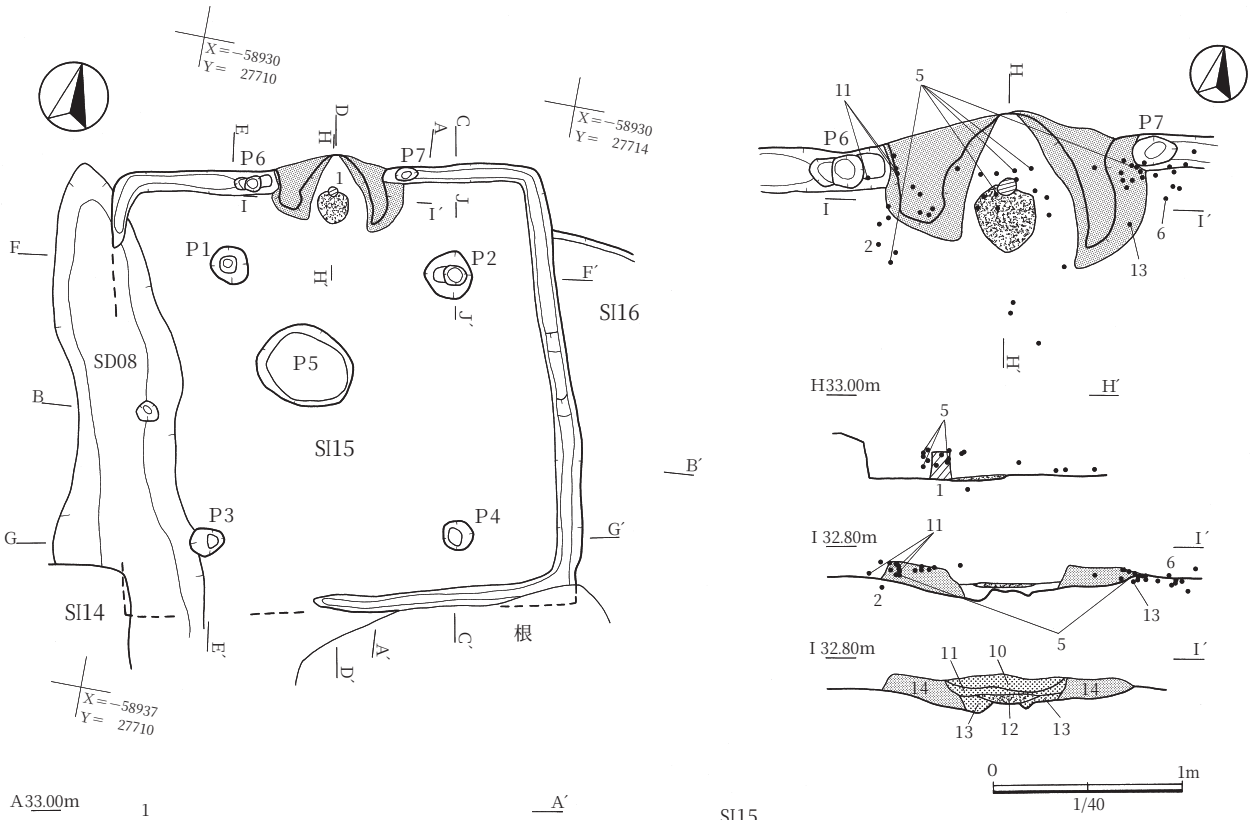
SI14カマド付近遺物出土状況　北西から

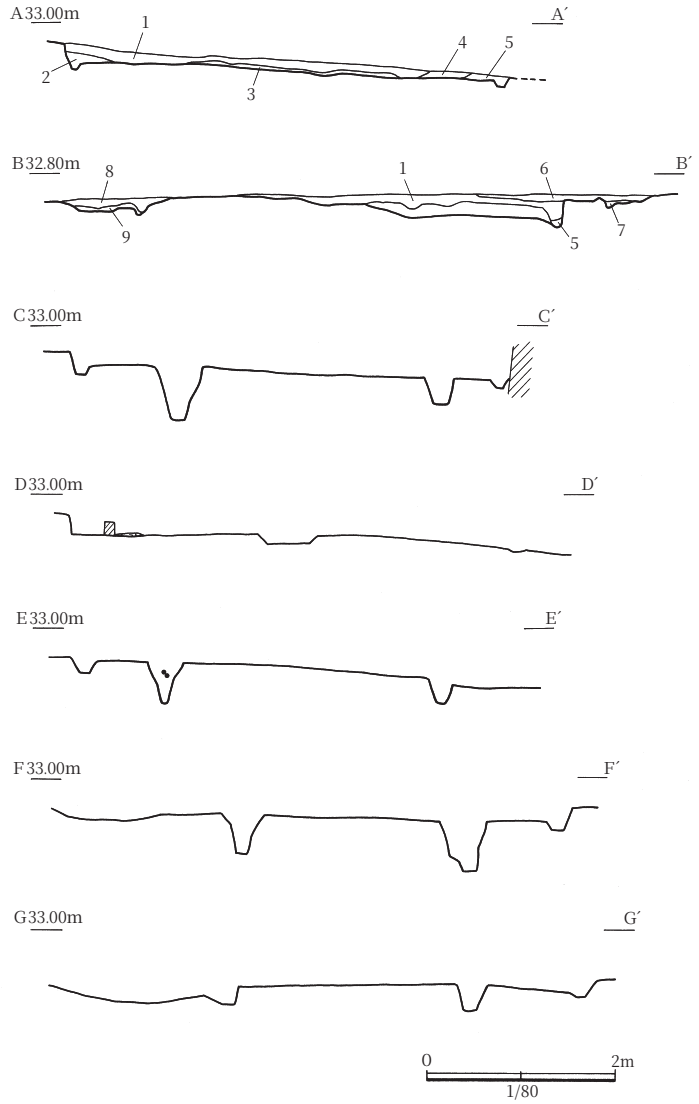


SI14
1 暗褐色　根多い　混ざり少ない　SD07覆土
2 灰褐色　黄褐色粘土混ざる　SI14東壁周溝覆土
3 暗灰褐色　橙色粒(～3mm)・炭化物粒(～5mm)まばら
4 灰白色粘土　SI14カマド構築材か



第29図　SI14遺構図・出土遺物



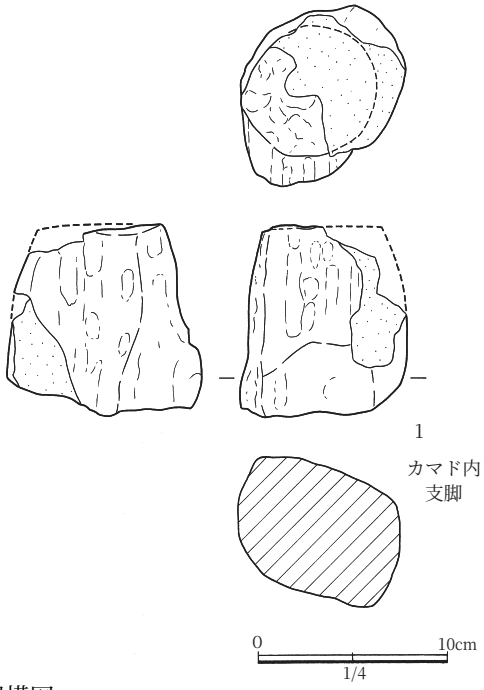


SI15

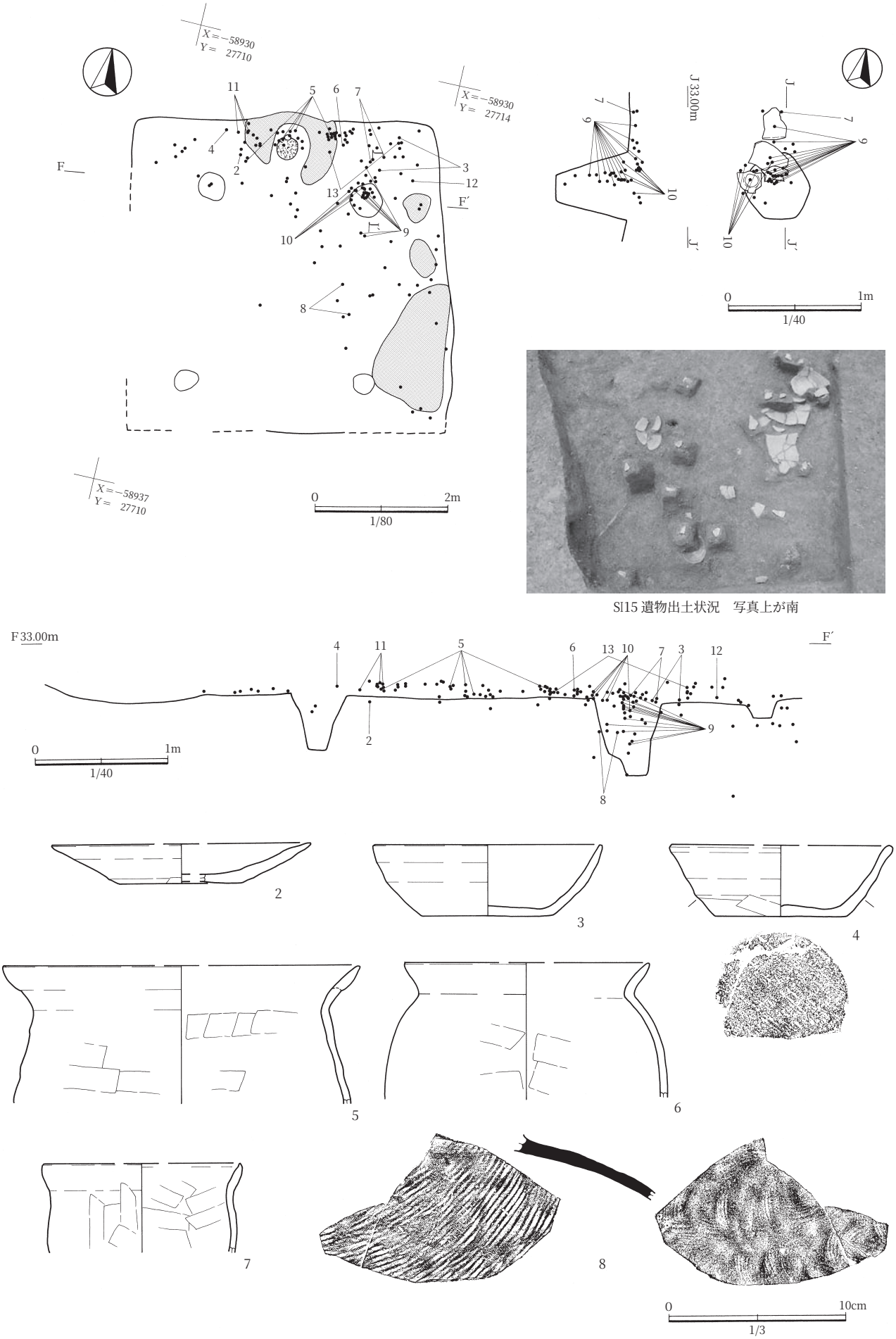
1 暗灰褐色　褐色粘土(地山粘土か)混ざる　橙色粒(～2mm)少量
2 暗灰褐色　褐色粘土1層より多く混ざる　橙色粒(～4mm)まばら
3 暗灰褐色　黄褐色粘土多く含む　掘り形充填土　3層上層面がSI15の床面
4 黄褐色粘土　灰褐色土・白色粘土少量
5 暗灰褐色　黄褐色粘土多い
6 暗灰褐色　橙色粒(～3mm)まばら　粘性ややあり
7 暗灰褐色　黄褐色粘土多い　粘性強
8 暗灰褐色　橙色粒(～2mm)少量　SD08覆土
9 灰褐色　黄褐色粘土混ざる

SI15　カマド

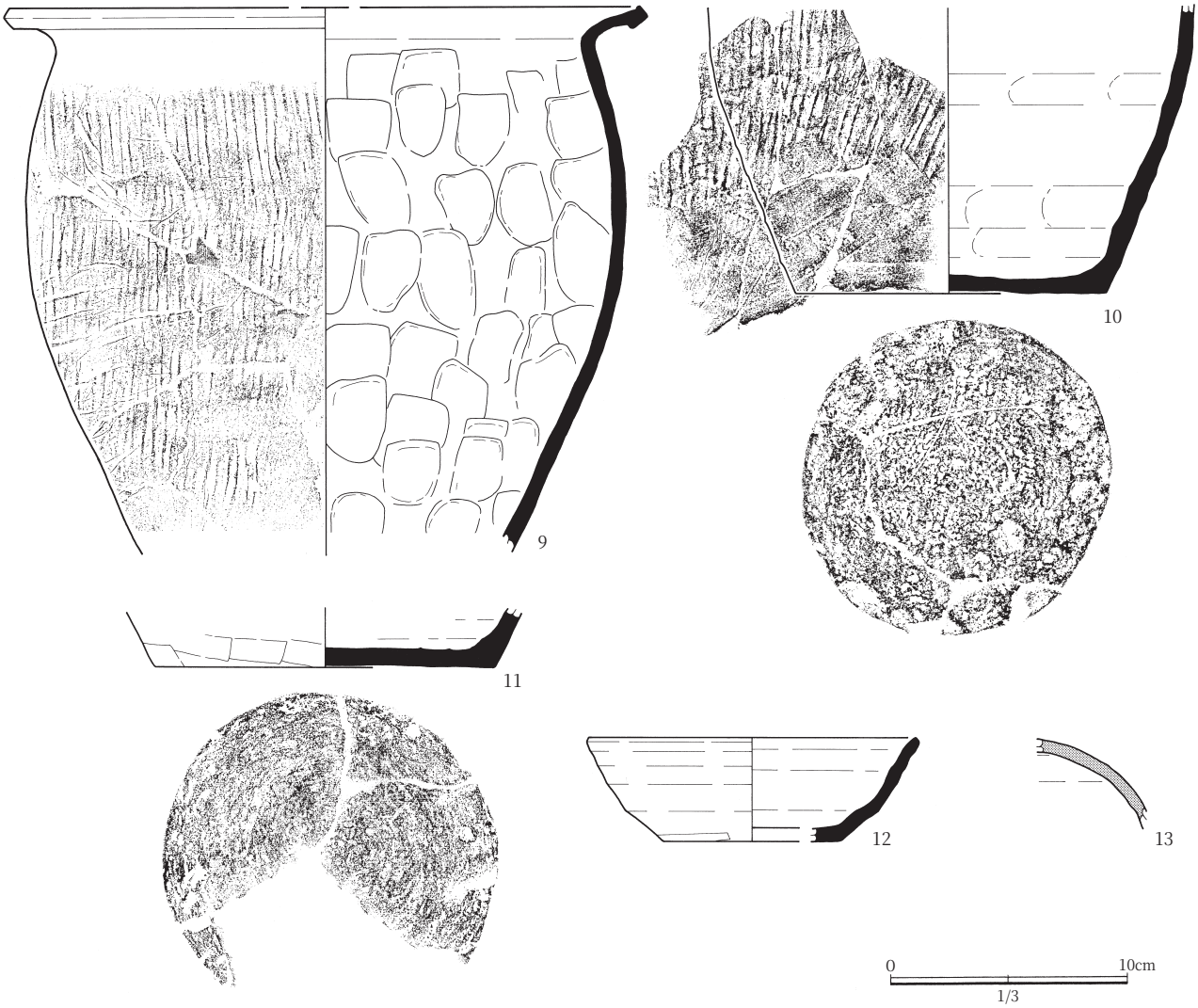
10 灰褐色　焼土ブロック(～20mm)・炭化物(～10mm)多い
11 灰褐色　焼土ブロック(～10mm)1層より多い
12 赤褐色　火床面
13 黄褐色粘土(地山層)に焼土混ざる
14 灰褐色土に灰白色粘土ぼんやり混ざる　焼土(～5mm)少量　ソデ部分



第30図　SI15遺構図



第31図　SI15遺物分布図・出土遺物（1）



SI15 遺物出土状況　北西から

SI15 床面検出状況　西から

第32図　SI15出土遺物（２）

SI15（第30～32図、図版10・11・18・19・21）

規模：4.7×4.8m（推定）　壁高：1.7～30.6cm　主軸：N－11°－W　周溝：幅15～28cm・深さ7.4～15.1cm　柱穴深さ：P1 42.5cm・P2 53.9cm・P3 22.1cm・P4 29.6cm　その他ピット：P5 14.5cm・P6 45.7cm・P7 37.4cm　床面積：18.68㎡（推定）　遺物量：7,158g（土師器2,897g・須恵器2,424g・その他1,837g）　所見：竪穴西壁の大半を近世の溝跡であるSD08に壊され、南側半分の床面や南壁の一部を、樹木の根と推定される不整形な穴によって荒らされている。当初は、土層

が自然な堆積に見えたことから、SI15のピット及び床面の掘り形と想定し掘り下げていた。しかし、斜め下方向にどこまでも不規則に続き、底や壁のない穴が環状につながり始めたため、掘り切らずに調査を終えた（図版11の左上写真にその一部と未掘の暗色の部分が、図版10の下写真に調査を終えて環状になりつつある状況が写る）。P4の下方にも続きそうな状況が観察されたことから、この竪穴よりもかなり古い樹木であったのかもしれない。

カマドは北壁中央に設けられ、火床面の奥部分に粘土製の支脚（第30図1）が据えられていた。両ソデ脇の壁周溝の中に、ほぼ左右対称で対となる小ピット（P6・P7）が検出された。カマド本体とのなんらかの構造的関連性を考えても良さそうな位置である。P5はピットとしたが、床下の掘り形の可能性が高い。出土遺物は覆土の残り状況と比例してか、竪穴の北及び東壁寄りに多くみられた。

第32図9～12は千葉産の須恵器である。9・10の甕は、P2に流れ込むような形で出土した。9は底部と口縁部の大半が失われている。頸部の一部が完全に扁平になるなど、成形から焼成時にかけてかなり歪んでいたとみられる。焼成時にすでに割れていたとしても不思議ではなく、欠損品がこの場に持ち込まれたのではないかとするのは考え過ぎであろうか。10は底面に敷物とみられる縄目痕が残り、焼成前のヘラ書きがなされ､「大」と読み取れる。墨やヘラによって器に書かれた「大」の文字は、それほど珍しい事例ではないが、その意味するところは判然としない。ただ、当時の文字資料では、地名の略称が記される例が比較的多いとみられる。13は灰釉陶器の瓶類の小片である。

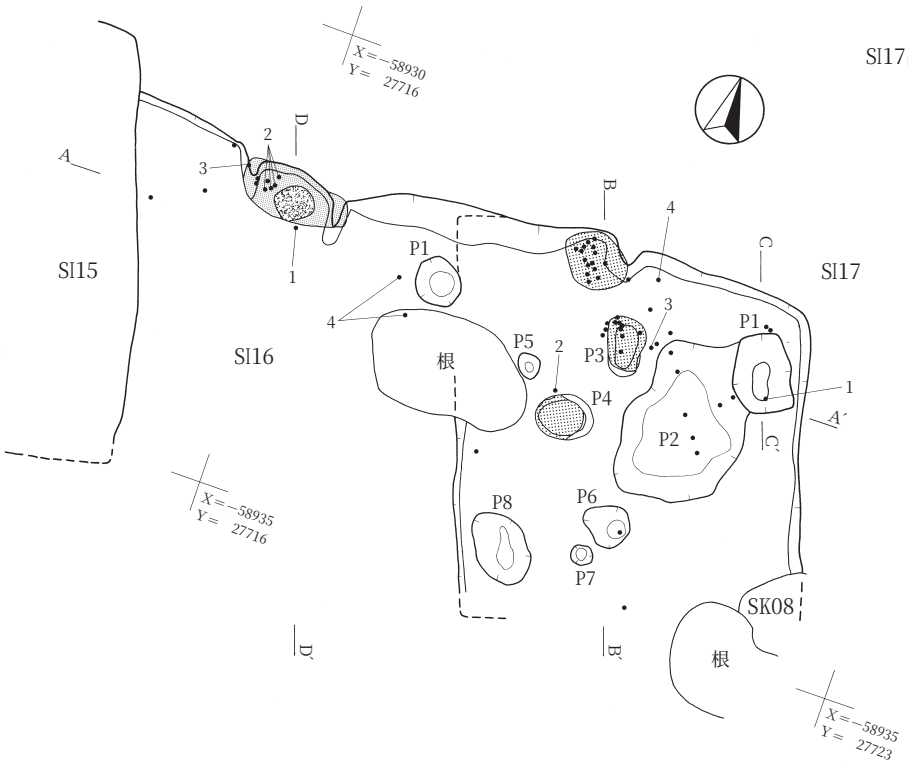
出土遺物からみて、SI15の時期は、9世紀中頃に位置付けられよう。

SI16（第33図、図版10・11・18・22）

規模:4.0×4.0m（推定）　壁高:0～14.9cm　主軸:N－11°－E（推定）　その他ピット:P1 6.8cm　床面積：14.4㎡（推定）　遺物量：822.0g（土師器326.0g・須恵器173.0g・その他323.0g）　所見：西側をSI15に、東側をSI17に切られており、北壁の一部とカマドが残存するのみである。南側は斜面地形によって流れた状態であり、平面プランを把握することはできなかった。カマド脇から第33図1の須恵器坏蓋が、カマド内からは2の須恵器坏と3の土師器坏が出土している。2はその器形から、8世紀後半の永田窯の所産とみられる。SI16はここに並ぶ4軒の竪穴の中で最も古く、奈良時代まで遡る可能性が高いと考えられる。

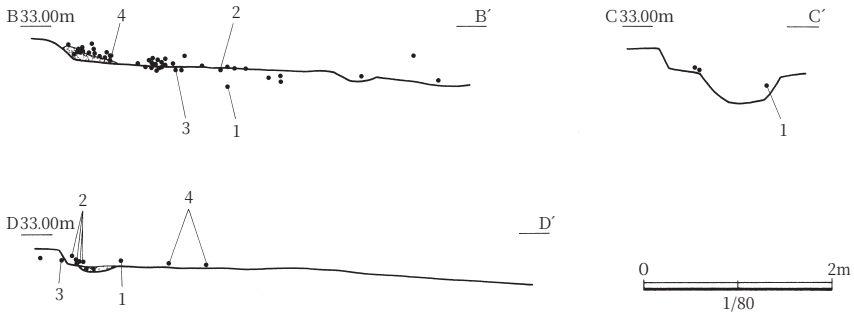
SI17（第33図、図版10・12・19・22）

規模：4.2×3.6m（推定）　壁高：0～20.1cm　主軸：N－18°－W（推定）　ピット深さ：P1 31.4cm・P2 9.4cm・P3 19.1cm・P4 4.4cm・P5 17.0cm・P6 8.5cm・P7 19.5cm・P8 13.2cm　床面積：12.33㎡（推定）　遺物量：1,420g（土師器1,149g・須恵器101g・その他170g）　所見：構造があいまいな竪穴であり、西壁及び南壁は明瞭でなかった。竪穴内北寄りに焼土の堆積が3カ所確認された。北壁に接する焼土跡は、火床面や白色粘土を用いたソデの痕跡も観察されず、カマドと呼ぶのはためらわれる。3カ所のうち、北側2カ所の焼土付近に遺物が集中しており、奈良・平安時代の所産とみられる第33図4の小型の甕や5の千葉産須恵器の甕片が出土している。一方、竪穴の床面付近やP1内では第33図1～2のような古墳時代前期の高坏脚部片が出土しており、3は古墳時代後期の高坏の脚部とみられる。カマドを有さないこと及び出土した高坏をみると、古墳時代前期の遺構が重複している可能性も否定できないが、層位的には確認できなかった。竪穴は奈良・平安時代の所産と考えておく。

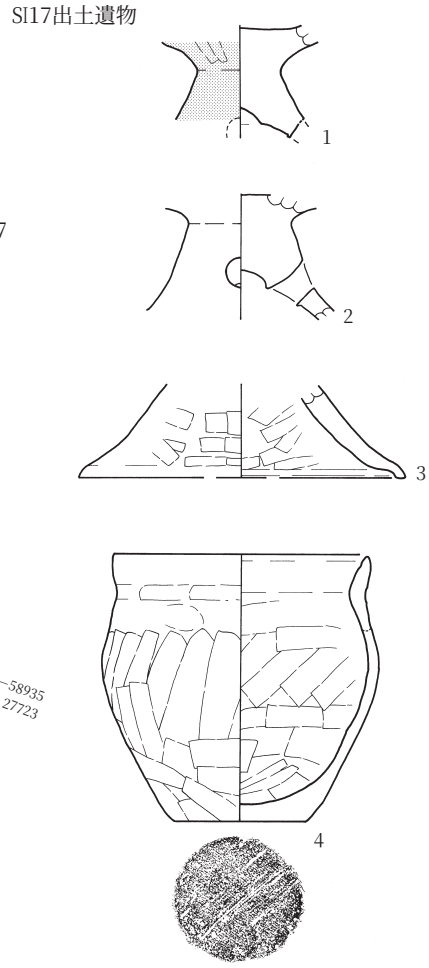


SI17

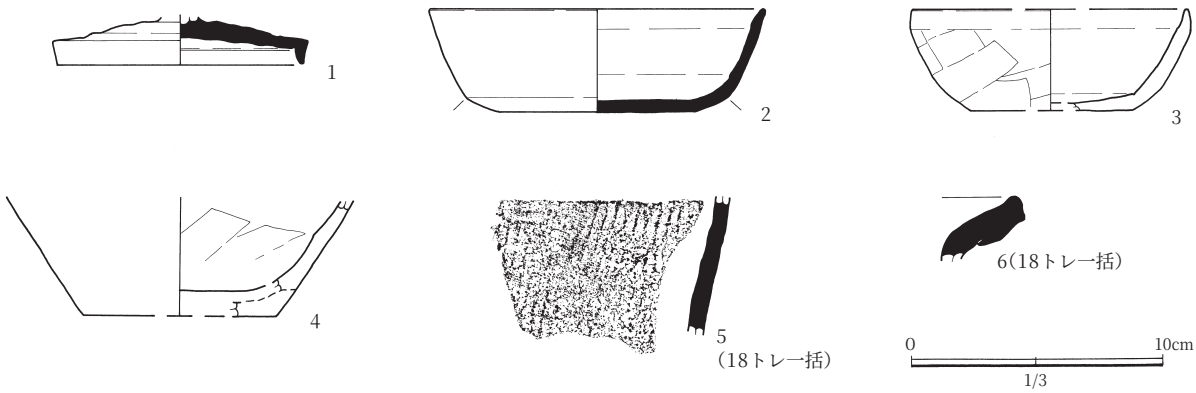
1 灰褐色　橙色粒(～5mm)少量　やや砂っぽく黄褐色粘土(地山層・いわゆるソフトロームにみえる)ぼんやり混ざる　粘性弱い
2 灰褐色　焼土多い　燃焼面なし
3 暗灰褐色　黄褐色粘土混ざる
4 2層＋黄褐色粘土多量
5 灰褐色　混ざりなし　床面か



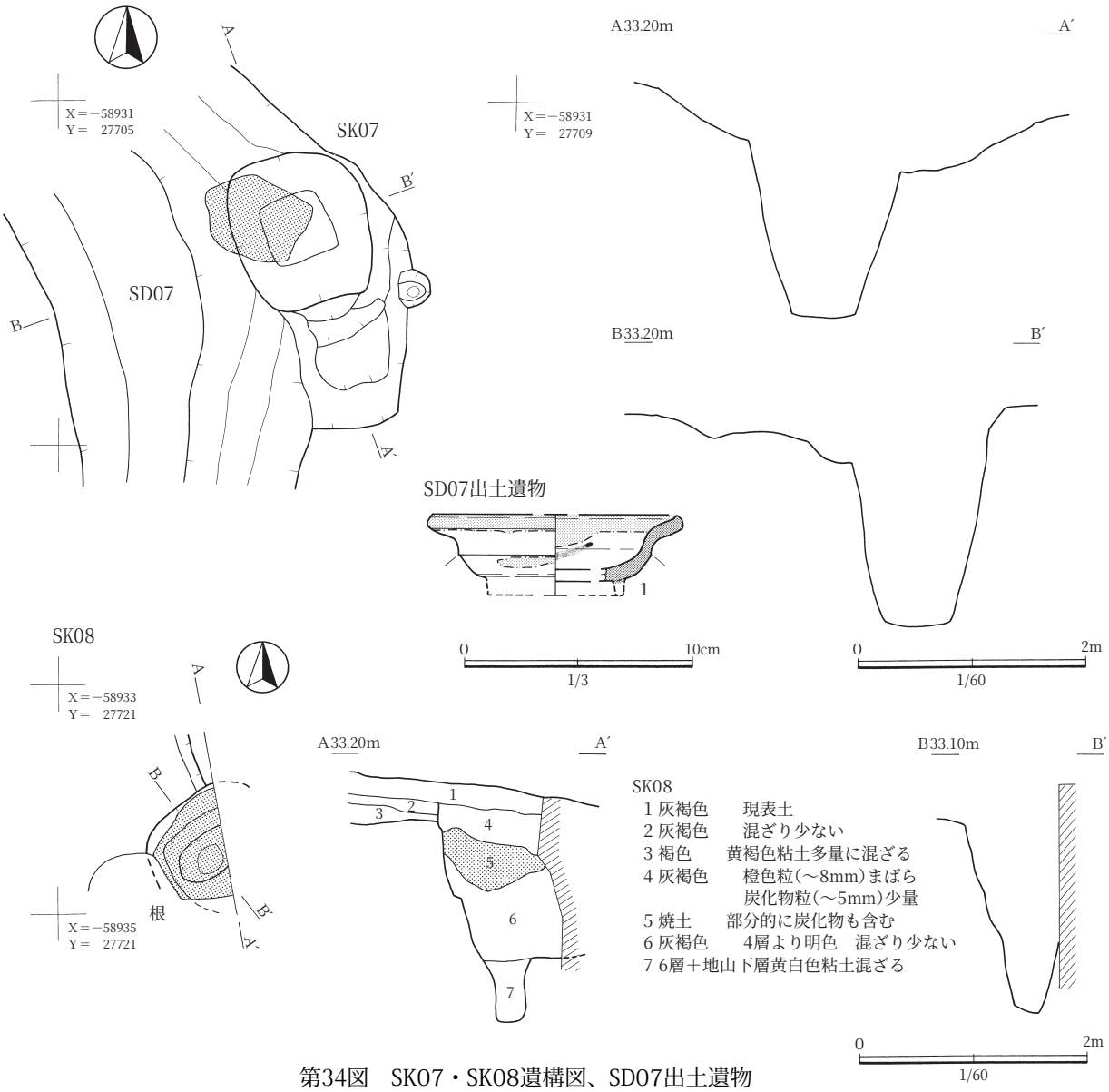
SI17出土遺物



SI16出土遺物



第33図　SI16・SI17遺構図・出土遺物



第34図　SK07・SK08遺構図、SD07出土遺物

（5）C区　土坑及び溝跡

SK07・SD07（第28・29・34図、図版11・13・19）

SK07は1.33×1.20m、深さ1.94m、軸はN－16°－Wである。上面プランは隅丸方形だが、底面は60×58cmでほぼ正方形を呈する。覆土上層には焼土ブロックが堆積し、近世磁器の小片を若干含む。接続するSD07の覆土からも、第34図1の瀬戸美濃陶器の鉄絵皿片が出土しており、近世の開墾時に掘り込まれた遺構とみられる。

SD07は幅が一定ではなく、西端で1.3m、SK07に接続する部分で2.44m、南側斜面におちていく部分で3.0mを測る。深さは25～50cm程度であり、底面標高の北西端と南端の落差は1.11mである。両者は一体化した構造をとるため、一連の遺構と考えられるが、その用途は判然としない。形状的には、SD07が導水してSK07に溜め、溢れた分は南の谷方向に流す、という構造である。

SK08（第34図、図版13）

大木の切株に覆われた状態で検出され、完掘できなかった。確認面からの深さは1.90mである。明確な出土遺物はないが、現表土直下からの掘り込みが観察される。覆土上層に多量の焼土が堆積し、縦に深くなる傾向はSK07と類似するため、同時期の所産と考えてもよいであろう。

第4章　総括

調査した竪穴建物跡17軒の時期をみると、古墳時代後期から終末期にかけての竪穴12軒と、やや間が空いて奈良・平安時代の竪穴5軒に分けられ、その変遷案を示しておく。

古墳時代の集落は、その竪穴建物に伴うと判断される出土遺物の観察から、概ね5世紀末葉から7世紀前半にかけてこの地に存続したとみられる。時期を考える根拠として、出土遺物の中でもカマド内やピット内、床面直上遺物などについて、主に椎津茶ノ木遺跡の編年を参照した。

時間的変遷として各遺構を分けると、Ⅰ（5世紀末～6世紀前半）SI02・08、Ⅱa（6世紀中葉）SI03・06、Ⅱb（中葉～後半期）SI13、Ⅲa（6世紀末）SI12、Ⅲb（6世紀末～7世紀初）SI04・09、Ⅳ（7世紀初頭～前半）SI10・11と4時期の変遷案を提示することができそうである。SI01と05は明確に伴う遺物がないため、時期を判断できない。

続く奈良・平安時代の竪穴は、Ⅴ（奈良時代8世紀中頃）SI14・16、Ⅵ（平安時代9世紀中頃）SI07・15・17、と二つの時期に大別できる。Ⅴ期は概ね上総国分寺の造営期にあたる。

古墳時代各時期の分布をみると、各竪穴は適度な距離を保っており、他の竪穴を意識した配置が伺える。SI12と13はその構造や主軸方向に独自性がみられる。時期不明としたSI01は、カマドを主柱穴間(P1・P2)の中央に設置していることが、Ⅳ期のSI11と同傾向にあり、平面規模も類似する。

それ以降のⅤ期・Ⅵ期には竪穴の構造も不明確になり、集落と呼べる土地利用状態ではなくなる。

ただ、今回調査した竪穴建物跡は、遺構確認面から床面までの深さ（壁高）が深くても20cm程度であり、10cmを切る部分も少なくなかった。竪穴がつくられた当時の本来の壁高は想定し難いが、現状で残存する覆土の数倍に及ぶ上層の覆土部分が失われており、出土遺物もまた同様に本来の状態ではなく、相当量が欠落しているとみて良いであろう。しかも、この台地上では十数年前までは耕作を行っており、上下の土の移動によって各時期の遺物が混入することも多いと思われる。さらに、Ａ区とＢ区では遺構覆土が粘土質であり、大半の土師器の器壁表面が溶けてしまっていた。そのため、この時期の特徴でもある器面の赤彩と黒色処理の残りが極めて良くない状況であった。そのことも少なからず時期判断に影響を与えるであろう。

SI06や08などの位置をみると、当時の台地はもう少し北側に広かったと想定される。そして、台地の中央部分を東西に切り通した道部分及び台地を南北に分断する市道40号線部分にも、本来は竪穴が存在したと考えられる。市道40号線の対岸、台地幅が南北に広くなり養老川を望む先端に近い付近では、現在も荒蕪地及び耕作地となっており、地表で土師器の散布が認められる。耕作者の話では、畑をやや深く掘った時に、甕がその形のまま出土し、埋め戻したことがあるという。この集落分布の密度の中心は、立地的にみても台地先端に向かう西方向にあるとみられる。

今回の調査では、古墳時代後期から終末期にかけての時期を中心とした小ノ台遺跡の集落の東端部分を垣間見たこととなる。相対的にみて叶台遺跡や福増山ノ神遺跡の集落よりもやや新しい6世紀末頃からの時期に中心がある。各遺跡の竪穴の構造も含めて集落を比較検討し、さらに武士遺跡などの墓域を視野に入れることで、この地域の時期的様相や変遷など興味深い情報が得られることと思う。

《参考文献》

浅利幸一　1989「福増山ノ神遺跡発掘調査報告書」財団法人市原市文化財センター調査報告書第33集
大村　直　1992「市原市叶台遺跡」財団法人市原市文化財センター調査報告書第44集
木對和紀　1992「椎津茶ノ木遺跡」財団法人市原市文化財センター調査報告書第49集
木對和紀　1993「竪穴住居の耐久年数からみた房総における古墳時代須恵器の出現と終焉
－椎津茶ノ木遺跡を中心として－」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』

第2表　出土遺物観察表(計測単位はcm)

挿図番号	遺物番号	船台名	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
8	1	SI01	土師器	坏					(13.8)		赤褐色粒(1mm)少量	良好	橙	内外面ナデ	
8	2	SI01	土師器	高坏							砂粒(～1mm)多い	やや甘い	明褐～赤橙	内外面不明瞭	
8	3	SI01	土師器	高坏							白色粒(～0.5mm)・雲母・骨針少量	やや甘い	明黄褐	内外面不明瞭・外面赤彩	
8	4	SI01	土師器	高坏							赤褐色粒(～0.5mm)少量	やや甘い	明褐	内外面不明瞭	
8	5	SI01	須恵器	甕	(17.4)	1/6					灰白・やや粗い／白色粒(～1mm)多量、暗灰色粒(～2mm)・砂粒(～1mm)多い	甘い	明灰	内外面不明瞭	
8	1	SI02	土師器	高坏							白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～2mm)・雲母少量	甘い	橙～灰褐	内外面不明瞭	
8	2	SI02	土師器	高坏			(9.2)	1/4			赤褐色粒(～1mm)・白色粒(～1mm)少量	良好	橙	内外面不明瞭・外面赤彩	
8	3	SI02	土師器	甕	(13.8)	1/5			(14.8)		白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～2mm)少ない、骨針少量	良好	茶褐～黒褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラナデ	輪積み痕跡明瞭に観察できる
8	4	SI02	土師器	甕	17.0	1/2					白色粒(～0.5mm)・砂粒(～1mm)多い、赤褐色粒(～2mm)・骨針少量	良好	橙～黒褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラナデ	輪積み痕跡明瞭に観察できる
8	5	SI02	土師器	甕			7.6	1/2			白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～0.5mm)・骨針少量	良好	橙～褐	外面ヘラケズリか？不明瞭／内面ヘラナデ	
8	6	SI02	土師器	坏			(4.7)	1/4			赤褐色粒(～1mm)多い	良好	明黄褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
8	1	SI03	須恵器	坏	14.0	1/2	8.9	1/2	15.8	5.4	灰～赤灰・緻密／白色粒(～2mm)多い、黒色粒(～2mm)少ない、小礫(～4mm)少量	良好	灰～黄灰	外面口縁部～体部上半ロクロナデ・体部下端～底部回転ヘラケズリ／内面ロクロナデ・中央に同心円状の受け具痕あり	ＴＫ 10 末～ＭＴ 85 前半代　６世紀中葉
8	2	SI03	土師器	甕	(11.6)	1/8					白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～0.5mm)・雲母・骨針少量	良好	橙	内外面ナデ	
8	3	SI03	土師器	甑	(19.8)	1/5	(7.0)	1/3		23.7	白色粒(～3mm)・赤褐色粒(～1mm)多い、骨針少量	良好	橙	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
10	1	SI04	土師器	坏	11.8	3/4			14.2	4.5	白色粒(～1mm)・赤褐色粒(～1mm)少量	良好	明褐～黒	外面口縁部ロクロナデ・体部～底部ヘラケズリ／内面口縁部ロクロナデ・体部ヘラナデ	
10	2	SI04	土師器	坏					13.4		白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～1.5mm)・骨針少量	良好	橙～明褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
10	3	SI04	土師器	坏	(13.8)	1/6					白色粒(～0.5mm)多い、雲母少ない、骨針少量	良好	橙～黒	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面口縁部～体部ナデ・黒色処理	
10	4	SI04	土師器	坏	(14.6)	1/5					白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～0.5mm)・骨針少量	良好	明黄褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ・赤彩／内面ヘラナデ・赤彩	
10	5	SI04	土師器	坏	15.2	2/3			15.4	5.5	白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～1mm)少ない	良好	明褐～暗灰	外面口縁部ナデ・体部～底部ヘラケズリ・赤彩／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ	
10	6	SI04	土師器	坏	(14.0)	1/5			15.5		白色粒(～0.5mm)多量、灰白色粒(～4mm)多い、骨針少量	良好	明黄褐～暗灰	外面ヘラケズリ・赤彩／内面ヘラナデ・赤彩	
10	7	SI04	土師器	坏	11.6	3/4				3.2	白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～2mm)・雲母・骨針少ない	良好	橙	外面口縁部～底部ヘラケズリ後口縁部ナデ／内面ヘラナデ	
10	8	SI04	土師器	鉢	12.0	3/4					白色粒(～1mm)多い、赤褐色粒(～2mm)・骨針少ない	良好	褐～橙	外面口縁部～胴部ヘラケズリ／内面口縁部～胴部ヘラナデ	9 と同一個体の可能性あり
10	9	SI04	土師器	鉢			7.6	1/1			白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～1mm)少ない、骨針少量	良好	暗褐	外面胴部～底部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	丸底　8 と同一個体の可能性あり
10	10	SI04	土師器	甕			(6.4)	1/5			白色粒(～0.5mm)・砂粒(～1mm)多い、黒色粒(～0.5mm)少ない	良好	赤橙	外面胴部～底部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
10	11	SI04	土師器	甕			6.6	1/1			白色粒(～1mm)多い、砂粒(～2mm)少ない、骨針少量	良好	黒～褐	外面胴部～底部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	P7 内出土　輪積み部分で水平に欠ける　欠け口に断続的な刻みあり
11	12	SI04	土師器	甕	19.8	1/1	6.2	1/1	23.0	25.9	白色粒(～1mm)・砂粒(～2mm)多い、赤褐色粒(～1mm)・骨針少量	やや甘い	明褐～暗褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ・器壁表面ほとんど残らず／内面ナデか？不明瞭	カマド及び P5(貯蔵穴)から分散して出土
11	13	SI04	土師器	甕	19.6	7/8			20.2		白色粒(～1mm)・砂粒(～2mm)多い、骨針少量	良好	茶褐～黒	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	
11	14	SI04	土師器	甕	16.4	7/8	6.1	1/1		22.0	白色粒(～1mm)多量、骨針多い、赤褐色粒(～1mm)・砂粒(～1mm)少ない	良好	赤褐～暗褐	外面口縁部ナデ・胴部～底部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	カマド付近でつぶれて出土
11	15	SI04	土師器	甕	17.0	1/1	7.1	1/1		25.5	白色粒(～0.5mm)多量、赤褐色粒(～1mm)少量、骨針少ない	良好	褐	外面口縁部ナデ・胴部～底部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	カマド付近出土
11	16	SI04	土師器	甕			(6.8)	1/4			白色粒(～0.5mm)・骨針多い、石英少量	良好	橙～褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
12	17	SI04	石器	叩き・磨り石							薫青石ホルンフェルス			端部に叩き痕、側面に磨り痕あり	840.6g
12	18	SI04	石器	叩き・磨り石							砂岩			各面に叩き痕と磨り痕あり	1,033.4g
12	19	SI04	石製品	玉	0.73	1/1				0.23～0.40	滑石		淡緑灰	孔径　2.0-2.2mm	0.334g
12	20	SI04	石製品	玉	0.74	1/1				0.41～0.48	滑石		灰白	孔径　2.5mm	0.430g
12	21	SI04	石製品	玉	0.75	1/1				0.42～0.51	滑石		灰白～淡緑灰	孔径　2.2mm	0.474g
12	22	SI04	石製品	玉	0.73～0.74	1/1				0.30～0.35	滑石		灰白～淡緑灰	孔径　2.5mm	0.315g
12	23	SI04	石製品	玉	0.70～0.73	1/1				0.39～0.43	滑石		暗緑灰	孔径　2.5mm	0.267g
12	24	SI04	石製品	玉	0.70～0.73	1/1				0.28～0.33	滑石		暗灰～淡緑	孔径　2.1-2.5mm	0.210g
12	25	SI04	石製品	玉	(0.72)	1/2				0.40	滑石		灰白～淡緑	孔径　(2.2)mm	(0.186)g　半分欠失
12	26	SI04	石製品	玉	0.69～0.74	1/1				0.47～0.50	滑石		暗緑灰	孔径　2.0-2.5mm	0.350g　排土内一括
13	1	SI05	土師器	坏	(13.0)	1/10				(13.5)	白色粒(～0.5mm)・石英・骨針多い、赤褐色粒(～0.5mm)少量	良好	橙	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ	
13	2	SI05	土師器	甕			(6.6)	1/4			赤褐色粒(～2mm)・石英多い、骨針少量	良好	茶～橙	外面胴部ヘラケズリ・赤彩／内面ヘラナデ	
13	3	SI05	須恵器	甕							灰・緻密／白色粒(～0.5mm)・黒色粒(～0.5mm)少量	良好	灰	外面ロクロナデ・櫛による列点文／内面ロクロナデ	
14	1	SI06	須恵器	甑					10.6		明灰・緻密／白色粒(～0.5mm)多量、明黄白色粒(1～2mm)・小礫(～4mm)少量	良好	灰	外面ロクロ成形・体部櫛ナデ・上半に櫛描き工具で波状文・下半は櫛ナデ・一部指ナデ／内面体部上半ロクロナデ・下半は指圧痕残る	5 世紀後半 TK208 並行期頃か
14	2	SI06	土師器	坏					(17.6)		赤褐色粒(～1mm)多量	良好	明橙	内外面不明瞭	
14	3	SI06	土師器	坏	(12.6)	1/4				4.0	赤褐色粒(～1mm)多い	良好	明黄褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
15	4	SI06	土師器	坏	(13.0)	1/8					赤褐色粒(～3mm)・白色粒(～0.5mm)多い、骨針少量	良好	橙	内外面不明瞭・赤彩	

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
15	5	SI06	土師器	坏	(13.4)	1/10			(14.2)		白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～2mm)多い、黒色粒(～1mm)少ない、骨針少量	甘い	橙	内外面剥離・外面に赤彩わずかに残る	
15	6	SI06	土師器	坏	(14.0)	1/8					白色粒(～0.5mm)多い	良好	明茶～赤褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ・赤彩／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ・赤彩	
15	7	SI06	土師器	高坏			(9.2)	1/3			白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～2mm)多い、雲母少量	良好	橙	外面坏部ナデ・脚部ヘラケズリ・赤彩／内面坏部ナデ・脚部ヘラナデ・赤彩	
15	8	SI06	土師器	高坏							白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～1mm)・灰白色粒(～4mm)・石英多い、骨針少量	良好	橙～明褐	外面坏部～脚部ヘラケズリ・赤彩／内面坏部ナデ・赤彩・脚部不明瞭	
15	9	SI06	土師器	手捏	4.4	1/1	3.8	1/1		2.7	白色粒(～0.5mm)多め、骨針少量	良好	橙	指整形	
15	10	SI07	須恵器	甕							明灰・緻密／白色粒(～1mm)少量	良好	灰	外面平行タタキ／内面受け具による青海波文	
15	11	SI07	土師器	坏			(8.4)	1/6			白色粒(～0.5mm)多い、骨針・石英少量	良好	橙	外面ロクロナデ・高台貼り付け／内面ロクロナデ・黒色処理	
15	12	SI07	土師器	坏	(13.8)	1/8	(6.2)	1/3			白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～1mm)・黒色粒(～1mm)・骨針・雲母少量	良好	橙	外面口縁部～体部ロクロナデ・下端ヘラケズリ・底部手持ヘラケズリ／内面ロクロナデ	
15	13	SI07	土師器	甕	(11.8)	1/4			(12.2)		砂粒(～1mm)・白色粒(～0.5mm)・骨針多い、赤褐色粒(～2mm)・雲母少ない	良好	赤橙～橙	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	
15	14	SI07	瓦	平瓦									橙	凹面布目／凸面縄目タタキ	158.2g
15	15	SI07	瓦	平瓦									明褐	凹面不明瞭／凸面縄目タタキ	102.8g
16	1	SI08	土師器	坏	(15.4)	1/4					白色粒(～0.5mm)・黒色粒(～0.5mm)少量	良好	橙	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ・赤彩／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ・赤彩	
16	2	SI08	土師器	坏	(13.6)	1/3				5.0	砂粒(～1mm)多い、白色粒(～1mm)・赤褐色粒(～1mm)少量	良好	明褐～黒	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ	
16	3	SI08	土師器	高坏	(13.6)	1/4					赤褐色粒(～2mm)・白色粒(～0.5mm)少ない、骨針少量	良好	橙	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ・赤彩／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ・赤彩	
16	4	SI08	土師器	高坏							白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～3mm)多い、骨針少量	良好	橙～明褐	外面脚部ヘラケズリ／内面脚部ヘラナデ・坏部との接合部分棒状工具による調整	
16	5	SI08	土師器	甕	(16.0)	1/6					白色粒(～1mm)多い、赤褐色粒(～1mm)・骨針少量	良好	赤褐～暗褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ後ヘラナデ（ハケ状）／ 内面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラナデ（ハケ状）	
16	6	SI08	土師器	甕			6.2×5.5（楕円形）	1/1			白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～1mm)多い、骨針少量	良好	橙	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
16	7	SI08	土師器	甑	(21.8)	1/5					白色粒(～1mm)・赤褐色粒(～1.5mm)多量	良好	明黄褐～黒	外面ヘラケズリ・赤彩か／内面ヘラナデ	
19	1	SI09	土師器	高坏	(16.1)	1/3				(9.7)	白色粒(～0.5mm)多量、赤褐色粒(～2mm)多い、骨針少量	良好	茶褐	外面ヘラケズリ・赤彩／内面体部～脚部ヘラナデ	
19	2	SI09	土師器	高坏							白色粒(～0.5mm)・赤褐色粒(～3mm)多い、雲母少量	良好	橙	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
19	3	SI09	土師器	高坏							赤褐色粒(～2mm)多い、骨針少量	良好	明褐～橙	外面ヘラケズリ・赤彩／内面ヘラナデ	
19	4	SI09	土師器	高坏			7.8	1/1			白色粒(～0.5mm)多い	良好	橙	外面ヘラケズリ・赤彩／内面ヘラナデ	
19	5	SI09	土師器	高坏			(9.4)	1/3			白色粒(～1mm)・赤褐色粒(～2mm)多い、黒色粒(～1mm)少ない	良好	橙	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
19	6	SI09	土師器	甕	19.6	1/1					白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～1mm)・骨針少ない	良好	明褐～灰褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ後ナデ／内面口縁部～頸部ナデ	カマド右ソデ脇に伏せた状態で出土
19	7	SI09	土師器	甕	(17.2)	1/10					白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～2mm)・黒色粒(～0.5mm)・骨針少ない	良好	橙	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラナデ／内面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラナデ	
19	8	SI09	土師器	甕	12.6	1/3	7.4		14.0	(14.2)	白色粒(～1mm)・赤褐色粒(～2mm)多い、雲母・骨針少ない	良好	橙～黒	外面口縁部～頸部ナデ・胴部～底部ヘラケズリ／内面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラナデ	胴部と底部で接点はないが観察から同一個体と判断
19	9	SI09	須恵器	甕							白色粒(～0.5mm)・黒色粒(～0.5mm)・骨針少量	やや甘い	黒褐～赤褐	内外面ナデ	
19	10	SI09	土師器	甕			5.2	3/4			白色粒(～1mm)多い、骨針少ない	良好	橙	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
19	11	SI09	土師器	手捏	(4.0)	1/6					白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～0.5mm)・骨針少ない	良好	明黄褐	指整形	
20	12	SI09	石器	台石か							黒雲母片岩		暗灰	板状で両面に使用したとみえる凹みあり	427.8g
20	13	SI09	石器	叩き・磨り石							砂岩		灰褐	端部や側面に叩き痕・磨り痕あり	478.9g
21	1	SI11	土師器	坏	(17.0)	1/6			(18.3)		白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～1mm)少ない	良好	赤橙～黒	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
21	2	SI11	土師器	甕	(14.4)	1/3					白色粒(～0.5mm)・ 赤褐色粒(～1mm)・骨針少ない	良好	暗褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラナデ	
21	3	SI11	土師器	甕			(5.6)	1/4			白色粒(～0.5mm)多い	良好	橙	外面胴部～底部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
22	1	SI12	土師器	坏	(15.6)	1/4					赤褐色粒(～1mm)多い、白色粒(～0.5mm)少ない	良好	橙～明褐	外面不明瞭・赤彩／内面不明瞭	
22	2	SI12	土師器	坏	(14.0)	1/8					白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～1mm)・骨針少ない	良好	明黄褐	外面口縁部ナデ・体部不明瞭／内面ナデ後ヘラミガキ(放射状)	
23	1	SI10	土師器	坏	14.2	1/2				4.0	赤褐色粒(～1.5mm)多め、白色粒(～0.5mm)少ない	良好	明褐～明橙	外面不明瞭／内面ヘラナデか？不明瞭	
23	2	SI10	土師器	高坏	14.2	1/2					白色粒(～0.5mm)少ない、赤褐色粒(～1mm)・骨針少量	良好	橙	外面ヘラケズリか？不明瞭部分多い／内面ヘラナデか？不明瞭	
23	3	SI10	土師器	甕	11.0	3/4	6.2	1/1		10.7	白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～1mm)・骨針少ない	良好	赤褐～暗褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラナデ・胴部下端一部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
23	4	SI10	土師器	甕			5.8	1/1			白色粒(～0.5mm)多め、赤褐色粒(～1mm)少ない	良好	褐～橙	外面胴部ヘラケズリ・底部無調整／内面ヘラナデ	底面に敷物痕？有り
23	1	SK02	弥生土器	無頸壺	(15.0)	1/4					白色粒(～1mm)・赤褐色粒(～0.5mm)多い、石英・骨針少量	良好	黄褐	外面口唇部細縄文・口縁部単節羽状縄文施文／内面剥離	
23	2	SK02	弥生土器	甕							赤褐色粒(～1mm)多い、白色粒(～0.5mm)・石英・骨針少量	良好	橙	頸部外面に連続刺突／内面剥離	
23	3	SK02	弥生土器	壺か					(23.8)		白色粒(～1mm)・砂粒(～2mm)・骨針多い	良好	黄褐	外面ヘラナデか？不明瞭・赤彩／内面ヘラナデか？不明瞭	
23	4	SK02	弥生土器	甕			5.8	1/3			白色粒(～0.5mm)・骨針多い、赤褐色粒(～0.5mm)・雲母少量	良好	赤褐	外面胴部～底部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
24	1	SK10	土師器	甕							白色粒(～0.5mm)多量、石英多い、赤褐色粒(～1mm)・骨針少量	良好	明褐	外面櫛描き文による三角文／内面ハケメ	古墳時代前期
24	1		石器	縦長剥片							珪質頁岩				旧石器時代　18.2g
27	1	SI13	土師器	坏	15.4	3/4				5.4	砂粒(～1mm)少ない、赤褐色粒(～1mm)・骨針少量	良好	明褐	外面口縁部ナデ・体部～底部ヘラケズリ／ 内面口縁部～体部ナデ後ヘラミガキ(放射状)後口縁部と体部の境界を棒状工具でナデ	カマド右ソデ脇出土
27	2	SI13	土師器	坏	14.3	1/1				3.7	赤褐色粒(～3mm)多い	良好	明黄褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ・赤彩／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ・赤彩	P2内出土
27	3	SI13	土師器	坏	14.3	1/2				(3.2)	白色粒(～0.5mm)多い、赤褐色粒(～1mm)少量	良好	橙～暗褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ	

挿図番号	遺物番号	遺構名	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
27	4	SI13	土師器	坏	13.6	1/2				(5.1)	黒色粒（～1mm）少ない	甘い	橙	内外面不明瞭	カマド右ソデ内出土
27	5	SI13	土師器	坏	14.6	1/2				3.8	赤褐色粒（～0.5mm）・骨針少量	良好	明黄褐	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ・赤彩／内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ・赤彩	
27	6	SI13	土師器	鉢	(9.2)	1/6	6.4	1/1		7.0	白色粒（～1mm）・砂粒（～2mm）多い、赤褐色粒（～1mm）少ない、骨針少量	良好	橙～暗褐	外面ヘラケズリか？ほぼ剥離／内面ヘラナデか？ほぼ剥離	
27	7	SI13	土師器	甕	(17.4)	1/3			(20.0)		白色粒（～0.5mm）多い、赤褐色粒（～1mm）・骨針少量	良好	明黄褐～暗褐	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	P2 内出土
27	8	SI13	土師器	甕	17.6	3/4					白色粒（～0.5mm）多い、赤褐色粒（～1mm）・骨針少量	やや甘い	橙	内外面ナデ	カマド左ソデ脇遺物集中地点出土
27	9	SI13	土師器	甑	(14.6)	1/4					白色粒（～0.5mm）・砂粒（～0.5mm）多い・骨針少量	良好	橙～暗褐	内外面不明瞭	カマド左ソデ脇遺物集中地点出土
27	10	SI13	土師器	甕			4.8	1/1			白色粒（～0.5mm）多い、骨針少ない	良好	褐～赤褐	外面胴部～底部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	カマド左ソデ脇遺物集中地点出土
27	11	SI13	土師器	甕			6.0	3/4			白色粒（～0.5mm）多い、赤褐色粒（～1mm）・骨針少ない	良好	橙～黒	外面胴部～底部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	カマド左ソデ脇遺物集中地点出土
27	12	SI13	弥生土器	甕	(19.2)	1/8					白色粒（～0.5mm）・赤褐色粒（～1mm）多い、骨針少量	良好	橙～赤褐	口唇部交互押捺（細かい繊維か）・外面剥離／内面口縁部ヘラナデ	
27	13	SI13	土師器	壺	(10.2)	1/4					白色粒（～0.5mm）多い	やや甘い	明黄褐	内外面不明瞭　ナデか？	古墳時代前期土師器
27	14	SI13	土師器	甕	(17.0)	1/8					橙色粒（～1mm）多量	やや甘い	灰褐	内外面ハケナデ	古墳時代前期土師器
27	15	SI13	土師器	甕							赤褐色粒（～0.5mm）・白色粒（～0.5mm）・骨針少量	良好	明褐	外面ハケナデ／内面ナデ	古墳時代前期土師器
27	16	SI13	土師器	土錘	2.2	1/1		1/1		2.0	赤褐色粒（～0.5mm）少ない、骨針少量	良好	明黄褐		7.6g
27	17	SI13	土師器	土錘	2.1	1/1		1/1		1.9	骨針少量	良好	明黄褐		6.5g
27	18	SI13	土師器	土錘	0.8	1/1		1/1		0.9	白色粒（～0.5mm）・骨針少量	良好	橙		0.4g
29	1	SI14	須恵器	蓋	(18.8)	1/10					灰・緻密／白色粒（～0.5mm）多い、骨針少量	良好	灰	内外面ロクロ成形	
29	2	SI14	土師器	甕					(26.6)		白色粒（～0.5mm）多い、赤褐色粒（～1mm）・雲母・骨針少量	良好	褐～暗褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
29	3	SI14	土師器	甕	(21.6)	1/10			(22.2)		白色粒（～0.5mm）多い、雲母・骨針少量	やや甘い	褐～黒褐	外面胴部ヘラケズリか？剥離／内面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラナデ	
31	2	SI15	土師器	皿	14.6	1/4	6.8	1/2		2.2	白色粒（～1mm）多い、赤褐色粒（～0.5mm）・骨針少量	良好	橙	外面ロクロナデ・体部下端回転ヘラケズリ・底部手持ちヘラケズリ／内面ロクロナデ	
31	3	SI15	土師器	坏	13.0	2/3	7.4	1/1		4.0	白色粒（～0.5mm）少ない、赤褐色粒（～0.5mm）・黒色粒（～1.5mm）・骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・器壁剥離	
31	4	SI15	土師器	坏	(12.4)	1/30	7.4	3/4		4.0	白色粒（～0.5mm）多い、骨針少量	甘い	褐～黒褐	内外面ロクロナデ・体部下端ヘラケズリ・底部ヘラケズリ	
31	5	SI15	土師器	甕	(20.0)	1/8					白色粒（～0.5mm）多い、赤褐色粒（～1mm）・黒色粒（～0.5mm）・骨針少量	やや甘い	褐～暗褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
31	6	SI15	土師器	甕	(13.6)	1/6			(15.8)		白色粒（～0.5mm）多い、黒色粒（～0.5mm）少ない、赤褐色粒（～0.5mm）・石英・骨針少量	やや甘い	橙～茶褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	
31	7	SI15	土師器	甕	(11.0)	1/8					白色粒（～0.5mm）少ない、雲母・骨針少量	良好	赤褐～暗褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
31	8	SI15	須恵器	甕							明灰色・緻密／白色粒（～1mm）少ない、骨針少量	良好	灰	外面頸部ナデ・胴部平行タタキ／内面受け具による青海波文	
32	9	SI15	須恵器	甕	(26.4)	1/6					白色粒（～1mm）多量、砂粒（～2mm）・骨針少量	良好	暗褐～黒褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部平行タタキ・胴部下半ヘラケズリ／ 内面無文受け具痕・部分的にナデ	千葉産　頸部に焼成前の歪み有り　当初から割れていた可能性も
32	10	SI15	須恵器	甕			13.2	1/1			白色粒（～0.5mm）多い、赤褐色粒（～1mm）・黒色粒（～0.5mm）・骨針少量	良好	暗褐	外面胴部タタキ・胴部下半ヘラケズリ・底部一部ヘラケズリ／内面指ナデ	千葉産　底面に敷物痕（もしくは縄目タタキか）・焼成前の「大」字ヘラ書き有り
32	11	SI15	須恵器	甕			14.4	3/4			白色粒（～0.5mm）多い、黒色粒（～0.5mm）少ない、赤褐色粒（～1mm）・骨針少量	やや甘い	赤褐	外面胴部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ／内面ナデ	千葉産　底面に敷物痕有り
32	12	SI15	須恵器	坏	14.0	7/8	7.6	1/2		4.4	白色粒（～1mm）多量、骨針少量	良好	褐～黒褐	内外面ロクロナデ・体部下端一部ヘラケズリ・底部ヘラケズリか？	千葉産
32	13	SI15	灰釉陶器	瓶類							灰白・緻密／白色粒（～1mm）多い、黒色粒（～1mm）少ない	良好	釉色オリーブ	内外面ロクロナデ・外面全面に灰釉	
33	1	SI16	須恵器	蓋	9.8	1/3			10.2		明灰色・緻密／白色粒（～0.5mm）多い	良好	灰	外面ロクロナデ／内面ロクロナデ後中央部分を指ナデ	
33	2	SI16	須恵器	坏	13.2	3/4	7.6	1/1		4.1	灰白・緻密／白色粒（～0.5mm）・黒色粒（～1mm）多い	やや甘い	灰～黄灰	内外面不明瞭・器壁表面がかなり溶けている	永田IIIか
33	3	SI16	土師器	坏	(10.8)	1/4	(6.4)	1/4		4.0	赤褐色粒（～1mm）多い、白色粒（～0.5mm）・骨針少量	良好	橙	外面口縁部ナデ・体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリか（不明瞭）／ 内面口縁部ナデ・体部ヘラナデ	
33	4	SI16	土師器	甕			(7.6)	1/3			白色粒（～0.5mm）・骨針多い、雲母少量	やや甘い	褐～赤褐	外面ヘラケズリか？剥離／内面ヘラナデ	
33	5	SI16	須恵器	甕							白色粒（～0.5mm）多い、赤褐色粒（～1mm）少ない、黒色粒（～0.5mm）・骨針少量	良好	黒褐	外面平行タタキ／内面ナデ	千葉産
33	6	SI16	須恵器	甕							白色粒（～0.5mm）多量、雲母・骨針少ない、黒色粒（～0.5mm）少量	良好	黒褐	内外面ナデ	千葉産
33	1	SI17	土師器	高坏							白色粒（～0.5mm）・赤褐色粒（～1mm）多い、骨針少量	良好	赤橙	外面坏部ヘラケズリ・脚部不明瞭・赤彩／内面ヘラナデか・脚部に孔あり	
33	2	SI17	土師器	高坏							白色粒（～0.5mm）・赤褐色粒（～1mm）多い、黒色粒（～0.5mm）少ない	良好	橙～黒褐	内外面不明瞭・脚部に孔あり	
33	3	SI17	土師器	高坏			(13.0)	1/8			白色粒（～0.5mm）多い、赤褐色粒（～1mm）・骨針少ない	良好	褐	外面ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
33	4	SI17	土師器	甕	10.0	1/4	5.2	1/1		10.5	白色粒（～0.5mm）多い、赤褐色粒（～1mm）少ない、骨針少量	良好	褐～赤褐	外面口縁部～頸部ヘラナデ・胴部～底部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
33	5	SI17	須恵器	甕							明黄白・粗い／白色粒（～0.5mm）・赤褐色粒（～0.5mm）多い、雲母少量	やや甘い	橙～明黄白色	外面平行タタキ／内面ヘラナデ	千葉産
34	1	SD07	瀬戸美濃陶器	鉄絵皿	(10.6)	1/6	(5.8)	1/6			黄白色・やや粗い／白色粒（～0.5mm）少ない	良好	灰	ロクロ成形・体部下端回転ヘラケズリ・高台貼り付け・見込みに鉄絵・口縁部に釉漬け掛け	見込みに重ね焼き痕あり　近世 17C 頃か

写真図版

小ノ台遺跡周辺垂直写真（1961年撮影）

A区　東南東から

A区　北西から

小ノ台遺跡遠景　北西から

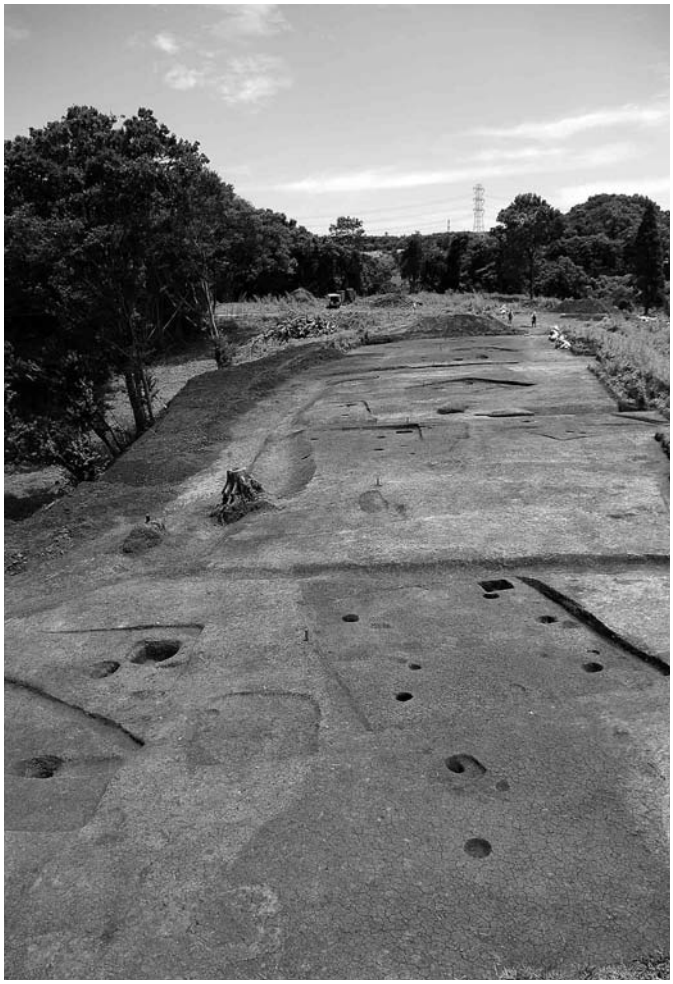
市道40号線(農免道路)と小ノ台遺跡　西北西から

市道40号線から遺跡へとあがる切り通し状の道

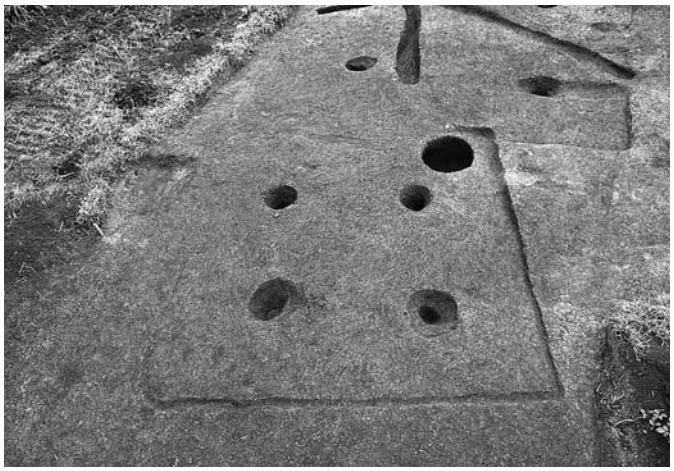
A区(右)とB区遠景　東から

A区北側の谷　東から

A区確認面(現地表面に近いため根の影響が著しい)　南から



A区　西から



SI01 西から

SI01～04　東から

SI01～04　北西から

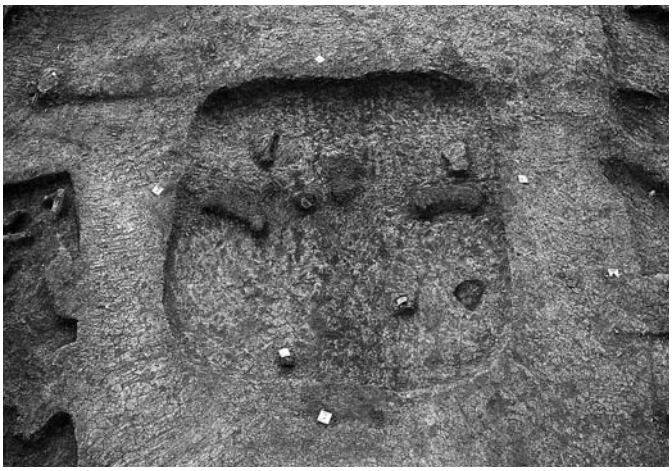
SI01・SI02　西から

SI02　北西から

SI02　遺物出土状況　東から

SI02　P5　土層断面　南から

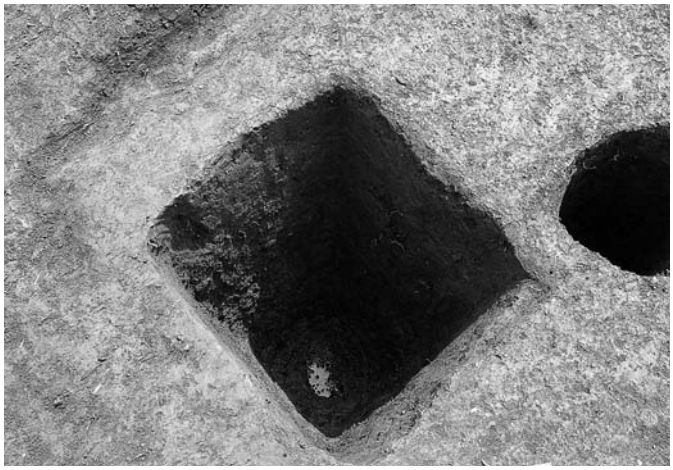
SI02　P5　西から



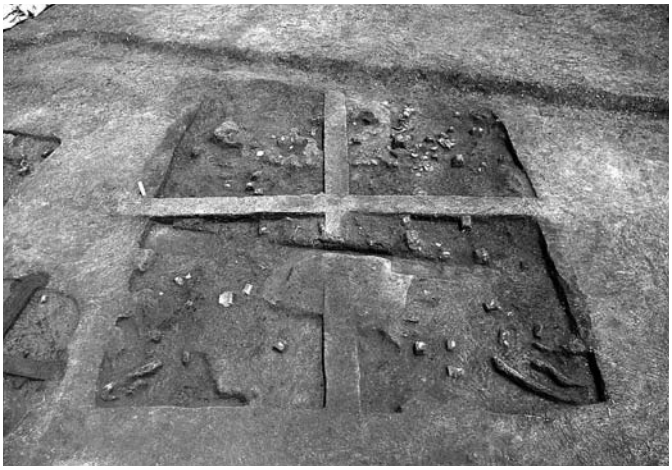
SI03　遺物出土状況　東から

SI04　西から

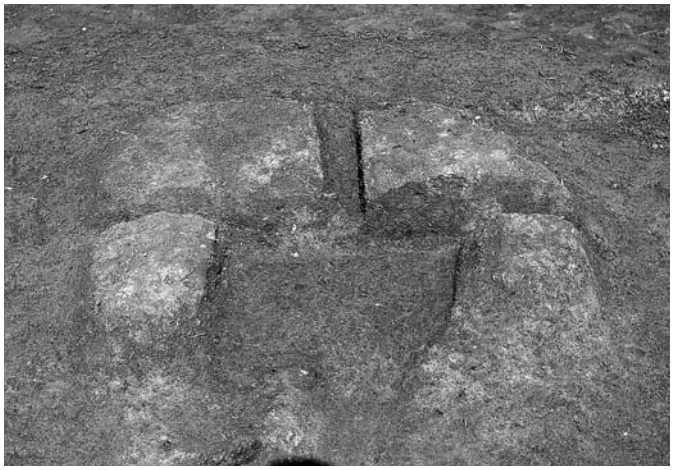
SI04　カマド　西から



SI04　P5　北東から



SI04　遺物出土状況　西から



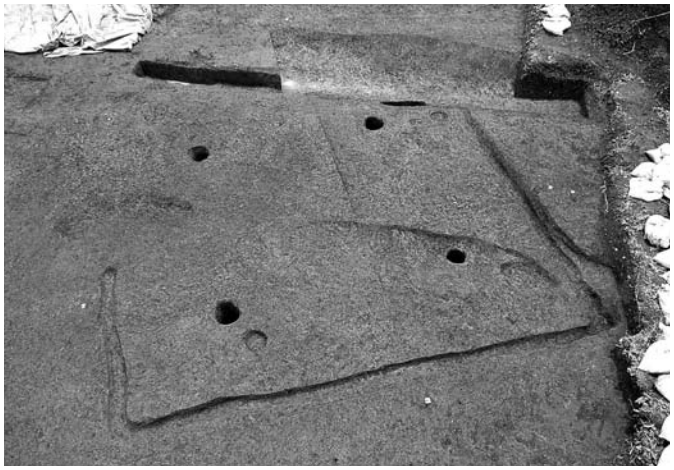
SI04　カマド土層断面　西から

SI04　遺物出土状況　東から

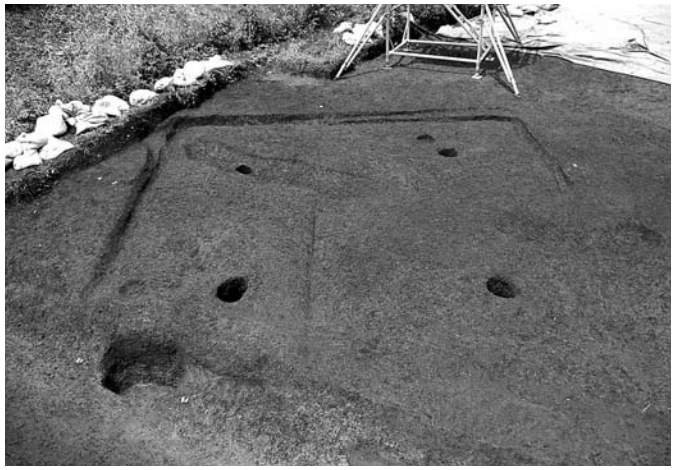
SI04　遺物出土状況　北から

SI04　炭化物出土状況　南から

SI04　P5土層断面　西から



SI05　西から

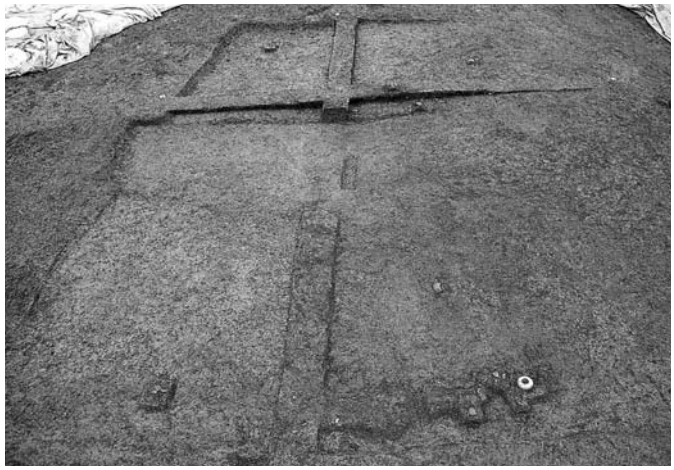


SI05　北東から

SI05　遺物出土状況　西から

SI05　P5とSD02　北から

SI06・07・08　西から



SI06・07　遺物出土状況　東から

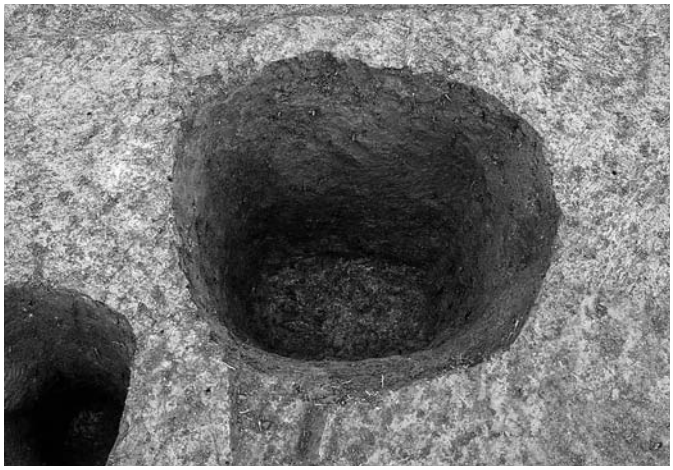
SI06　P5遺物出土状況　北西から

SI06　遺物出土状況　北西から

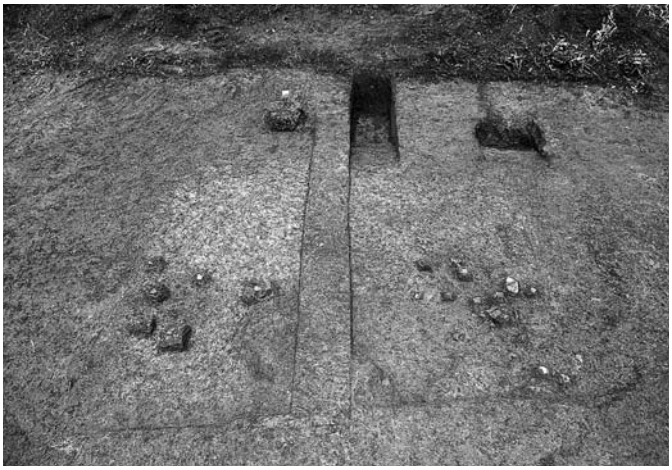
SI07　カマド遺物出土状況　北東から

SI07　カマド土層断面　南西から

SI08　西から

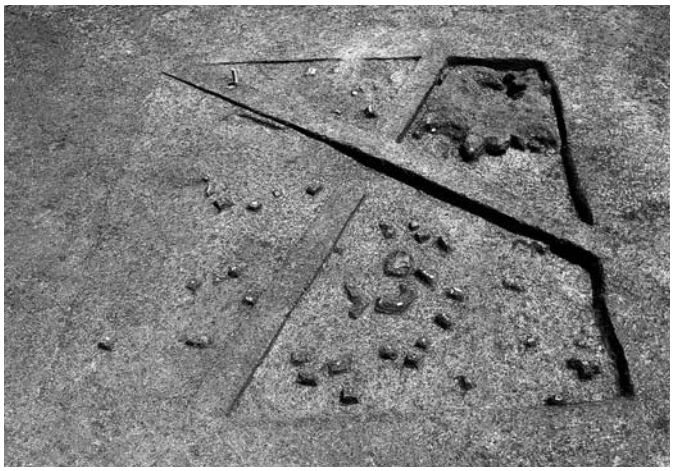


SI08　P5　西から



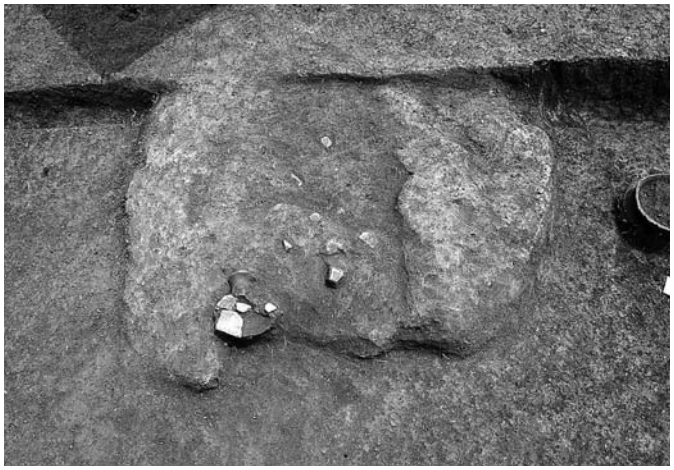
SI08　遺物出土状況　南から

SI09　南西から



SI09　遺物出土状況　南西から

SI09　カマド及びP2・P5確認状況　南西から



SI09　カマド付近遺物出土状況　南西から

SI09　カマド　西から

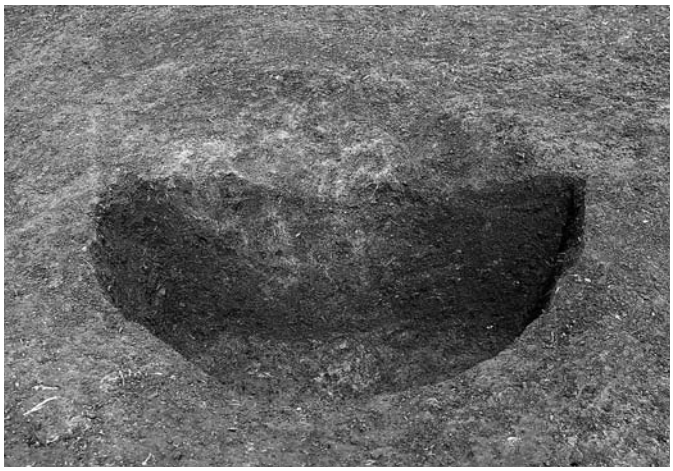
SI09　P5土層断面　南西から

SI09　P5　南西から

SI10・SK02　西から

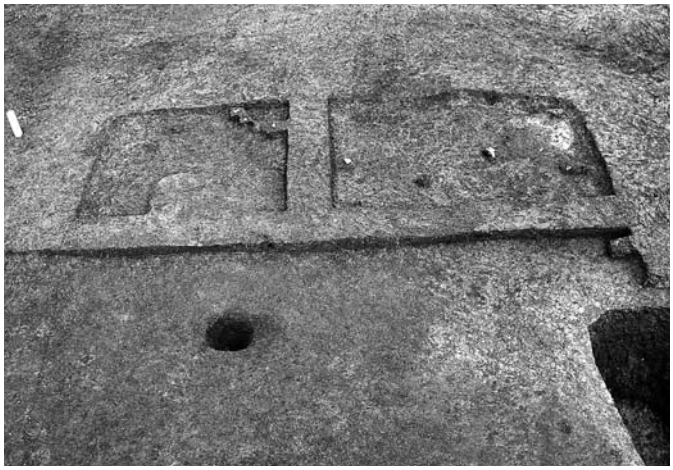
SI10　西から

SI10　遺物出土状況　南西から

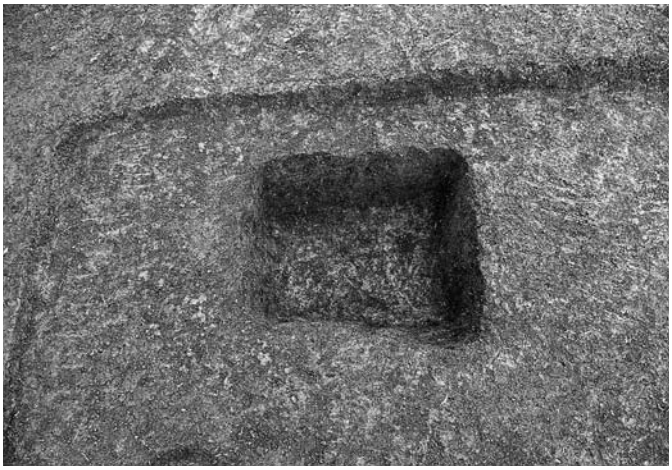


SI10　土層断面　西から

SI11・SK03・SK04　西から



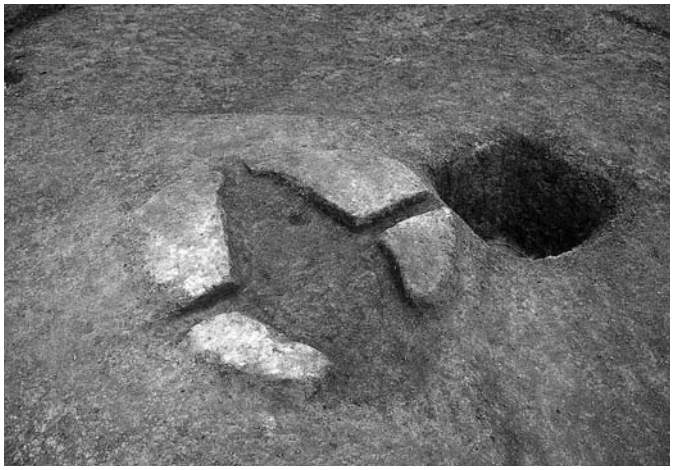
SI11　土層断面　西から



SI11　P6　西から

SI11　P5　遺物出土状況　南西から

SI12　南東から(左端はSK05)



SI12　カマドとP5　南から

B区　SI13・SD06　南東から

SI13　北から

SI13　遺物出土状況　北から

SI13　遺物出土状況　北西から

SI13　カマド付近遺物出土状況　南西から

SI13　P4・P5　南から

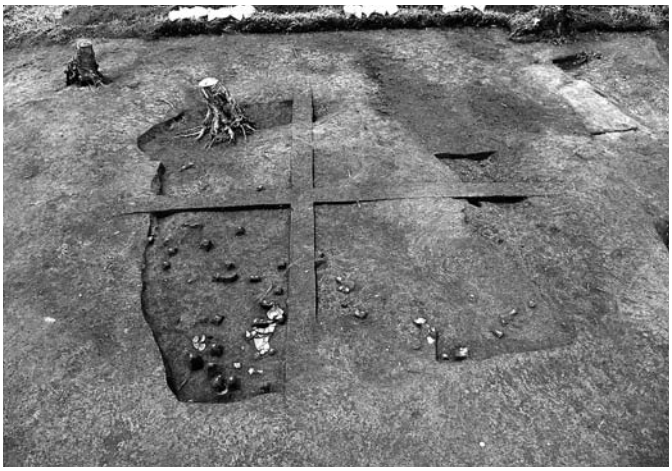
SI15・SI14・SD08確認面　北から

SI14　南から

SI14　カマド付近遺物出土状況　南西から

C区　左からSK08・SI17・SI16・SI15・SD08・SI14・SK07・SD07　北から

SI15　北から



SI15　遺物出土状況　北から

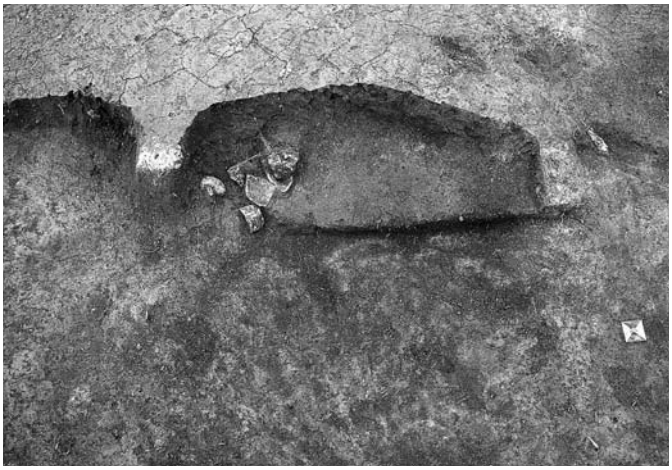
SI15　遺物出土状況　東から

SI15　遺物出土状況　南東から

SI15　カマド及びP1・P2　南西から

SI15　カマド　南から

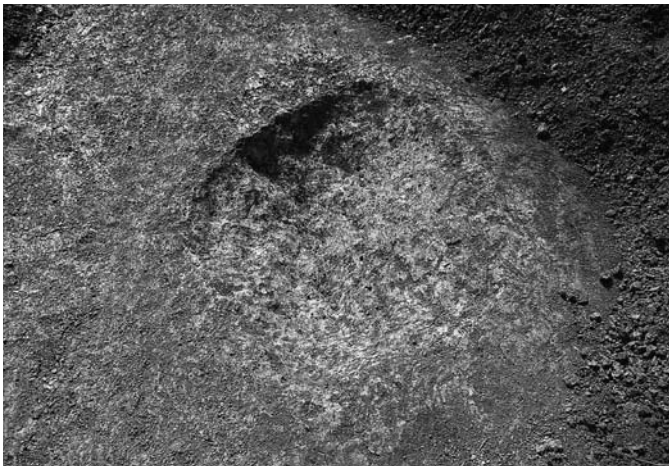
左からSI15・SD08・SI14・SK07・SD07　北から



SI16　カマド　南から

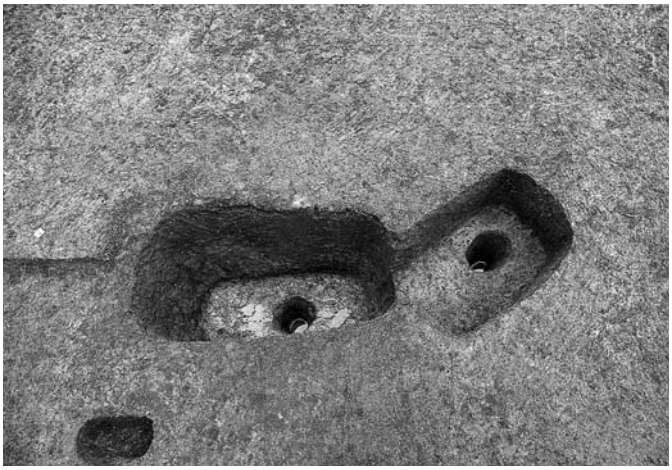
SI17　北から

SI17　遺物出土状況　北西から

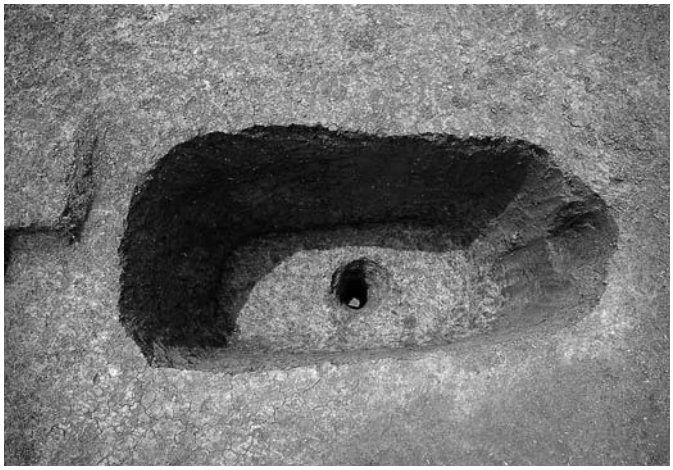


SK01　南東から

SK02　南東から

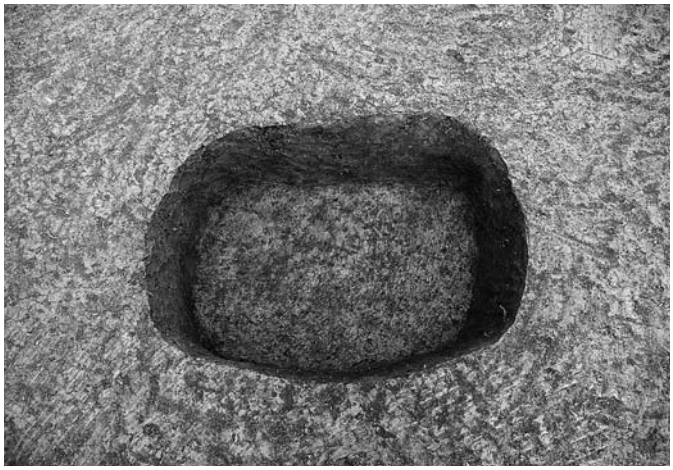


SK03・04　北から



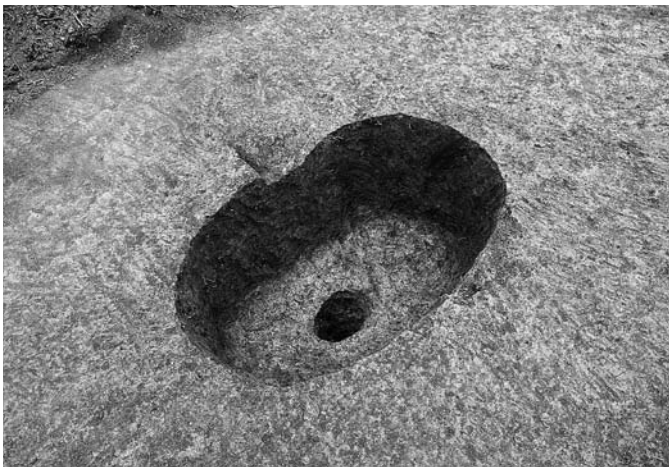
SK04　北から

SK03　土層断面　南東から



SK05　西から

SK05　土層断面　北東から

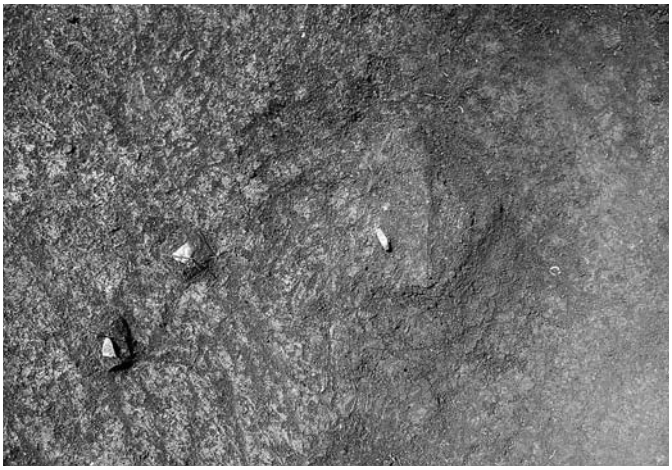


SK06　北西から

SK06　土層断面　南から

SK07　東から

SK08　西から



SK10　遺物出土状況　南から

SD05　西から(手前はSI06)

SD05 東から(手前右はSK01)

SI04

SI09

SI13

SI01－2

SI02－1

SI02－4

SI02－5

SI03－1

SI04－1

SI04－5

SI04－06

SI04－2

SI04－7

SI04－8

SI04－9

SI04－11

SI04－12

SI04－12

SI04－14

SI04－14

SI06－5

SI04－13

SI04－15

SI06－1

SI06－1

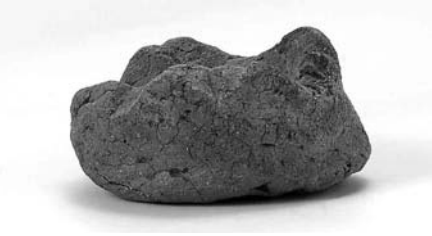
SI06－3

SI06－7

SI06－7

SI06－8

SI06－9


SI06－9

SI07－12

SI07－13

SI08－2

SI08－3

SI08－4

SI08－6

SI08－6

SI09－1

SI09－3

SI09－4

SI09－5

SI09－6

SI09－8

SI09－10

SI10－1

SI10－3

SI10－3

SI10－4

SI11－2

SI13－8

SI11－3

SI13－1

SI13－2

SI13－2

SI13－3

SI13－4

SI13－5

SI13－9

SI13－6

SI13－6

SI13－7

SI13－10

SI13－11

SI13－13

SI15－1

SI15－1

SI15－2

SI15－3

SI15－4

SI15－10

SI15－11

SI15－9

SI15－9

SI15－12

SI16－2

SI16－3

SI16－4

SI17－1

SI17－2

SK02－1

SK02－4

SI17－4

SI17－4

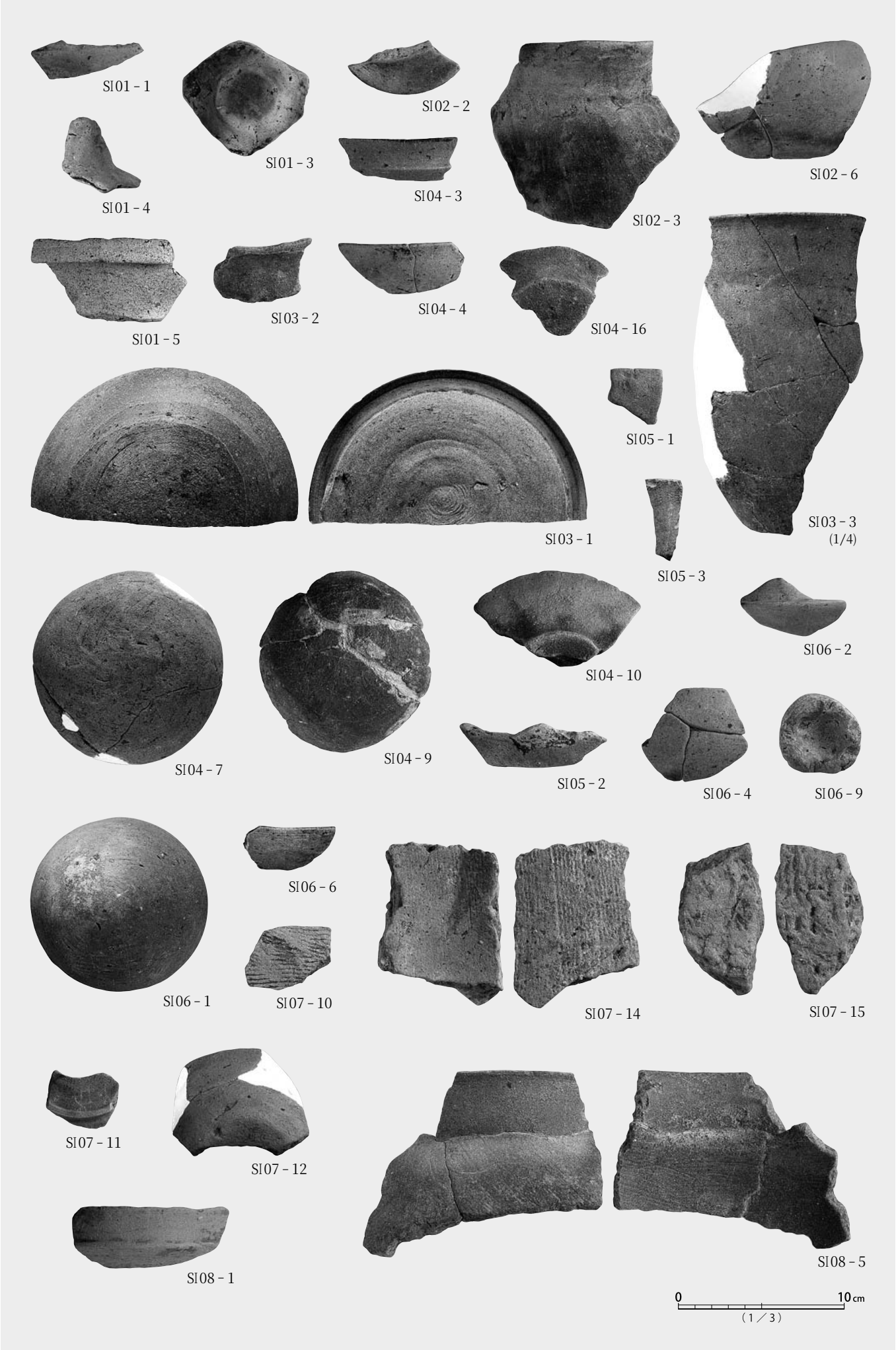
SD07－1

SI04－11

SI04－11

SI06－1

SI15－10

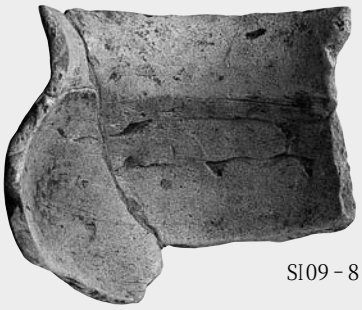

SI01－1
SI01－3
SI02－2
SI02－3
SI02－6
SI01－4
SI04－3
SI01－5
SI03－2
SI04－4
SI04－16
SI05－1
SI03－1
SI03－3
(1/4)
SI05－3
SI04－7
SI04－9
SI04－10
SI06－2
SI05－2
SI06－4
SI06－9
SI06－6
SI06－1
SI07－10
SI07－14
SI07－15
SI07－11
SI07－12
SI08－1
SI08－5
0
10cm
(1／3)

SI08－6

SI08－7

SI09－2

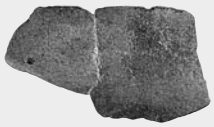
SI09－7


SI09－8

SI10－2

SI09－9

SI09－11
(1/2)


SI11－1

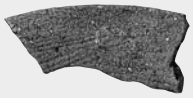
SI12－1

SI12－2

SI13－1

SI13－2

SI13－12


SI13－14

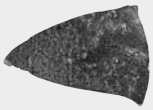
SI13－15

SI14－1

SI14－2

SI14－3

SI15－5


SI15－13

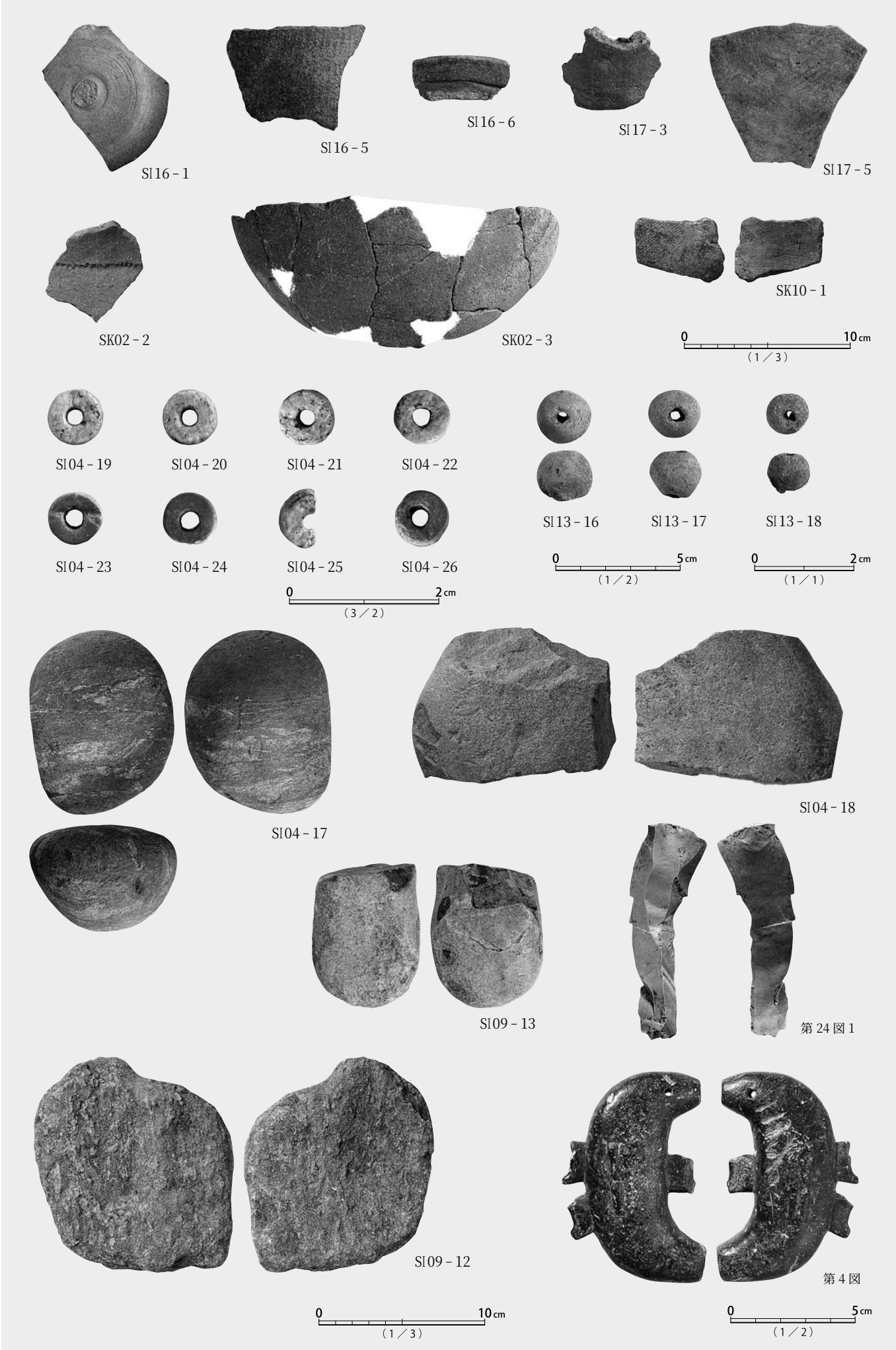
SI15－11

SI15－6

SI15－7

SI15－8

0 10cm
（1／3）


SI16－1
SI16－5
SI16－6
SI17－3
SI17－5
SK02－2
SK02－3
SK10－1
0 10cm
（1／3）
SI04－19
SI04－20
SI04－21
SI04－22
SI04－23
SI04－24
SI04－25
SI04－26
0 2cm
（3／2）
SI13－16
SI13－17
SI13－18
0 5cm
（1／2）
0 2cm
（1／1）
SI04－17
SI04－18
SI09－13
第 24 図 1
SI09－12
0 10cm
（1／3）
第 4 図
0 5cm
（1／2）

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちはらしおのだいいせき
書名	市原市小ノ台遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	牧野光隆
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒290-0011　千葉県市原市能満1489番地　　TEL 0436(41)9000
発行年月日	2010年2月24日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
小ノ台遺跡（おのだいいせき）	市原市福増字小ノ台（いちはらしふくますあざおのだい）477-4・479-1・480・484-1・485-1・486-1・489-1・490-1	12219	セ435 セ448	35° 28′ 19″	140° 08′ 06″	20080627～20080718 20090420～20090717	760㎡／7,600㎡ 確認調査 1,754㎡ 本調査	土砂採取

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小ノ台遺跡	包蔵地	縄文時代 古墳時代後期 奈良・平安時代 近世	陥し穴4基 竪穴建物跡12軒、土坑1基 竪穴建物跡　5軒 土坑2基、溝跡5条	黒曜石剥片 土師器・須恵器・玉・石器 土師器・須恵器・瓦 陶磁器	古墳時代後期及び奈良・平安時代の集落跡を調査した。

要約

養老川中流域において調査事例がそれほど多くない古墳時代後期の集落跡を調査し、竪穴建物跡12軒を検出した。竪穴は5世紀末から7世紀初頭までの分布がみられる。遺構は床面付近しか残っていない浅いものが多く、現表土も浅いことから、近世に大規模な開削が行われ土が移動したものとみられ、その時期の溝跡が廻り、土坑が掘られる。立地的にみて古墳時代集落の中心は西側台地上にひろがっているものとみられる。

奈良・平安時代の竪穴は、南側C区を中心に5軒を検出し、8世紀中頃が2軒、9世紀中頃が3軒であった。

他に、縄文時代の陥し穴4基はA区東端に固まっており、部分的に狩猟の場として利用されていた時期があった。弥生時代後期にも生活の場ではないが、土坑1基が検出された。

近隣の山ノ神遺跡や叶台遺跡では、弥生時代から平安時代にかけての竪穴建物跡や墓域が検出されており、本遺跡の各時期遺構との関連性は極めて高いと考えられる。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第15集

市原市小ノ台遺跡

平成22年2月24日発行

編　集　　市原市埋蔵文化財調査センター
　　市原市能満1489

発　行　　株式会社　城　　装
　　千葉県市原市教育委員会
　　市原市国分寺台中央1-1-1

印　刷　　株式会社　弘　　文　　社
　　市川市市川南2丁目7番2号